

The Inasatru Site
稻佐津留遺跡

The Saianji Site
西安寺遺跡

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2010

熊本県教育委員会

稻佐津留遺跡 西安寺遺跡

—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2010

熊本県教育委員会



稲佐津留遺跡遠景（南より） 稲佐丘陵・背後の木葉山山系（手前は木葉川）

PL.2 遺跡の鳥瞰



1. 稲佐津留遺跡（南より）中央が稻佐丘陵・右奥に木葉集落
2. 稲佐丘陵と右側杉木立が稻佐庵寺跡



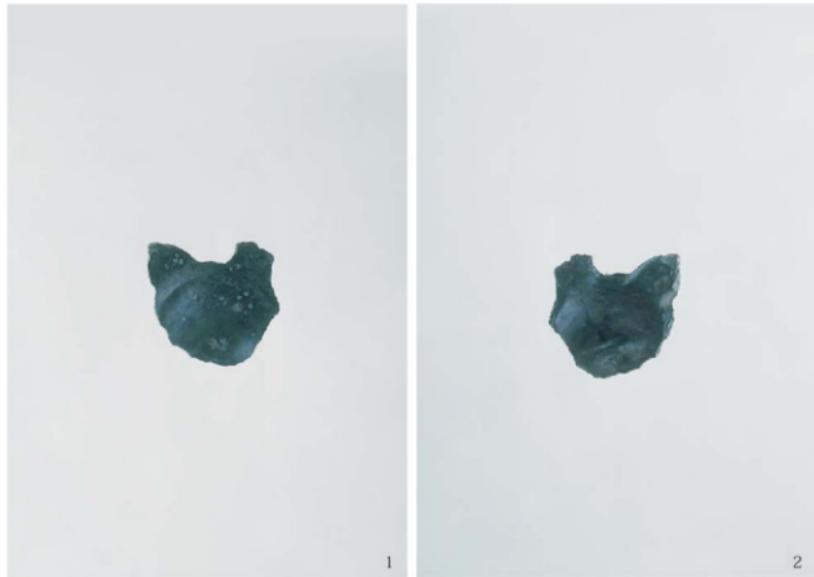
稻佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI003 出土遺物



稻佐津留遺跡 1区竪穴建物 S1005 出土遺物



稻佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI018 出土遺物



1.2. 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 S1015 出土遺物（巴形銅器）
3.4. 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 S1016 出土遺物（四乳細線鳥紋鏡）



稻佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI045 出土遺物（内向花紋鏡）

序文

本文は、九州新幹線建設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した熊本県玉名郡玉東町に所在する「稻佐津留遺跡」・「西安寺遺跡」の発掘調査報告書です。

両遺跡は、熊本県北部に位置し、阿蘇外輪山に源を発する県内の四大河川の一つである菊池川流域に広がる玉名平野上に位置しています。菊池川流域は古くから、熊本の歴史を語るうえで欠かせない多くの遺跡が所在しており、なかでも全国に類をみないほどの密度で装飾古墳が築かれており、古墳文化を語るうえで重要な地域として注目されています。また、古代には菊池市・山鹿市にまたがる古代山城の一つ「鞠智城（国指定史跡）」が所在しています。

このたび、このような歴史的背景を有し文化が生まれてきた熊本県北部域に九州新幹線鹿児島ルート計画が策定され、平成23年3月の開業に向け建設工事が進められてきました。

本書はこのようななかで、玉名平野左岸に所在する「稻佐津留遺跡」・「西安寺遺跡」の調査成果を整理報告したものです。

本書が学術的資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただければ幸いです。

最後に埋蔵文化財発掘調査にご理解、ご協力をいただいた玉名市の皆様を始め玉名市教育委員会、事業団体である独立法人鉄道建設・運輸施設設備支援機構、鉄道建設本部、九州新幹線建設局に対し、心より感謝申し上げます。

平成23年3月31日

熊本県教育長 山本隆生

稻佐津留遺跡・西安寺遺跡発掘調査報告
—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

目 次

第1章 序言	1
1 調査の契機となる九州新幹線について	1
2 事前照会と予備調査の経緯	1
3 稲佐津留遺跡・西安寺遺跡の発掘調査までの経緯	2
4 調査組織	3
5 報告書の作成	4
第2章 調査	6
1 調査地域	6
A 遺跡の位置及び歴史的背景	
B 測量	
C その他	
2 調査日誌抄	10
第3章 各遺跡の報告	13
1 稲佐津留遺跡	13
(1) 遺構	
(2) 出土遺物	
(3) 調査の成果	
2 西安寺遺跡	104
(1) 調査の概要	
(2)まとめ	

写真図版
報告書抄録
奥付

挿図目次 (Fig)

- Fig.1 熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡
Fig.2 玉名平野遺跡地図
- Fig.3 稲佐津留遺跡周辺地形図 S=1/5,000
- Fig.4 西安寺遺跡周辺地形図 S=1/5,000
- Fig.5 稲佐津留遺跡 1区溝 SD007 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.6 稲佐津留遺跡 1区遺構配置図及び土層断面図
- Fig.7 稲佐津留遺跡 1区堅穴建物 SI001 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.8 稲佐津留遺跡 1区堅穴建物 SI002 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.9 稲佐津留遺跡 1区堅穴建物 SI003 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.10 稲佐津留遺跡 1区堅穴建物 SI004・SI005 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.11 稲佐津留遺跡 1区土坑 SK001 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.12 稲佐津留遺跡 1区土坑 SK010 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.13 稲佐津留遺跡 1区土坑 SK033 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.14 稲佐津留遺跡 1区土坑 SK042 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.15 稲佐津留遺跡 2区遺構配置図及び土層断面図 S=1/200
- Fig.16 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI014 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.17 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI015 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.18 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI016 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.19 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI017 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.20 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI018 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.21 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI019 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.22 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI020 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.23 稲佐津留遺跡 2区堅穴建物 SI021 平面図と断面図
- Fig.24 稲佐津留遺跡 2区土坑 SK046 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.25 稲佐津留遺跡 2区土坑 SK048 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.26 稲佐津留遺跡 3区遺構配置図及び溝 SD008・SD009・SD010 土層断面図
- Fig.27 稲佐津留遺跡 3区掘立柱建物 SBO01 平面図と断面図
- Fig.28 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI030 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.29 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI031 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.30 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI032 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.31 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI034 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.32 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI036 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.33 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI044 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.34 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI045 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.35 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI047 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.36 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI048 平面図と断面図
- Fig.37 稲佐津留遺跡 3区堅穴建物 SI049 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.38 稲佐津留遺跡 3区土坑 SK067 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.39 稲佐津留遺跡 3区土坑 SK077 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.40 稲佐津留遺跡 3区不明遺構 SX002 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.41 稲佐津留遺跡 5区中世以降構面 S=1/200
- Fig.42 稲佐津留遺跡 5区掘立柱建物 SBO03 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.43 稲佐津留遺跡 5区弥生後期～古墳時代遺構面 S=1/200
- Fig.44 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI052 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.45 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI053 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.46 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI054 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.47 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI055 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.48 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI056 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.49 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI057 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.50 稲佐津留遺跡 5区堅穴建物 SI058 平面図と断面図

挿図目次 (Fig)

- Fig.51 稲佐津留遺跡 5 区土坑 SK087 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.52 稲佐津留遺跡 5 区土坑 SK088 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.53 稲佐津留遺跡 6 区遺構配置図及び土層断面図
- Fig.54 稲佐津留遺跡 6 区堅穴建物 SI064 平面図と断面図
- Fig.55 稲佐津留遺跡 6 区堅穴建物 SI066 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.56 稲佐津留遺跡 7 区遺構配置図 S=1/100
- Fig.57 稲佐津留遺跡 7 区道路状遺構 SF001 平面図と断面図
- Fig.58 稲佐津留遺跡 7 区堅穴建物 SI073 平面図と断面図
- Fig.59 稲佐津留遺跡 7 区不明遺構 SX004 平面図と断面図及び出土遺物
- Fig.60 稲佐津留遺跡 1 区溝 SD007 (1)、堅穴建物 SI001 出土遺物実測図
- Fig.61 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI002 出土遺物実測図
- Fig.62 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI003 出土遺物実測図-①
- Fig.63 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI003 出土遺物実測図-②
- Fig.64 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI005 出土遺物実測図-①
- Fig.65 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI005 出土遺物実測図-②
- Fig.66 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SK042 出土遺物実測図
- Fig.67 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SK010 (30) 土坑 SK039 (31) 出土遺物実測図
- Fig.68 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SK001 出土遺物実測図
- Fig.69 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI014 出土遺物実測図-①
- Fig.70 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI014 出土遺物実測図-②
- Fig.71 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI014 出土遺物実測図-③
- Fig.72 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI015 出土遺物実測図-①
- Fig.73 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI015 出土遺物実測図-②
- Fig.74 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI016 出土遺物実測図
- Fig.75 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI017 出土遺物実測図
- Fig.76 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI018 出土遺物実測図-①
- Fig.77 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI018 出土遺物実測図-②
- Fig.78 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI019 出土遺物実測図
- Fig.79 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI020 出土遺物実測図
- Fig.80 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK046 出土遺物実測図
- Fig.81 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK048 出土遺物実測図
- Fig.82 稲佐津留遺跡 2 区調査区内出土遺物実測図(製塙土器)
- Fig.83 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI030 (75・76)、SI031 (77~79) 出土遺物実測図
- Fig.84 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI032 出土遺物実測図
- Fig.85 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI034 出土遺物実測図-①
- Fig.86 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI034 出土遺物実測図-②
- Fig.87 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI036 (95)、SI044 (96・97)、SI045 (98~101)
SI047 (102)、SI049 (103) 出土遺物実測図
- Fig.88 稲佐津留遺跡 3 区土坑 SK067 出土遺物実測図
- Fig.89 稲佐津留遺跡 3 区土坑 SK077 出土遺物実測図
- Fig.90 稲佐津留遺跡 3 区不明遺構 SX002 出土遺物実測図-①
- Fig.91 稲佐津留遺跡 3 区不明遺構 SX002 出土遺物実測図-②
- Fig.92 稲佐津留遺跡 3 区不明遺構 SX002 出土遺物実測図-③
- Fig.93 稲佐津留遺跡 5 区堅穴建物 SI052 (120~123)、SI053 (124)、SI054 (125)
SI055 (126~131) 出土遺物実測図
- Fig.94 稲佐津留遺跡 5 区掘立柱建物 SB003 出土遺物実測図
- Fig.95 稲佐津留遺跡 5 区堅穴建物 SI056 (132・133)、SI057 (134) 出土遺物実測図
- Fig.96 稲佐津留遺跡 5 区土坑 SK087 (135)、SK088 (136~138) 出土遺物実測図
- Fig.97 稲佐津留遺跡 6 区堅穴建物 SI066 出土遺物実測図
- Fig.98 稲佐津留遺跡 7 区不明遺構 SX004 出土遺物実測図
- Fig.99 稲佐津留遺跡遺構時代分け図
- Fig.100 製塙土器出土遺物分布図
- Fig.101 西安寺遺跡遺構配置図及び土層断面図 S=1/200

表目次 (Tab)

- Tab.1 九州新幹線(新八代・博多間)建設に伴う玉名都市地区埋蔵文化財発掘調査一覧
Tab.2 稲佐津留遺跡・西安寺遺跡の基準点成果
Tab.3 遺跡地名表
Tab.4 稲佐津留遺跡遺物観察表-①
Tab.5 稲佐津留遺跡遺物観察表-②
Tab.6 稲佐津留遺跡遺物観察表-③
Tab.7 稲佐津留遺跡遺物観察表-④

写真目次 (PL)

- PL.1 稲佐津留遺跡遠景(南より)稲佐丘陵・背後の木葉山山系(手前は木葉川)
PL.2 1. 稲佐津留遺跡(南より)中央が稲佐丘陵・右奥に木葉集落 2. 稲佐丘陵と右側杉木立が稲佐庵寺跡
PL.3 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI003出土遺物
PL.4 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI005出土遺物
PL.5 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI018出土遺物
PL.6 1.2. 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI015出土遺物(巴型銅器)
3.4. 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI016出土遺物(四乳細線鳥紋鏡)
PL.7 稲佐津留遺跡3区竪穴建物SI045出土遺物(内向花紋鏡)
PL.8 稲佐津留遺跡1区調査区完掘状況
PL.9 1. 稲佐津留遺跡2区調査区完掘状況 2. 稲佐津留遺跡3区調査区完掘状況
PL.10 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI001出土遺物
PL.11 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI003出土遺物
PL.12 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI005出土遺物
PL.13 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI003(19)・SI005(27)出土遺物(山陰系楕形土器)
PL.14 1.2. 稲佐津留遺跡1区竪穴建物SI005出土遺物 3. 稲佐津留遺跡2区土坑SK042出土遺物
4. 稲佐津留遺跡2区土坑SK039出土遺物 5. 稲佐津留遺跡2区土坑SK042出土遺物
PL.15 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI014出土遺物
PL.16 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI014出土遺物
PL.17 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI015出土遺物
PL.18 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI018出土遺物
PL.19 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI018出土遺物
PL.20 1. 稲佐津留遺跡2区土坑SK046出土遺物 2. 稲佐津留遺跡3区竪穴建物SI032出土遺物
3. 稲佐津留遺跡3区土坑SK077出土遺物
PL.21 稲佐津留遺跡3区竪穴建物SI031出土遺物
PL.22 稲佐津留遺跡3区竪穴建物SI034出土遺物
PL.23 稲佐津留遺跡3区不明遺構SX002出土遺物
PL.24 1. 稲佐津留遺跡5区竪穴建物SI052出土遺物 2. 稲佐津留遺跡5区竪穴建物SI055出土遺物
PL.25 稲佐津留遺跡5区土坑SK088出土遺物
PL.26 稲佐津留遺跡7区不明遺構SX004出土遺物
PL.27 稲佐津留遺跡調査区出土遺物 1. 鉄器 2. 製塙土器 3. 石製品
PL.28 1.2. 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI015(巴型銅器)
3.4. 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI016(四乳細線鳥紋鏡)
5.6. 稲佐津留遺跡3区竪穴建物SI045(内向花紋鏡)

稻佐津留遺跡・西安寺跡発掘調査報告

—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

第一章 序言

本書は、九州新幹線建設に伴い、平成16年5月27日から平成17年12月28日まで熊本県玉名郡玉東町稲佐津留92-2ほか9筆で実施した「稻佐津留遺跡」、平成18年11月26日から平成19年12月26日まで玉名郡玉東町西安寺1018で実施した「西安寺遺跡」の発掘調査成果をとりまとめたものである。

稻佐津留遺跡・西安寺遺跡が所在する玉名郡玉東町は、熊本県の北部、玉名郡の東南部に位置している。北は玉名郡和水町と山鹿市鹿央町、東は熊本市植木町、西は玉名市、南は熊本市と接している。東西約4キロ、南北9キロあり、総面積は24.40km²を測る。

地形は、町北部に木葉山、山鹿市との境をなす国見山（389m）を主峰とする山々が連なり、町南部には熊本市から延びてくる金峰山三ノ岳（681m）の緩やかな斜面が広がっている。町のやや北側には木葉川が西流し、北からは浦田川、南からは白木川が流入し、最終的に玉名市津留に至り、菊池川へと流入する。

稻佐津留遺跡の標高は約11m、西安寺跡は約63mを測る。

1 調査の契機となる九州新幹線について

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大ならびに地域の振興を図る目的で「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設されるもので、福岡市から熊本市、鹿児島県川内市を経由し、鹿児島市に至るまでの総延長約294kmの大動脈である。完成により、移動時間の短縮、県内総生産にもたらす経済波及効果及び地域間交流の拡大等、多くのメリットがもたらされることから、各界から早期の開業が望まれている。

当該ルートは、昭和48年11月13日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和61年8月29日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成3年8月22日に先行して八代～西鹿児島間について工事実施計画が認可され、同年9月7日に起工した。その後、平成10年3月12日に船小屋～西鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年6月2日に博多～船小屋間が起工し、平成23年3月12日に全線開業となった。

2 事前照会と予備調査の経緯

熊本県内における九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成9年の日本鉄道建設公団九州新幹線建設局【現、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 九州新幹線建設局（以下、「鉄道・運輸機構」と言う。）】から、芦北郡津奈木町内における文化財及び埋蔵文化財の予備調査依頼を契機として、熊本県内における新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が始まった。

今回報告する玉名都市における埋蔵文化財への取り組みは、熊本県八代市を始めとする県南域の調査がほぼ終了し、調査の対象が県央、県北へと移ってきた平成15年度から本格化した。

同年、鉄道・運輸機構から、玉名郡玉東町稲佐から玉名市津留（菊池川）までの予備調査の依頼を始めとし、福岡県との県境までの予備調査が断続的に依頼され、本調査の傍ら予備調査を実施した。

当初、玉東町稲佐津留地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地外であったため、遺跡の有無を確認する試掘調査として実施し、平成15年8月8日付け九建用第一111号で鉄道・運輸機構九州新幹線建設局より県教育長あて予備調査依頼が提出され、平成16年1月26日から3月13日にかけ予備調査を実施した。

1 「玉東町史」通史編「第一章 玉東町の位置と地理的性質」平成7年

2 熊本県教育委員会「梨田下遺跡」熊本県文化財調査第247集 2008

熊本県教育委員会「太郎丸遺跡 西屋敷遺跡 潟兵遺跡」熊本県文化財調査第250集 2009

No.	遺跡名	所在地	博多駅からの 新幹線距離	発掘面積	発掘期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構・遺物
1	長山前田遺跡	玉名郡南関町長山 字前田	66km700m ~ 66km900m	600m ²	H16.4.27 ~ H18.5.21	坂口圭太郎 松森由美 坂本雅矢子 磯田光智	弥生・中世	掘立柱建物、礎列、道路、溝、土坑
2	稲佐津留遺跡	玉名郡玉東町稻佐地内	80km383 ~ 80km598m	2,273.54 m ²	H16.5.27 ~ H17.12.28	尾方圭子 今村和徳 磯田光智	弥生・古墳 古代	掘立柱建物、土坑、溝、 窓穴建物、柱穴群 巴形副器、弥生土器・古式土師器
3	祭田下遺跡	玉名市津留字祭田下 223-2 ほか9筆	78km227m ~ 78km400m	5,762m ²	H16.4.1 ~ H16.10.27	長谷部勇一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	古墳・中世 近世	溝、杭列、土坑 13世紀~14世紀代青磁・白磁、 土師器・中世須恵器・瓦器など
4	小原の小原遺跡	玉名市石賀字小原 345-2 ほか13筆	74km220m ~ 74km300m	2,406m ²	H16.6.14 ~ H16.10.31	坂口圭太郎 松森由美 坂本雅矢子 池山一左	弥生・中世 近世	掘立柱建物、窓穴建物、 土坑、溝 弥生土器・土師器・須恵器・陶器
5	太郎丸遺跡	玉名市大字津留字白附 373-2 ほか13筆	77km840m ~ 78km230m	14,148m ²	H16.11.1 ~ H17.10.31	長谷部勇一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子 水上一輝	古代・中世 近世	土坑、土塁墓、溝、掘立柱建物 土師器・中世須恵器・龍泉系青磁 瓦器、白磁
6	西屋敷遺跡	玉名市大坊字西屋敷 2660-3 ほか4筆	75km230m ~ 75km500m	325m ²	H17.4.9 ~ H17.5.13	長谷部勇一 吉田徹也 早田利宏 園田恭子	中世・近世	五輪塔、近世墓（舟形後背墓石）
7	瀬萩遺跡	玉名市津留字川面 103-3 ほか3筆	78km860m ~ 78km955m	2,395.35 m ²	H17.4.19 ~ H17.9.30	吉田徹也 早田利宏	古墳・古代 中世	窓穴建物、溝、焼成土坑 土師器・須恵器・青磁・白磁ほか
8	両山間口直遺跡	玉名市両山間	76km277m ~ 76km420m	742.92m ²	H18.8.23 ~ H18.10.10	坂口圭太郎 龜田一学	弥生・古墳	水田耕作
9	玉名市奈良原 (古開拓地区)	玉名市南迫間 字古開前 158-2 ほか9筆	76km721m ~ 76km873m	2,537.85 m ²	H19.6.1 ~ H20.1.31	長谷部勇一 吉田徹也 手柴智朗 吉井英二 坂本雅矢子 園田恭子	弥生後期 古墳初頭 古墳後期 古代・中世 近世	弥生後期（窓穴建物・溝状遺構） 古墳時代（窓穴建物・黄銅鏡係鉤輪、 丹戸・溝状遺構・土坑） 古代（脈状建物跡・溝状遺構） 中世（溝状遺構） 近世（粘土探査坑）
10	西安寺遺跡	玉名郡玉東町西安寺 1018	— (工事用道路)	518m ²	H18.11.26 ~ H19.12.26	坂口圭太郎	中世・近世	溝、土坑、柱穴

Tab. 1 九州新幹線（新八代・博多間）建設に伴う玉名都市地区理蔵文化財発掘調査一覧

この調査の結果、ここで報告する「稲佐津留遺跡」を始めとして、「瀬萩遺跡」「祭田下遺跡」「太郎丸遺跡」を確認し、鉄道・運輸機関あて平成16年3月2日付け教文第3317号で回答し、工事にあたっては事前の協議が必要な旨を通知するとともに遺跡地図への登録をおこなった。

また、西安寺遺跡は同地区での新東電変電所建設に伴う付け替え道路工事として計画が上がり、本線部とは別に予備調査を実施した結果、埋蔵文化財を確認し、当初の計画通り工事をおこなう際には、発掘調査が必要となる旨を通知した。その後の鉄道・運輸機関、県文化課で保存に関する協議を実施したが、設計変更等が不可能と判断されたを受け、発掘調査に着手した。

その後、随時、鉄道・運輸機関から提出され埋蔵文化財が確認された案件について、埋蔵文化財の保存協議を実施したが、新幹線本線部と言う成果上保存は難しく、発掘調査に着手していくこととなった。

その結果、玉名都市において新幹線事業に関し、埋蔵文化財の保護に影響を及ぼすと判断された遺跡数は計9ヶ所となり、先に記した「西安寺遺跡」も含めると10箇所（Tab. 1）となった。

3 稲佐津留遺跡・西安寺遺跡の発掘調査までの経緯

稲佐津留遺跡は、鉄道・運輸機関九州新幹線建設局より文化財保護法第57条第4項（現、94条第1項）に基づき、発掘調査の通知が熊本県教育長あて提出され、同時に土地の承諾書を添付した発掘調査依頼も併せて提出された。それを受け、県文化課にて尾方圭子参事、今村和徳文化財保護主事を調査員と選出し、平成16年5月26日付け教文第615号で文化財保護法第58条の2第1項（現、第99条第1項）の通知を提出し、発掘調査に着手した。

その後、用地買収が終った地区毎に発掘調査依頼書が提出され、平成 17 年 9 月 14 日付け教文第 1439 号で提出された文化財保護法第 99 条第 1 項（稻佐字津留 91 番 1）をもって最後の調査区となった。調査第 1 区の発掘調査は平成 17 年 10 月 3 日に着手し、平成 17 年 12 月 28 日をもって終了した。

また、西安寺遺跡は平成 19 年度になり鉄道・運輸機構から「新玉東変電所」に伴う道路付け替え協議がおこなわれ、それを受け予備調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地「西安寺跡」に隣接し遺構の広がりを確認した。平成 19 年 11 月 2 日付け教文第 1865 号で文化財保護法第 99 条第 1 項に基づく通知を提出し、調査に着手した。

4 調査組織

今回報告する調査は、熊本県教育府文化課で実施したものである。以下、各々の発掘調査の責任者と調査担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。（＊は調査非常勤職員、**は整理非常勤職員）

調査・整理主体 熊本県教育委員会

予備調査

2003 年（平成 15 年度）

調査責任者 文化課長 成瀬烈大

調査総括 教育審議員（課長補佐）島津義昭

調査指導 課長補佐（文化財調査第一係担当）高木正文

調査担当者 文化財調査第一係主任学芸員 長谷部善一 宇田員将*

発掘調査

2004 年（平成 16 年度）

調査責任者 文化課長 島津義昭

調査総括 課長補佐 倉岡 博

調査指導 課長補佐（文化財調査第一係）高木正文

調査担当者 文化財調査第一係 参事 尾方圭子、文化財保護主事 今村和徳

2005 年（平成 17 年度）

調査責任者 文化課長 梶野英二

調査総括 課長補佐 倉岡 博

調査指導 課長補佐（文化財調査第一係担当）高木正文

調査担当者 文化財調査第一係 参事 尾方圭子、文化財保護主事 今村和徳

整理報告書作成 2010 年（平成 22 年度）

整理責任者 文化課長 小田信也

整理総括 課長補佐 木崎康弘

整理指導 文化財調査第一係長 村崎孝宏

文化財資料室長 坂田和弘

整理担当者 文化財調査第一係 参事 長谷部善一

唐木ひとみ** 稲葉貴子**

整理作業員 石田敦子（班長） 福島典子（副班長） 小早川隆春 塩田喜美子 今崎光成

田熊敏子 田中裕子 藤井美智子（以上、一次整理）

土田みどり 岩下恵美子 築出直美（以上、二次整理）

調査指導機関及び指導・助言・協力者

奈良大学文学部 文化財学科教授 西山要一

独立行政法人国立文化財研究所 奈良文化財研究所、島根県教育委員会、島根県立古代出雲歴史博物館

大牟田市教育委員会、みやま市教育委員会

玉名市教育委員会、和水町教育委員会、熊本市教育委員会、熊本県立裝飾古墳館
植木町教育委員会（現・熊本市教育委員会）、宇土市教育委員会、甲佐町教育委員会、玉東町教育委員会
牛嶋 茂 足立克己 平石 充 坂井義哉 猿渡真弓 竹田宏司 中原幹彦
美濃口雅朗 益永浩二 増田直人 林田和人
原田範昭 藤本貴仁 西口貴志 西山由美子 檀佳克 宮本利邦 宮本千恵子
田中康雄 兵谷有利 末永 崇 荒木隆宏 古関敬士 毛利恒彦 宇田員将 上高原聰
尾形主子 吉田徹也 松森由美 青木勝士 坂口圭太郎 池田朋生 木村龍生 北原美和子

調査（整理）に伴う委託業務

測量業務一式（遺構実測含む）

株式会社 理蔵文化財サポートシステム

空中写真撮影 九州航空株式会社

整理業務（一次整理業務、遺構・遺物デジタルトレース、遺物実測（土器・石器））

株式会社 理蔵文化財サポートシステム

遺物写真撮影 写測エンジニアリング株式会社

5 報告書の作成

報告書の作成は、熊本県文化財資料室（熊本市城南町沈田1667番地）にて実施した。平成21年度に一次整理に着手し、平成22年度に図版作成、原稿執筆をおこなった。発掘調査及び出土遺物の整理業務は、文化財調査第一係が担当し、報告書刊行後の資料は文化財資料室で管理している。

（1）本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。

（2）註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。

（3）本書の編集は、文化財調査第一係長 村崎孝宏、文化財資料室長 坂田和弘の指導のもと、長谷部・唐木がおこなった。

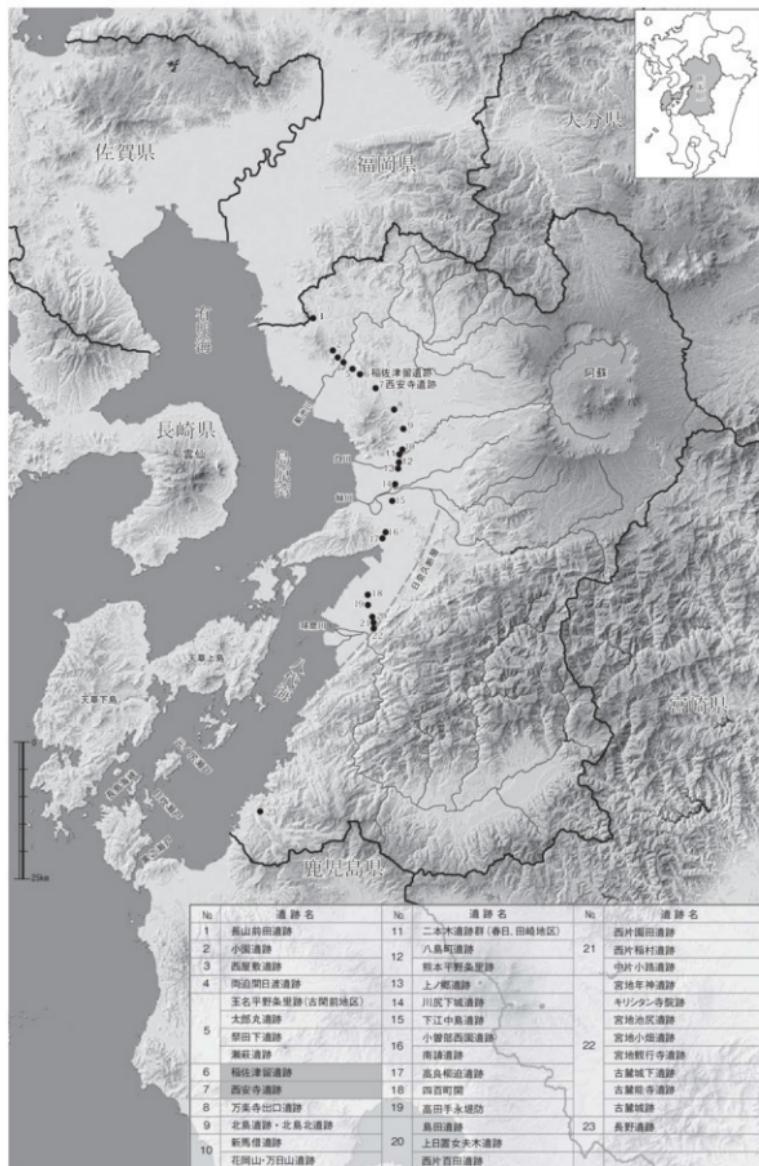


Fig.1 熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した道路

第2章 調査

1 調査地域

A 遺跡の位置及び歴史的背景

稻佐津留遺跡は、熊本県玉名郡玉東町大字稻佐字津留に位置する。稻佐地区は、玉名市安楽寺地区と接し、北東側一帯には木葉山（標高 268m）を中心として、遠くは和水町や山鹿市鹿央町に裾部を伸ばす標高約 200～400m の山稜地が広がっている。また、南側は金峰山山系の末端丘陵（標高約 70～90m）が南北に伸びている。

遺跡の背後には、木葉山山塊から伸びる舌状の台地が迫り、その先端部上段に古代寺院の一つである「稻佐庵寺」跡が残る。現在は、熊野座神社が鎮座するが、周辺では宇野廉太郎氏らにより、数種類の軒瓦を含む布目瓦が採集されている。その後、昭和 26 年 7 月田邊哲夫は玉名高校考古学部を率いて現地を訪ね測量を行い、「稻佐庵寺」と命名し調査報告書をまとめている。

昭和 46 年、松本雅明氏らは熊野座神社神殿の床下に動いていない礎石があることを発見し、翌年発掘調査を行い、塔跡のみならず、講堂・金堂も復元している。確認された伽藍配置は、「法起寺式」で現在の熊野座神社境内とほぼ重複していたことが確認されている。

これらの調査成果をもとに、昭和 47 年 10 月には熊本県指定史跡に指定され、松本雅明氏の研究成果は『熊本史学』に報告されている。

また、当該地域は背後の木葉山から麓にかけ中世に「稻佐城」¹が築かれている。城跡は、木葉山の南西側裾部上に位置しており、地名や城跡遺構との位置関係から稻佐津留遺跡が立地する付近が、稻佐城に対する麓集落であったとする研究成果が示されている。調査地からは白磁、青磁、瓦質土器（擂鉢）、土師器（糸切り）等が出土している。幾つかの疑問点が提示されているが、出土遺物から年代を推定されており、およそ南北朝期の城跡と見られている。また、明治 10 年に玉東町と隣接する植木町（現・熊本市植木町）を主戦場としておこなわれた「西南の役」時の小銃弾が同地でも 4 発出土している。

平成 7 年に『玉東町史』が編纂された時点では、稻佐津留遺跡と同年代の遺跡と判断される弥生時代から古墳時代の遺跡の報告は少なく、稻佐津留遺跡周辺と目される稻佐庵寺のある台地の南側斜面、天神山古墳の周辺、原倉の東山遺跡などに弥生後期の遺跡が知られている。古墳時代の遺跡は、上古闇古墳、天神山古墳の二基（円墳）、助吉石棺群など墓、墓域として知られているのみで、居住域としての遺跡は確認されていない。

西安寺遺跡は、稻佐津留遺跡と同じ、玉名郡玉東町に所在し遺跡名にも付されている西安寺 1018 に所在している。今回調査を実施した場所は、寺院址として知られている「西安寺跡」の東側に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地「西安寺遺跡（弥生時代包蔵地）」と同「西安寺製鉄遺跡」とに挟まれた丘陵南東側斜面上で発見された新出の遺跡である。また、遺跡の面している傾斜地の下を流れる小河川の下流には、久溝坊埋蔵銭出土地がある。昭和 37 年頃に、西安寺上の原で倒木の根元から、紐に通された状態で出土している。鑄造年代はバラバラであり、貨幣から年代を知ることはできないが、16～17 世紀頃のものと判断されている。² 出土地は、久溝坊と呼ばれており西安寺に関する施設である可能性がある。

1 明治二年（1869 年）生～昭和 35 年（1960 年）没 郷土史家。現熊本市千反郷生まれ。「肥後名家碑文集」、「肥後名家墓誌録」を編纂した。また、放牛地蔵の調査など、その研究は幾年まで続けた。県近代文化功労者。

2 田邊哲夫「稻佐庵寺跡調査報告」「玉名社会科学研究会報」第六号 昭和 28 年 1 月

3 松本雅明「稻佐庵寺の伽藍配図」「熊本史学」第 50 号 昭和 52 年 松本雅明著作集 3 「肥後の国府と古代寺院址の研究」

4 「稻佐城跡」玉東町文化財調査報告第 2 集 玉東町教育委員会 1989

5 「玉東町史」玉東町史編集委員会 玉東町 平成 7 年 1 月 31 日「第 4 章 武士たちの城と館」

6 「建物の性格」熊本大学教授 北野博「稻佐城跡」玉東町文化財調査報告第 2 集 玉東町教育委員会 1989「付論」

7 「西安寺出土の埋蔵銭」松本健郎「玉東町史」玉東町史編集委員会 玉東町 平成 7 年 1 月 31 日 第二編「考古・古代」

B 測量

稻佐津留遺跡、西安寺遺跡の発掘調査を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点は本調査の契機となった九州新幹線建設工事に伴い、鉄道・運輸機構が設置した国土座標系II系に基づく日本測地系により設置している。

2002年（平成14年）4月1日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなつたが、本事業における基準点が日本測地系となっていることから、熊本県内における埋蔵文化財発掘調査で設置する基準点は、すべて日本測地系に基づいて設置している。なお、世界測地との整合をとるために遺跡調査区内の杭の数値を日本測地、世界測地でそれぞれ示す。

	日本測地系		世界測地系	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標
稻佐津留1区 №1	-9088	-36363	-8715.5072	-36583.9430
稻佐津留1区 №2	-9115	-36336	-8742.5085	-36556.9437
稻佐津留2区 №3	-9128	-36323	-8755.5089	-36543.9440
稻佐津留3区 №4	-9136	-36315	-8763.5090	-36535.9438
稻佐津留3区 №5	-9169	-36282	-8796.5106	-36502.9445
稻佐津留5区 №6	-9186	-36266	-8813.5114	-36486.9449
稻佐津留5区 №7	-9197	-36255	-8824.5116	-36475.9451
稻佐津留6区 №8	-9214	-36238	-8841.5123	-36458.9454
稻佐津留6区 №9	-9223	-36230	-8850.5130	-36450.9454
稻佐津留7区 №10	-9139	-36345	-8766.5084	-36565.9435
稻佐津留7区 №11	-9150	-36350	-8777.5088	-36570.9437
西安寺 №1	-12030	-33250	-11657.5755	-33470.9569
西安寺 №2	-12030	-33230	-11657.5758	-33450.9571

Tab.2 稲佐津留遺跡、西安寺遺跡の基準点成果

C その他

(1) 発掘調査は遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。

S A（壜・柵・土塁） S B（建物（竪穴建物以外） S C（廊） S D（溝） S E（井戸） S F（道路）
 S G（池） S H（広場） S I（竪穴建物） S J（土器埋納遺構） S K（土坑・貯藏穴・落とし穴）
 S L（カマド） S M（盛り土・貝塚） S N（水田・畑） S P（柱穴・ピット） S S（礎石・葺石・配石）
 S T（墓・埋葬施設） S U（遺物集積） S W（石垣・防護壁） S X（その他） S Y（窓）
 S Z（古墳・墳丘墓・周溝墓） N R（自然流路）

※上記記号には、本書で使用していない記号も含んでいる。

発掘調査に際し、自然堆積土・遺構土層断面等で用いた土色は『新版 標準土色帖』「農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修』を用いた。また、出土遺物の器壁色観察にも同帖を用いている。

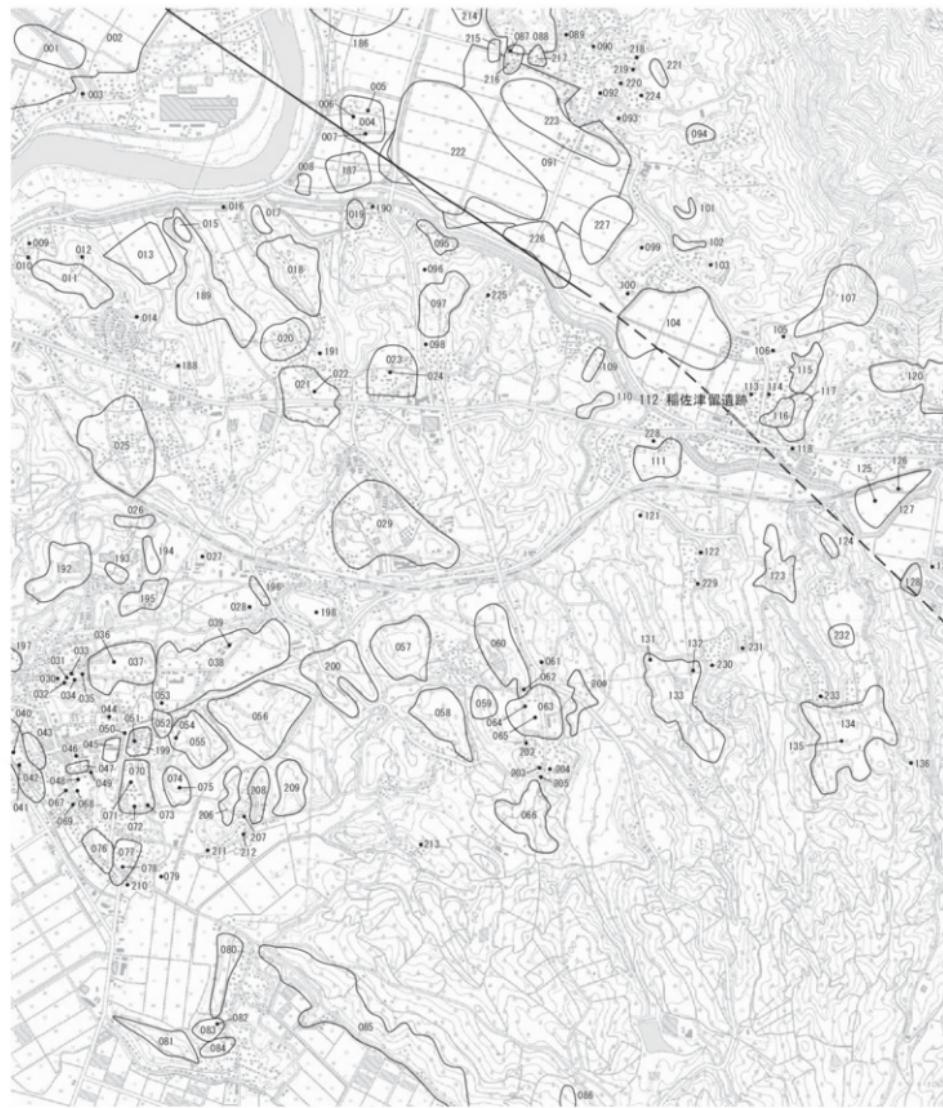


Fig.2 玉名平野遺跡地図



遺跡番号	遺跡名	道路時代
1	明月	漢代～平成
2	大王村丁家古路	古代・中世
3	金加村丁家古路	中世
4	安家古道	
5	安家古道断跡	中世
6	安家古道	中世
7	晋阳古道	中世
8	晋阳中林	漢代～中世
9	金加村丁林古路	中世
10	和阳古方山古道	古道
11	南河古道	隋代～中世
12	南河古道	古道
13	大王村丁古路	古代・中世
14	木村大林古道	古代
15	麻田古道断跡(1~5)	古道
16	城沟古道	中世
17	城沟古道(1~4)	古道
18	石碑路	漢代～中世
19	和阳古方山古道	古代・中世
20	古方古道	中世
21	古方古道	汉代
22	カクシノ原古道	古道
23	吉田久保	漢代～中世
24	久保地古道	古道
25	久保地古道	中世
26	久保地古道	中世
27	羽村古道	古道
28	伊豆大林古道	古道
29	木林	隋代～中世
30	麻田古道	中世
31	大王村丁古道(1~3)	中世
32	中林古道(2)	中世
33	神山古道(2)	中世
34	木空山古道	中世
35	木村古道(2)	中世
36	細川村大林古道	中世
37	木村	漢代～中世
38	伊豆古方古道	古道
39	伊豆の铁道相模线	古道
40	飯田山古方古道	中世
41	伊豆古方古道	中世
42	人井古道	古道
43	唐人村古道	隋代～中世
44	伊豆古方古道	中世
45	伊豆古方古道	隋代
46	船原古道	中世
47	御殿山古道	古道
48	御殿山古道(2)	古道
49	御殿山古道	中世
50	御殿山古道	中世
51	御殿山古道	中世
52	伊豆八幡古道	古道
53	伊豆八幡古道	中世
54	伊豆古方古道	古道
55	伊豆古方古道	古道
56	伊豆古方古道	古道
57	吉田古道	隋代～中世
58	合田	隋代～中世
59	吉田古道	古道
60	吉田古方古道	隋代～中世
61	吉田古方古道	古道
62	吉野古道	古道
63	吉野古道	古道
64	吉野地古道	古道
65	吉野人野古道	古道
66	吉野人野古道	隋代～中世
67	吉野人野古道	古道
68	御殿山古方古道	古道
69	御殿山古方古道	中世
70	御殿山古方古道	隋代
71	御殿山古方古道	古道
72	伊豆古方古道	古道
73	酒井	古道
74	酒井	隋代
75	伊豆古方古道	中世
76	后藤古道(2)	漢代～漢代
77	后藤古道	古道
78	高田父祖の古道	古道
79	吉野古道	中世
80	野坂古道	隋代
81	南条山古道(2)	古道
82	野坂山古道	古道
83	野坂山古道	隋代
84	竹林	隋代
85	野坂山古道	古道
86	山形里	隋代
87	大宝院跡	中世
88	高城	古道
89	高城	隋代
90	松村丁古方古道	古道
91	大名寺古方古道	古代・中世
92	寺前寺古道	中世
93	高城古道	中世
94	御殿山古道	中世
95	上津留	漢代～中世
96	上津留古道	古道
97	御殿山古道	隋代～中世
98	御殿山古道	古道
99	女房古道	中世
100	御殿山古道	中世
101	御殿山古道(2)	古道
102	御殿山古道	古道
103	長坂古道	中世
104	中坂久	古代・中世
105	古坂古道	中世
106	有坂古道(2)	古道
107	坂古道	古道
108	伊豆御殿山古道	中世
109	御殿山古道	古道
110	山田坂古道	古道
111	御殿山古道	古道・中世
112	福原大林古道	隋代・中世
113	ガラス大林古道	古代
114	笠置古道	中世
115	弓の矢	隋代～中世
116	高坂古道	隋代
117	御殿山古道	古代
118	丹波古道(2)	古道
119	宇賀山古道	古道
120	坂	隋代～中世
121	西田古道	古道
122	白音古道	古道
123	古坂	古道・中世
124	御殿山古道	古道
125	日向坂	古道
126	木村小坂	古道
127	坂	古道・中世
128	白音	隋代・古道
129	舟舟古道	中世
130	古坂古道	古道
131	古坂古道	古道
132	坂	古道
133	小坂古道	隋代・古道
134	御殿山古道	古道・中世
135	高武古道(2)	古道
136	白木林古道	古道
137	御殿山古道	古道
138	宇賀山古道	古道・中世
139	大坂古道	中世
140	内沢古道	中世
141	百官本坂	古代
142	有坂古方古道	古道
143	木曾古道	中世
144	御殿山古道	古道
145	御殿山古道(2)	古代
146	下坂	古道
147	御殿山古道	古道
148	谷筋古道	中世
149	田原古道	古道
150	坂	古道
151	日向古道	古道
152	御殿山古道	古道
153	御殿山古道	古道
154	御殿山古道	古道
155	御殿山古道	古道
156	御殿山古道	古道
157	御殿山古道	古道
158	御殿山古道(2)	古道
159	御殿山古道	古道
160	百官本坂	古道
161	百官本坂	古道
162	御殿山古道	古道
163	御殿山古道	古道
164	御殿山古道	古道
165	小坂古道	古道・古道
166	阿波古道	古道
167	御殿山古道	古道
168	御殿山古道	古道
169	前坂古道	古道
170	阿波古道	古道
171	御殿山古道	古道
172	御殿山古道	古道
173	御殿山古道	古道
174	御殿山古道	古道
175	太郎坂古道	古代
176	内豊坂古道	古道
177	御殿山古道	古道
178	御殿山古道	古道
179	西行古道	古道
180	西行古道	中世・近世
181	西行古道	古道
182	久遠坊御殿山古道	古道・中世
183	久遠坊御殿山古道	古道
184	御殿山古道	古道
185	御殿山古道	古道
186	御殿山古道	古道
187	御殿山古道	古道
188	御殿山古道	古道
189	御殿山古道	古道
233	名跡古道	古道

* 本表は現地踏査と本図面調査結果を元にしたものである。
両者に多少の誤差がある。また、未記入の場合は現地で確認する前の調査結果を示す。概して、

Tab.3 遺跡地名表

2 調査日誌抄

本調査は平成16年5月27日から平成18年1月25日まで実施した。以下、調査日誌から特筆すべき事項や内容を簡潔にのべた。

【平成16年5月～10月】

5.27 重機により調査II区の表土剥ぎをおこなう。

6.1 4級基準点測量及びメッシュ杭設置をおこなう。

6.7 調査II区の土層分層をおこない、グリッド毎に5cmずつの掘下げをおこなった。土が乾きやすいため、遺構検出しにくい状況の中、遺物が多数出土した。弥生土器の集中して出土する範囲は、竪穴建物であると見られる。また、遺構の断面の状況から切り合っているものが多い。

7.21 S003より巴形銅器が出土。

8.3 S010の柱穴から破碎鏡、S012から青銅器出土。

9.4 巴形銅器、微製鏡、破碎鏡の出土に伴い、3層（遺物包含層）の完掘を待つて現地説明会を開催。参加者110人。

II区は3層完掘後、4層検出のため重機により掘下げた。

なお、10月上旬でII区の調査は終了。埋め戻しをおこないIII区、IV区の排土置き場とする。

【平成16年11月～12月】

11.1 調査III区、VII区の表土剥ぎを実施。

11.9 4級基準点及びメッシュ杭設置をおこなう。調査は面積の狭いVII区から着手し、その後III区に移行した。当初III区として考えていた箇所の用地取得が遅れたため、すでに取得してあるIV区から調査に着手したが、III区の用地買取が予定より早く終了したためIII区、IV区の調査を併せて調査を実施した。そのため、当初IV区とした調査区名がIII区に吸収され、抹消した。

なお、V区の排土置き場を確保するため、III区は東側から調査を着手し、西側へ進んだ。VII区は12.24で調査を終了。III区は多数の竪穴建物を検出した。切り合いが多いため隨時検出し、調査に着手する。

【平成17年1月～3月】

1.31 VII区の表土剥ぎをおこなう。

2.8 VII区のメッシュ杭設置を実施。

2.23 III区S089の壁から銅鏡出土。なお、III区西側で竪穴建物が切り合い検出される。

3.9 VII区は中世の遺物が出土し、竪穴建物などの検出を実施。柱穴等、検出し掘削を開始。なお、この面の下層がII区、III区でいうところの3層にあたる。

3.25 年度替わりのため、調査を休止する。

【平成17年4月～7月】

4.13 III区から昨年度からの続きで遺構検出に努める。

III区の一部の遺構には炉跡をもつものもあるが、すべての遺構に伴うものではない。

4.28 III区弥生終末から古墳初頭期の調査面完掘状況の撮影。

5.11 大雨によりGrid杭が崩落したため、設置し直す。

7.1 VII区弥生終末から古墳初頭期の調査面完掘状況の撮影。

7.5 IV区の表土剥ぎを実施。

7.21 IV区で道路状遺構を検出、他にも溝状遺構が多く検出されるため、他の調査区のように竪穴建物の検出には至っていない。

【平成17年8月～平成18年1月】

8.2 夏休み体験発掘実施。参加者8名（うち保護者2名）

8.31 VII区の調査終了。

9.12 事務所の倉庫、トイレ移設。I区の表土剥ぎを実施。用地買収の遅れからI区の東半分を先に調査を着手する。4級基準点測量及びメッシュ杭の設置も実施。

9.15 玉東中学校から職場体験のため2名調査に参加。

9.21 I区において柱穴を検出。I区において下層との層別の境が不明瞭であることを確認。

10.3 竪穴建物、柱穴等を検出。

10.11 I区の残りの表土剥ぎを実施。

10.13 I区の残りの4級基準点測量、メッシュ杭設置を実施。

10.29 徳永括教育審議員（教育次長）来訪。

11.19 教育の日に伴い、現場一斉公開を実施。

12.13 I区で工事用道路建設のため先行して調査を実施するが、遺構検出には至らなかった。

12.27 I区において3層以下は、古墳時代初頭と考えられる遺物が多数出土。

1.17 高架橋上からI区、弥生終末から古墳初頭期の調査面完掘状況の撮影。

1.25 I区調査終了。本調査区終了をもって全調査区を終了する。



Fig.3 稲佐津留遺跡周辺地形図

S=1/5,000

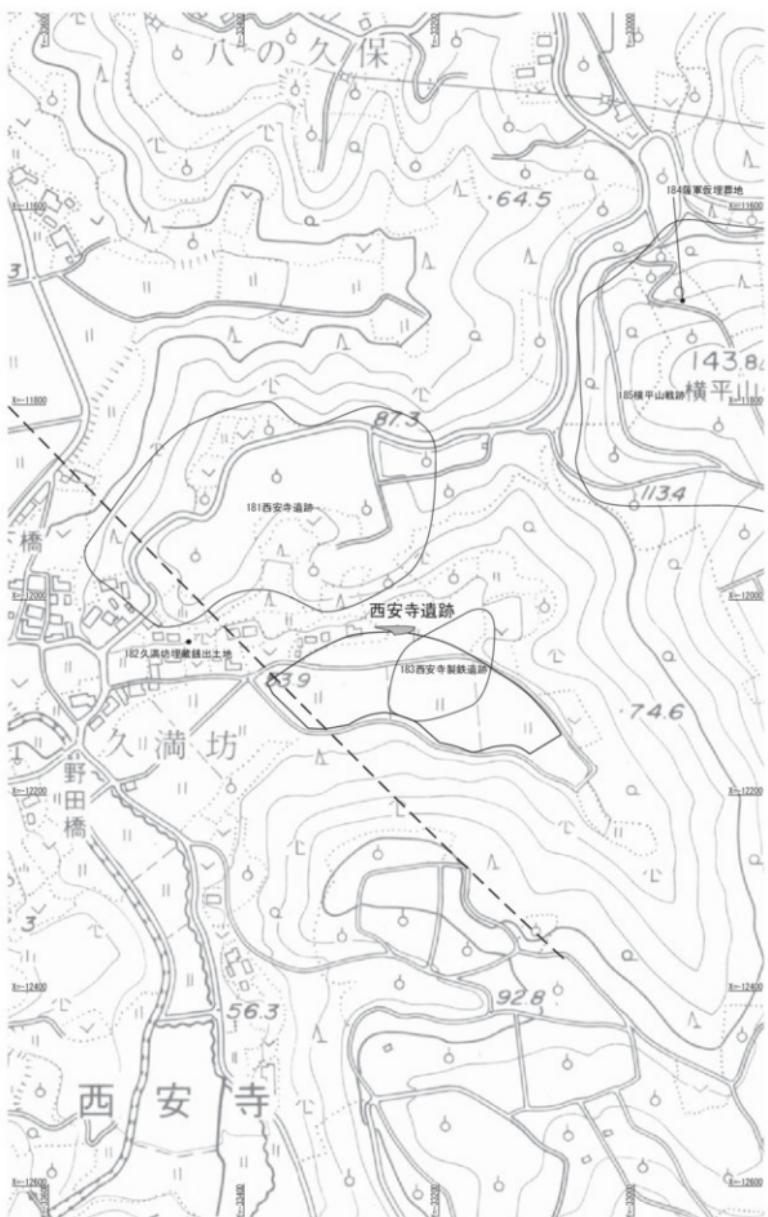


Fig.4 西安寺遺跡周辺地形図

S=1/5,000

第3章 各遺跡の報告

1 稲佐津留遺跡

(1) 遺構

1区の概要 (Fig.6) 今回調査を実施した稻佐津留遺跡のなかで、玉名平野左岸地域落ちる丘陵部の先端に位置する調査区。C-3Grid付近までは大幅な削平等により遺構の残存度は悪いが、D-4Gridあたりから丘陵内部にかけ多数の遺構の広がりそして密度を有する。3層上面では大規模な溝状の遺構を検出し、4層上面からは弥生終末から古墳初頭にかけての遺構を多数検出している。

溝SD007 (Fig.5) D-3Gridで検出した遺構。東西に伸び、遺構の一部は調査区外に伸びる。検出長1.48m、幅(A-A')39.5cmを図る。断面形状は逆台形で下端はほぼ水平である。埋土中からは土師器高杯が1点(1)出土している。

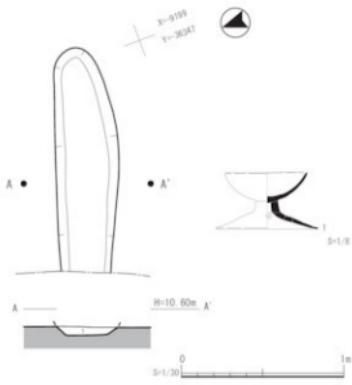


Fig.5 稲佐津留遺跡 1区溝 SD007 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI001 (Fig.7) 調査区長軸両端を別遺構に切られた状態で検出した遺構。南側では一部にベット状の遺構をL字形に確認し、北側で一段下がる。炉、柱穴等は検出されていないが、西側壁際で土坑状の掘り込みを有することから貯蔵穴の可能性もある。遺物は、主にベット状遺構の落ち際から段下の床面に広がっており、弥生終末期の脚台付甕が多数出土している。

竪穴建物 SI002 (Fig.8) E-3・4Gridで検出した遺構。遺構の北東部が調査区外に伸びる。遺構平面は方形を呈する。遺構東側壁際には1段高くベッド状遺構が見られる。遺構内からは炉、柱穴等は検出されていない。遺物は脚付甕等が出土している。

竪穴建物 SI003 (Fig.9) 調査区のほぼ中央、C-D・5 Gridで検出した遺構。後世の遺構に多数切られ検出した遺構。南西側の一部が調査区の外に伸びる。全体形が不明であるため、おおよそ正方形を呈するものと考えられる。主軸方向の設定は難しいが、北を中心になると N-38°-E となる。一边の大きさは不明だが、残っている限りでは A-A' 間で 5.04m を測る。遺構内の炉、柱穴等は確認できていない。主な出土遺物は大型の山陰系腹形土器及び甕・鉢などがある。

竪穴建物 SI004 (Fig.10) SI005 を切り検出した遺構。やや長方形で調査時の検出に疑問を感じる部分があるが、正方形をなすほどの規模はないと思われる。長軸を基軸として N-32°-E を測る。炉、柱穴等は検出されていない。遺物は土師器片がわずかに出土しているが小片であり図化していない。

竪穴建物 SI005 (Fig.10) SI004 により西側が切られた状態で検出した遺構。本遺構もやや歪なプランを呈しており、検出時確認の不十分さは否めない。遺構長軸を基軸として N-39°-E を測る。遺物としては、特筆すべきものであろう。

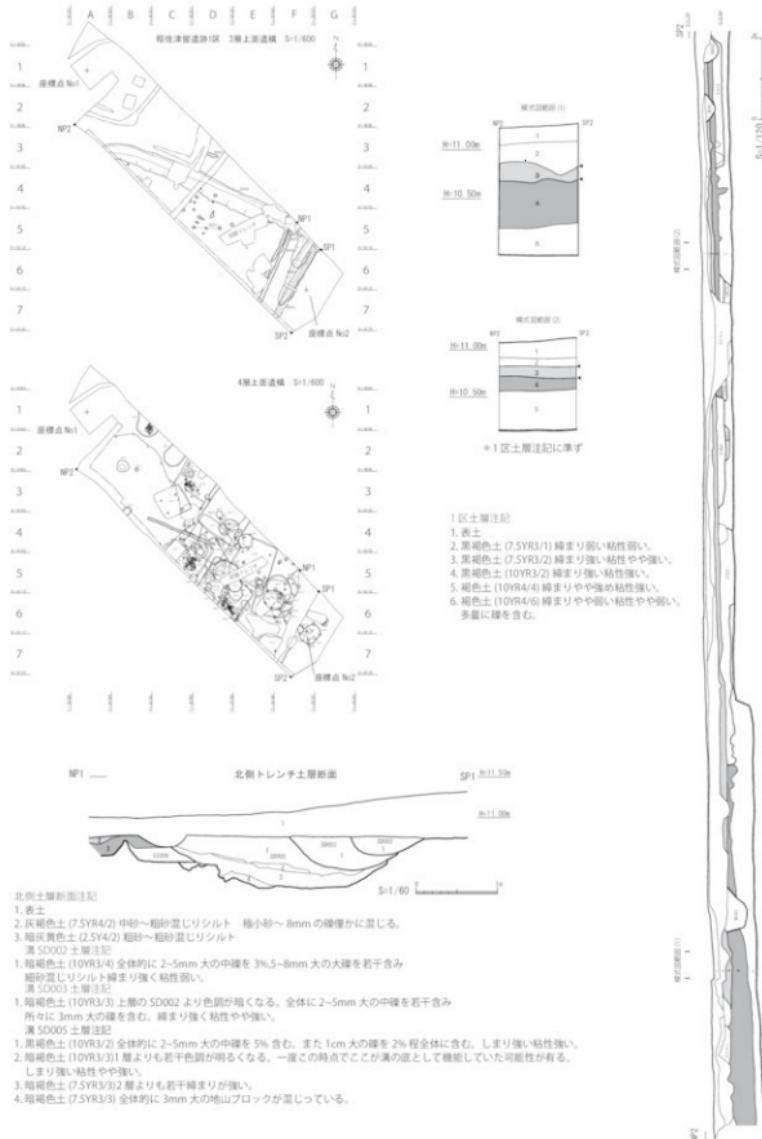


Fig.6 稲佐津留遺跡1区遺構配置図及び土層断面図

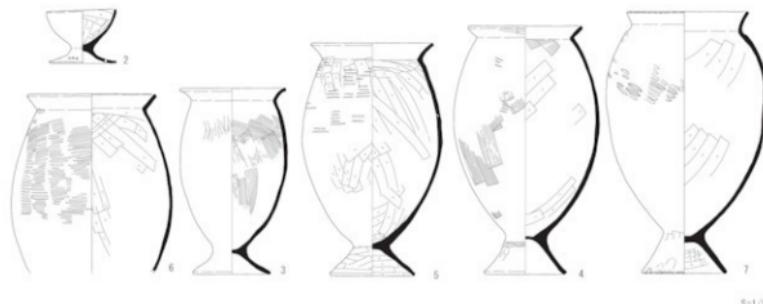
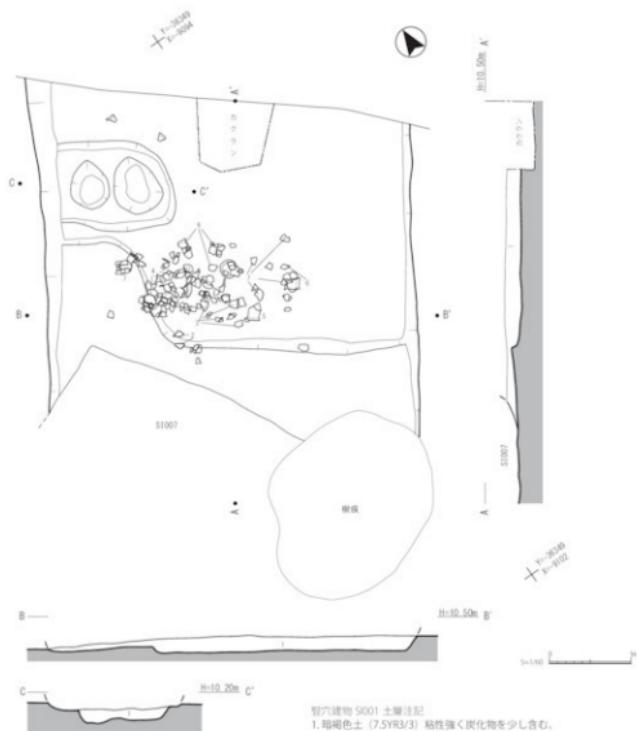


Fig.7 稲佐津留遺跡 1区堅穴建物 S1001 平面図と断面図及び出土遺物

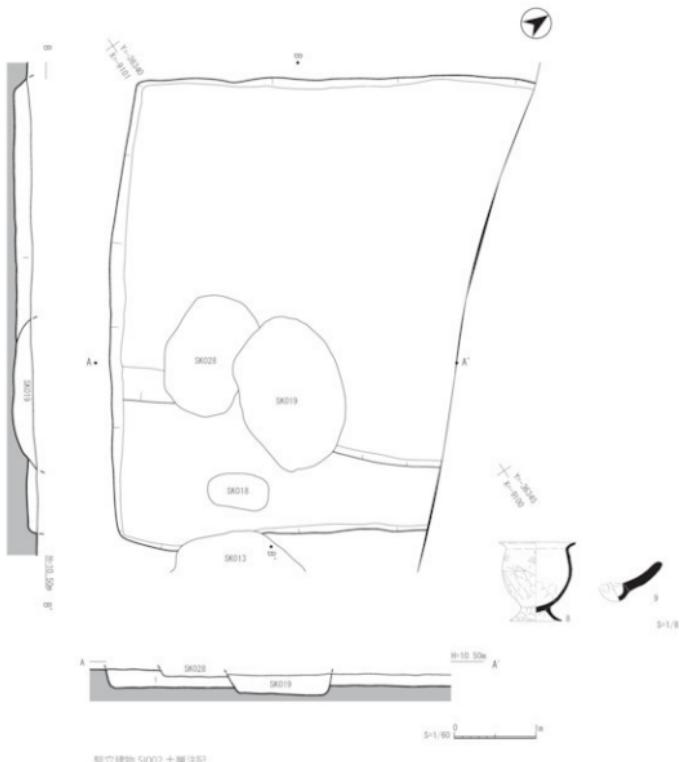


Fig.8 稲佐津留遺跡 1 区窯穴建物 SK002 平面図と断面図及び出土遺物

上坑 SK001 (Fig.11) D-5Grid でトレーナーにより切られた状態で検出した遺構。平面形は当初、長楕円形をしていたものと見られる。埋土は上下 2 層に分層される。埋土中から鉄製品が 2 点出土している。土器はない。

上坑 SK010 (Fig.12) D-6Grid で検出した遺構。遺構の 1/3 が調査区外に広がる、梢円形の形状をなす。長軸 1.5m、単軸 0.75m (検出長) を図る。断面は緩やかな逆台形を呈する。埋土中から土師器鉢が 1 点出土している。

上坑 SK039 (Fig.13) 4-Grid で SK013 により切られた状態で検出した。平面形は楕円を呈し、断面も緩やかに円弧を描き掘り込まれる。長径 1.12m、短径 0.6m を測る。埋土は単層で暗褐色土を有する。遺物は下層から床面直上付近で細片となった手捏ね土器 (31) が 1 点出土している。

上坑 SK042 (Fig.14) 遺構の約半分が調査区の外に広がる遺構。平面形は長楕円形を呈するものと見られる。遺構断面は逆台形を呈する。埋土中からは二重口縁壺が 1 点出土している。

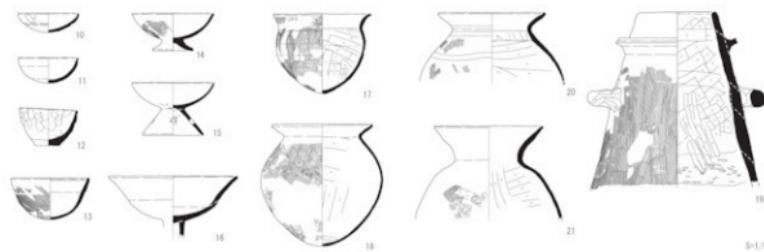


Fig.9 稲佐津留遺跡 1 区整穴建物 SI003 平面図と断面図及び出土遺物



竪穴建物 S1004 土質注記
1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化物を少量含む。
竪穴建物 S1005 土質注記
1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 黄褐色土をブロック状に含む。

S1005 出土遺物

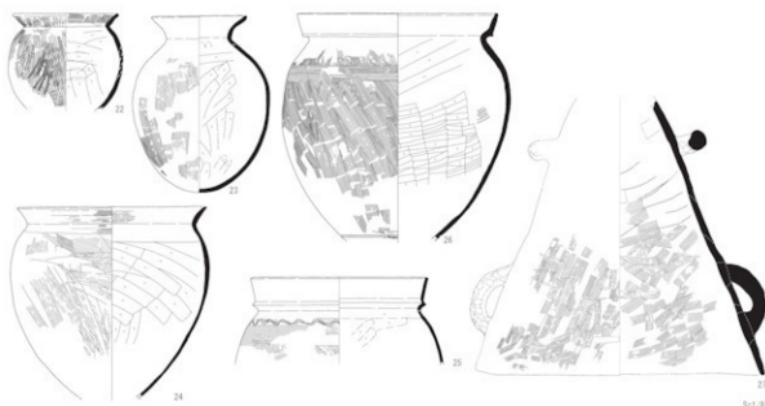
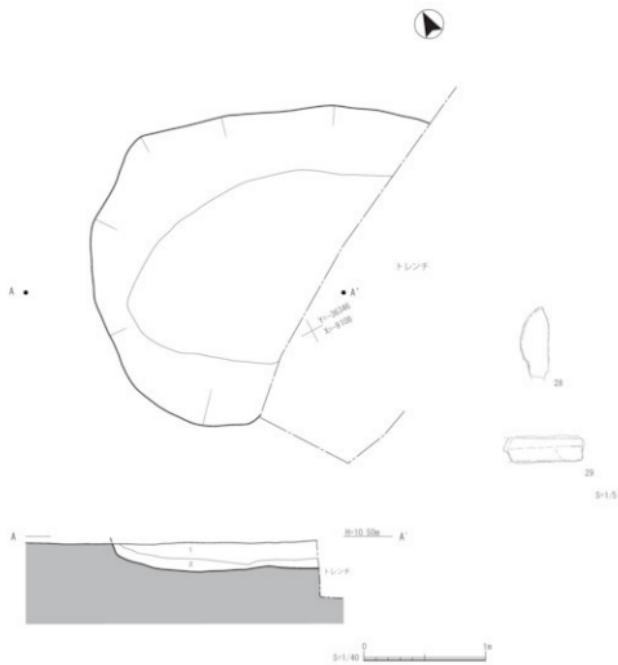


Fig.10 稲佐津留遺跡 1 区竪穴建物 S1004・S1005 平面図と断面図及び出土遺物



土坑 SKO01 土層注記
1.暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱め緑まりやや強め砂質が多く含む。
2.黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強め緑まり強め！層より砂質が少なくなる。

Fig.11 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SKO01 平面図と断面図及び出土遺物

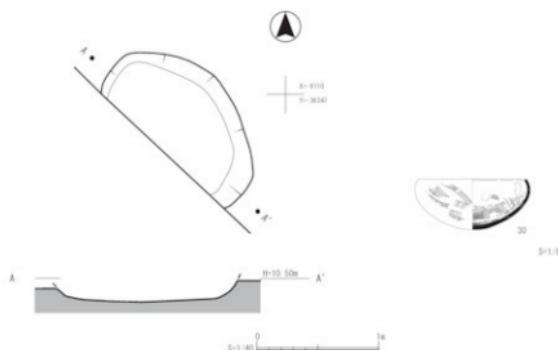
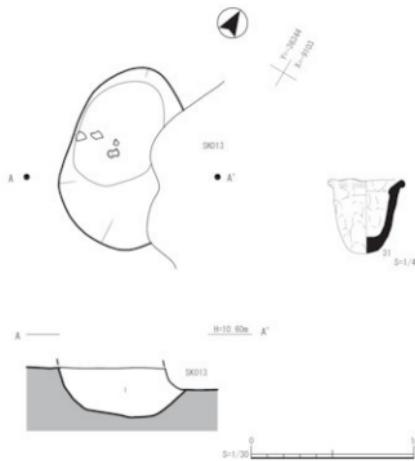
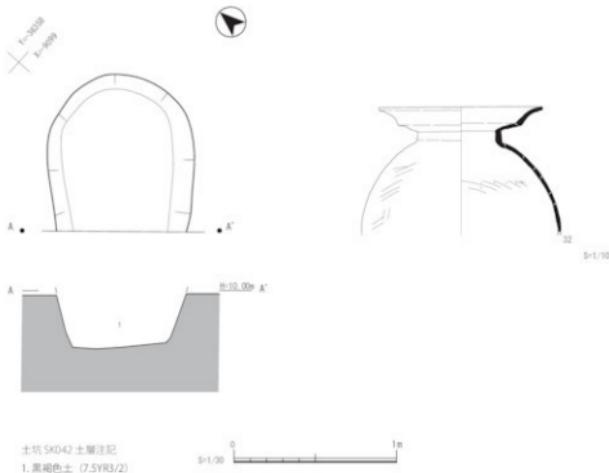


Fig.12 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SKO10 平面図と断面図及び出土遺物



土坑 SK039 土層注記
1.暗褐色土 (7.5YR3/4) 黄褐色土をブロック状に多く含む。

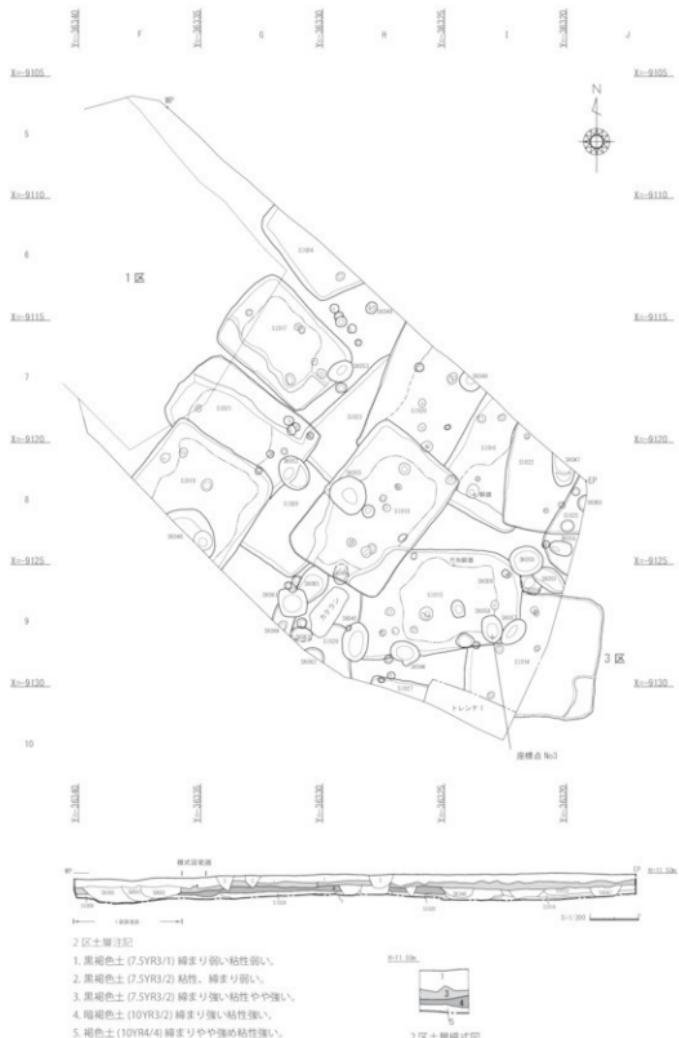
Fig.13 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SK039 平面図と断面図及び出土遺物



土坑 SK042 土層注記
1. 黒褐色土 (7.5YR3/2)

Fig.14 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SK042 平面図と断面図及び出土遺物

2区の概要 (Fig.15) 調査区の西側 G-7Grid 付近まで1区と調査区が被っていたようで、一部1区調査時に検出していた遺構のうち2区へ伸びていたものについては、2区の調査時に調査に着手している。丘陵先端部に位置していた1区に比べ2区遺構は比較的平坦な丘陵内部に位置しているため、安定した土層を呈している。



竪穴建物 SI014 (Fig.16) ほぼ正方形を呈する遺構。古墳時代遺構の竪穴建物と比べ、遺構隅が隅丸を呈する。が、柱穴等は確認されていないが、南東隅にベッド状遺構を有する。遺物は遺構中央部を中心に床面に張り付き検出している。主に弥生後期の長頸壺、脚台付鉢等が多数出土している。

竪穴建物 SI015 (Fig.17) H-I: 9 Gridで検出した遺構。長軸を基軸とすると、W-3°-N とほぼ東西に主軸を置き、長径 6.6m (B-B)、短径 4.2m (A-A) を測る。長方形を呈するが東側隅は梢円に近い隅丸形を呈する。反対に西側は隅がほかの遺構で切られはしているが方形を成すと見られる。中心よりやや東側に炉を有し、それを挟み東西に主柱穴を有する。炉を中心とした柱穴に挟まれた範囲は硬化面が発達し僅かな盛り上がりを示す。壁際までは広がりが見られない。遺物は主に遺構東側壁際で出土しているが、わずかながら炉と西側柱穴間に広がっている。外面に嵌痕を残す脚台付鉢を始め大小の鉢等が出土している。しかし、特筆すべきは本遺構内で床面に硬化面が広がる中において、巴形銅器の紐から脚部にかけての部位が出土していることである。出土状況から巴形銅器は住居内使用時もしくは廃棄時に置かれたものと考えられる。

竪穴建物 SI016 (Fig.18) 平面形が長方形を呈する遺構。遺構北側は調査区外に伸びる。遺構の西側を SI018、東側を SI022 により切られ、本来の形状は失われているがその規模は推定で示すこととする。長軸を基軸とすると主軸は N-30°-E を測る。遺構の規模は長径 4.3m 以上、短径 (推定) 約 3.8m を測る。南側にはベッド状遺構が壁際に沿い配され、ベッド状遺構に一部接するように柱穴を確認している。また、その柱穴を含み硬化面が広がるが、全体形状が検出できていないので、その広がりをもって遺構内の役割を推測するまでは至っていない。

柱穴掘り方から、青銅鏡片が出土している（四乳細縫鳥文鏡）。柱穴の土層断面実測図が残されていないためどのような過程で入っていたのかは検証することはできないが、出土位置が柱穴掘り方の壁際であることを考慮すると、柱穴が掘られた時点で入っていたものと想定される。出土遺物はほかに土師器鉢 (52) が 1 点出土している。

竪穴建物 SI017 (Fig.19) G-7Grid で検出した遺構。長方形で二本柱建物である。北側壁際で「コ」字状にベッド状遺構を残す。中央部には柱穴に挟まれ、ベッド状遺構下にまで硬化面が広がる。主軸は、遺構長軸 (B-B) で N-50°-W を測り、全長 5.18m、短軸 (A-A) で 3.45m を測る。住居内からの遺物の出土はなく、ベッド状遺構上から石庖丁が 1 点出土している。

竪穴建物 SI018 (Fig.20) 平面形が長方形を呈し、主軸を N-37°-E に置き長径 (A-A) で 6.50m、短径 (B-B) で 4.3m を測る遺構。中心に浅く掘り畠めた炉を有し、南北に主柱穴となる柱穴を 1 本ずつ配する。南側コーナー部には緩やかに L 字状にベッド状遺構が配される。中心の炉の周囲に高杯 (57)、器台 (58)、鉢 (56) が床直上に置かれ、北側柱穴付近を中心円形浮文を口縁下位に配する二重口縁鉢 (62)、大型鉢 (64) などがある。

竪穴建物 SI019 (Fig.21) G-8Grid で検出した遺構。遺構の南側が調査区外に伸びる。調査区外に伸びる方向 (A-A) を主軸とすると N-34.5°-E を測り、遺構規模は東西に 3.8m 南北に確認できただけで 2.9m を測る。住居コーナー部が隅丸形を呈することから平面形は正方形の竪穴建物と考えられる。床面には硬化面の広がりを見ることができる。遺構の中央を別遺構に切られ、炉は残っていないと考えられる。柱穴等の遺構は確認できていない。土師器鉢 (65) が 1 点出土している。

竪穴建物 SI020 (Fig.22) 竪穴建物 SI016、SI018 に切られ検出した遺構。西側で直線に遺構壁ラインが検出されていることから調査時には竪穴建物と認識し調査されている。遺構主軸はおそらく N-26°-E を測る (B-B)。遺構規模は不明であるが、西側振り方線上で、6.2m を測る。南西隅に直下に曲がる住居隅があることから長方形を呈する住居跡であろう。内部にはやや形が崩れかかったベッド状の高まりがあり、西壁際に沿い、湾曲しながら延びる。炉は確認されていないが、主柱穴の一つと見られる柱穴が 1 基、SI016 に切られながら残る。出土遺物は鉢が 2 点出土している。

竪穴建物 SI021 (Fig.23) 遺構南側を竪穴建物 SI019 に切られ検出した遺構。主軸は長径に沿い N-28°-E を測り、長径 6.0m、短径約 3.6m を測る長方形を呈している。東側壁際にはベッド状遺構が残る。炉は確認されていないが主柱穴は南北側に 2 本検出され、2 本柱建物と見られる。柱穴間に硬化面が検出されている。出土遺物は土師器鉢のため図化できていない。

土坑 SK046 (Fig.24) 遺構の半分が調査できた遺構。遺構の約 1/2 は調査区外に位置する。半分しか検出していないため、主軸は確認できない。規模は検出した範囲で示すと、長径 1.04m を測る。遺物は主に 2 層から出土し土師器鉢、皿、高台付鉢等が多数出土している。遺構の内部に柱穴状の遺構が切り合うが、土層断面の観察でも断面に振り方を検出していないため、本遺構に先行する遺構と見られる。



竪穴建物 S1014 土層注記

1.にふい黄褐色土 10YR4/3 繊まり強め粘性弱い。

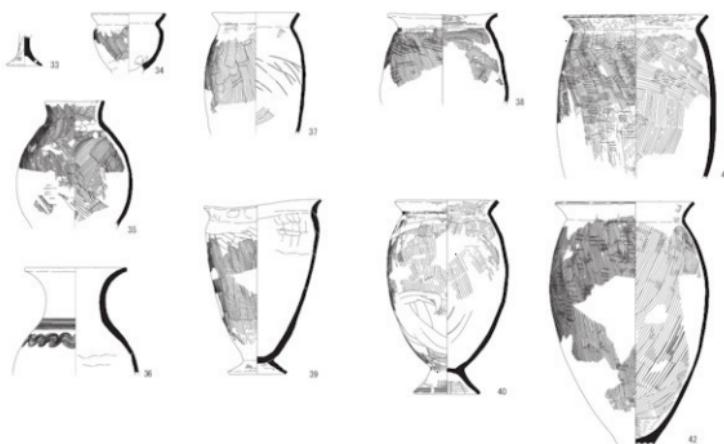


Fig.16 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 S1014 平面図と断面図及び出土遺物



Fig.17 稲佐津留遺跡 2区竪穴建物 SI015 平面図と断面図及び出土遺物

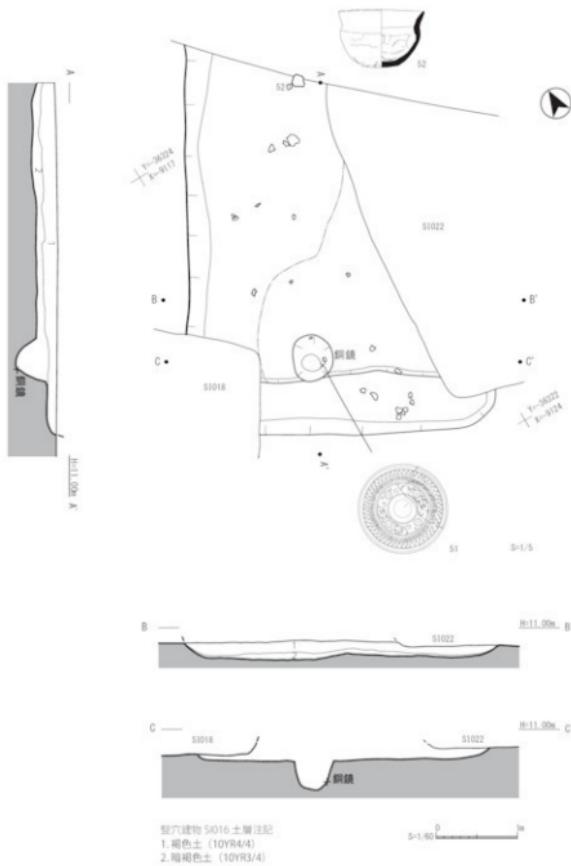


Fig.18 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI016 平面図と断面図及び出土遺物

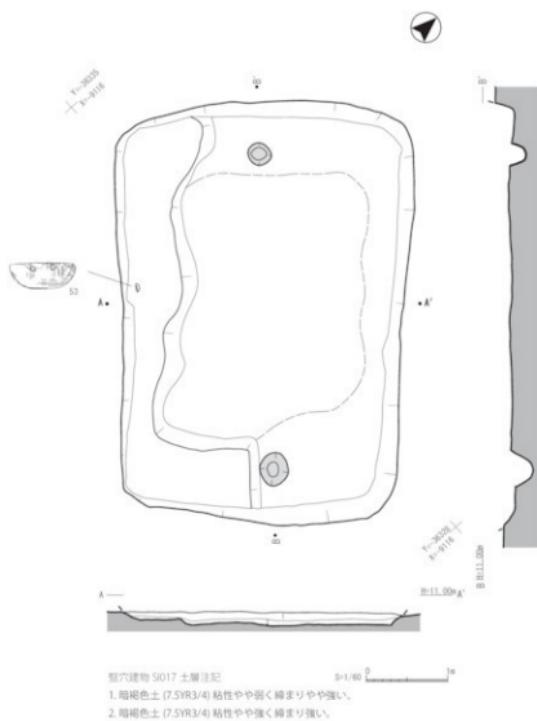


Fig.19 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI017 平面図と断面図及び出土遺物

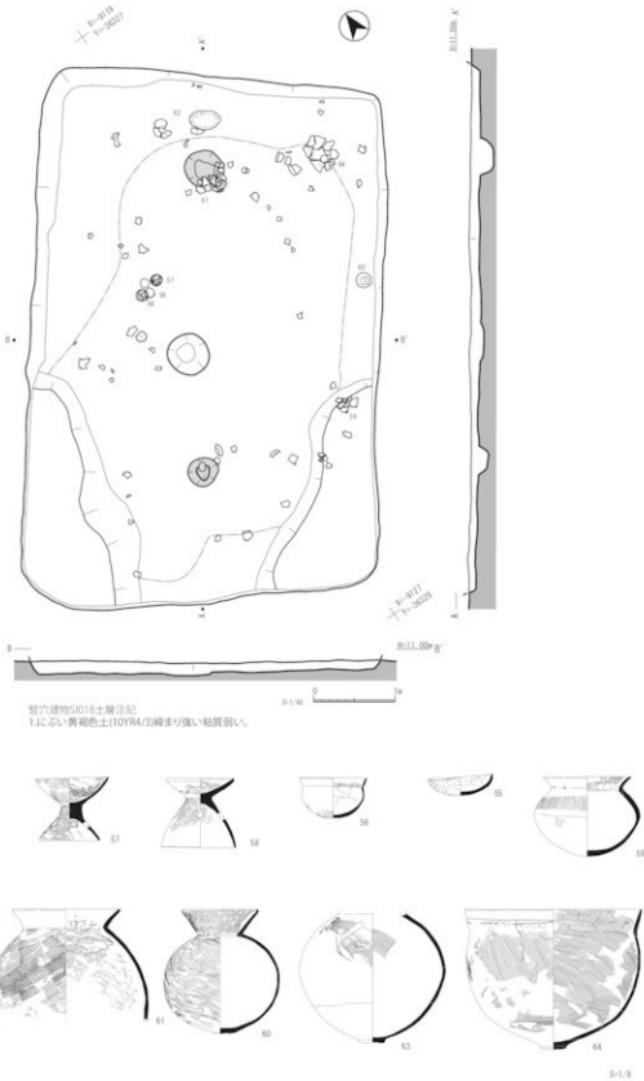


Fig.20 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI018 平面図と断面図及び出土遺物

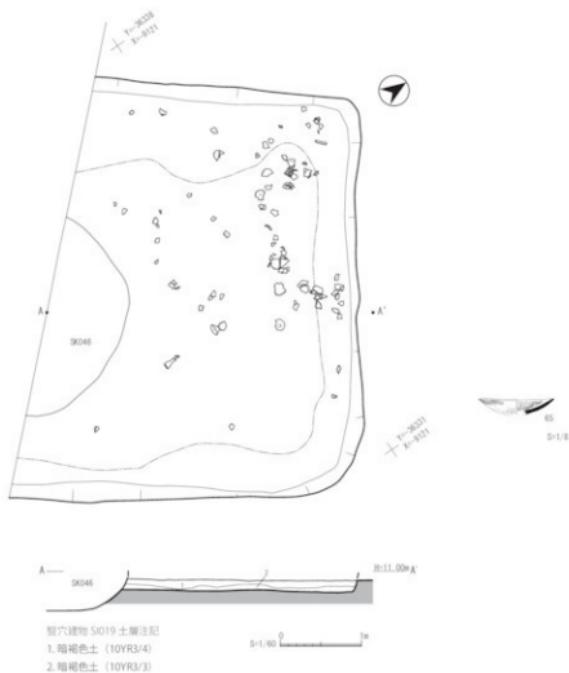
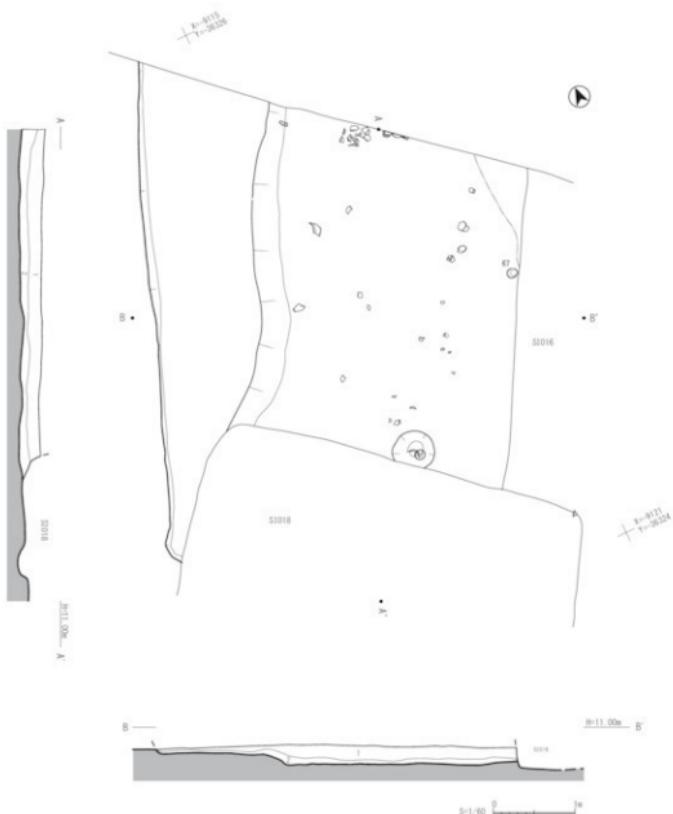


Fig.21 稲佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SIO19 平面図と断面図及び出土遺物



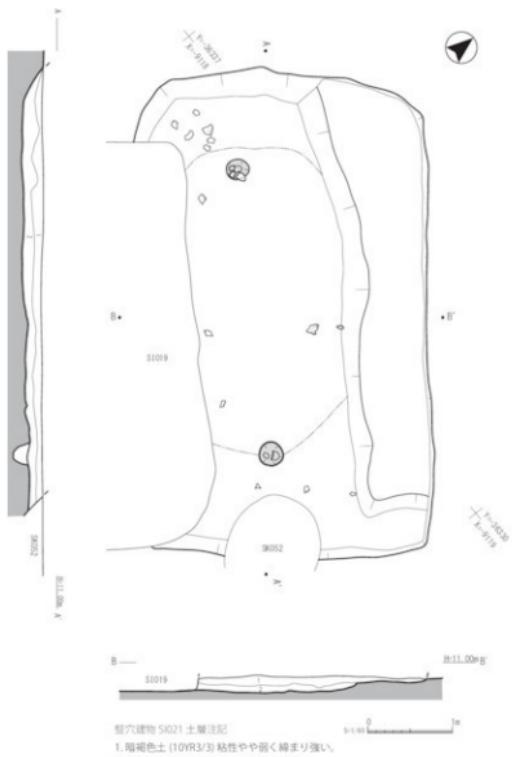


Fig.23 稲佐津留遺跡 2 区壁穴建物 S1021 平面図と断面図

土坑 SK048 (Fig.25) 遺構全体の 2/3 を調査した遺構。柱穴状に円形を呈する平面形を成すが、土層断面からは柱痕等は確認されていない。遺物は主に 2 層中から出土しており、土師器壺が 1 点出土している。

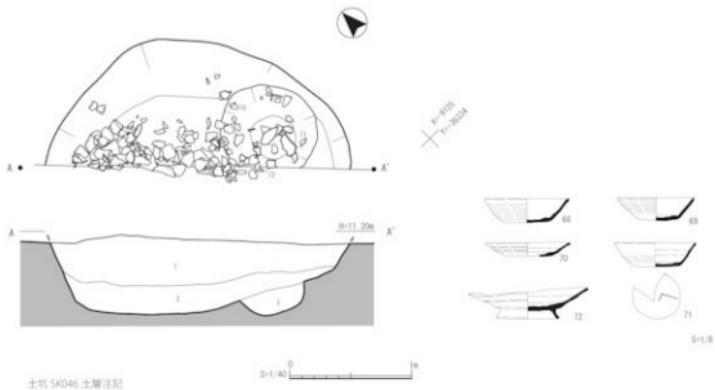


Fig.24 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK046 平面図と断面図及び出土遺物

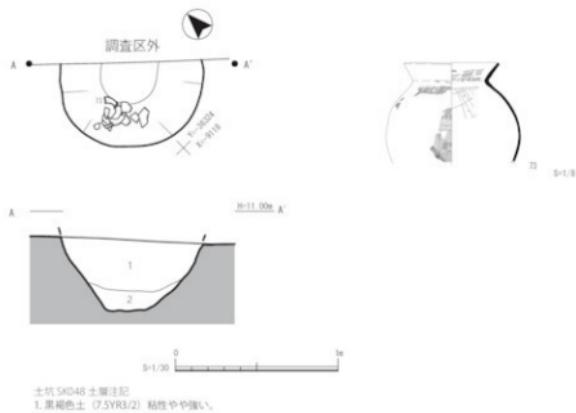
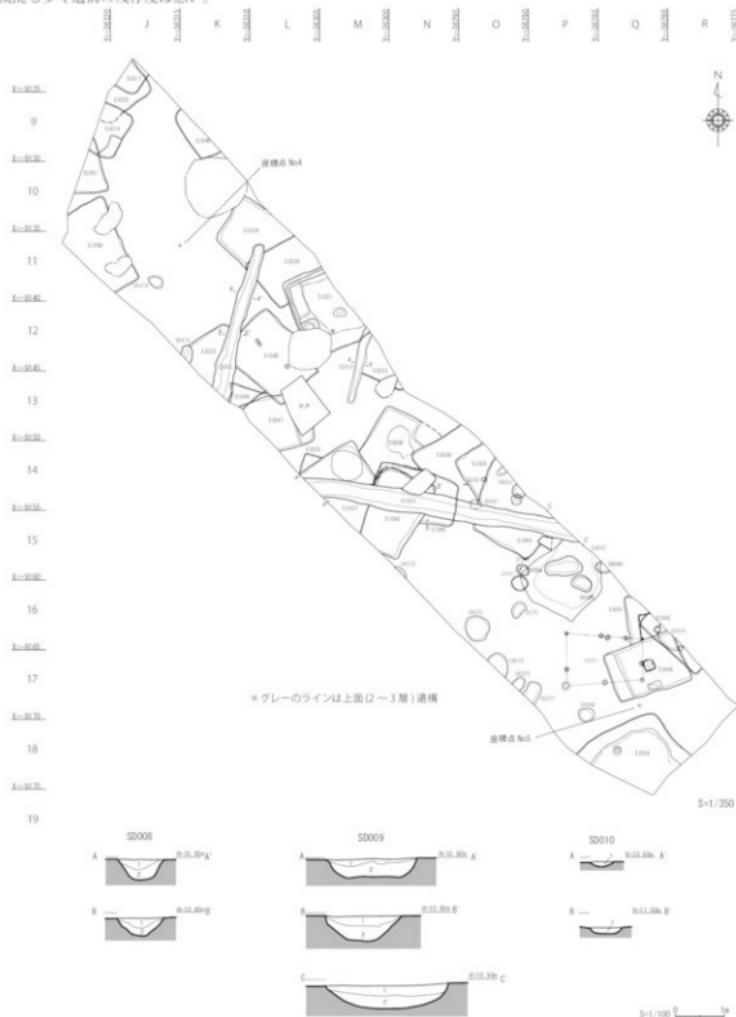


Fig.25 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK048 平面図と断面図及び出土遺物

3区の概要 (Fig.26) 本調査で調査を実施した調査区のなかで中央部に位置する調査区。道路の立地する低丘陵の安定した平場があり、遺構の密度も高い。しかし、反面土地が安定しているため、後世の土地利用も多かったせいか、擾乱も多く遺構の残存度は悪い。



調 SD008 土層注記

1. 黒褐色土 (7.SYR3/2) 締まり強い・粘性強い。
 2. 暗褐色土 (7.SYR3/3) 締まりやや強い・粘性やや弱い
- 1層より砂を多く含む。

調 SD009 土層注記

1. 黒褐色土 (7.SYR3/2) 締まり強い・粘性やや弱い。
2. 暗褐色土 (7.SYR3/3) 締まり強い・粘性やや弱い。

調 SD010 土層注記

1. 暗褐色土 (7.SYR3/4) 締まりやや強いくらい。

Fig.26 稲佐津留遺跡 3 区遺構配置図及び溝 SD008・SD009・SD010 土層断面図

掘立柱建物 SB001 (Fig.27) Q-16.17Grid 上で検出した遺構。遺構は N-90° E を測る。規格違いで南北に 2 間、東西に 2 間を測る。東側小口、西側小口で幅が違うため建物としての機能にやや疑問があるが他の柱穴より規格性があるため掘立柱建物として報告する。

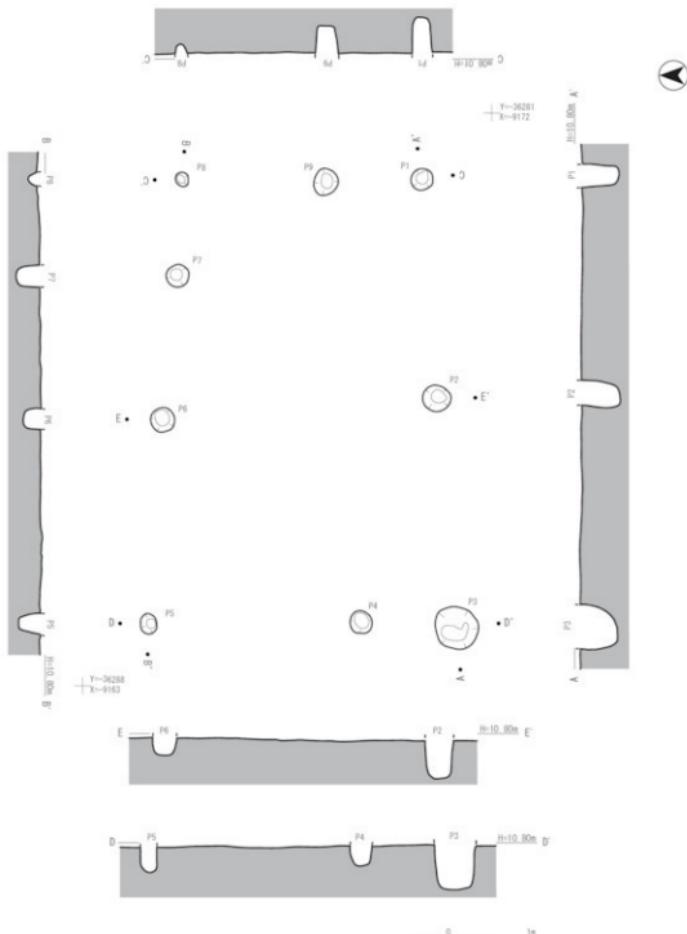


Fig.27 稲佐津留遺跡 3 区掘立柱建物 SB001 平面図と断面図

竪穴建物 SI030 (Fig.28) 溝SD008、竪穴建物 SI031 に切られ検出した遺構。東西に長く W-28° N に主軸を有する。遺構規模は主軸 A-A' 付近で 4.38m 以上、直行する短軸は 4.05m を測る。遺構深度は浅く、大幅な削平を受けているものと見られる。平面形は長方形を呈し、東側は調査区の外に伸びる。炉、柱穴は確認されていないが、遺構中央部で遺物の出土が見られる。

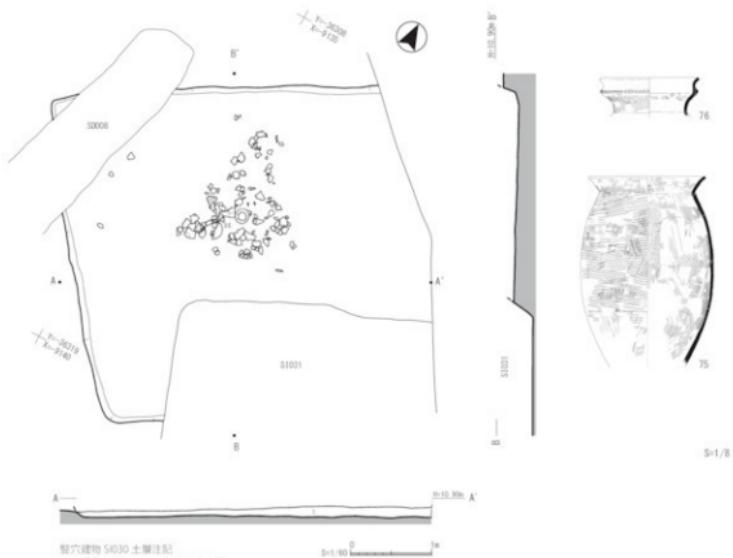


Fig.28 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI030 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI031 (Fig.29) M-12Grid 付近で確認された遺構。他の竪穴建物に比べ掘り方等が明瞭に確認でき、残存状態は良い。主軸は N-22° W を測り、B-B' 間で 5.92m、A-A' 間で 3.78m 以上を測る。おそらく中心部で検出された遺構が炉であることから遺構の 2/3 は調査しており、本来の形状は正方形であると見られる。西側壁際には貯蔵穴と見られる梢円形の掘り方が壁に接し検出されている。また、北西隅にはベッド状遺構長方形に残り、西・北壁際には周溝が巡る。遺構の中央部は炉を中心に硬化面が広がりベッド状遺構の間にまで広がる。炉は比較的深く掘り込まれるが平面形はやや不定形な形状をなす。遺物は硬化面直上に貯蔵穴周辺を中心広がる。

竪穴建物 SI032 (Fig.30) K-12Grid で検出した遺構。調査区の大半が他の遺構に切られるので調査区外に伸びていることから遺構の全容は確認できていない。調査時の遺構確認がやや難な感が否めず、竪穴建物として認定できるかどうか迷った。一応、主軸は N-45° E を測り、規模は一辺がで 3.2m (B-B') 四方の正方形タイプであろうと考えられる。遺構の中央を溝 SD008 が南北に横断していることから炉及び柱穴は消滅している可能性がある。遺物の出土状況から硬化面のある可能性があったが、調査時には確認されていない。

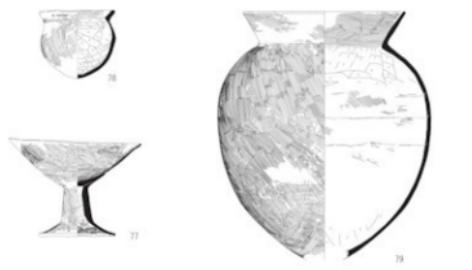
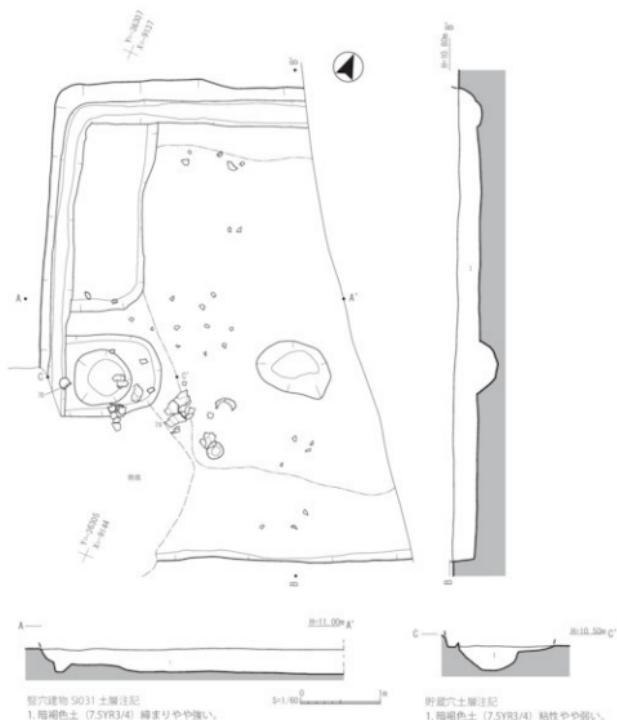


Fig.29 稲佐津留遺跡 3区竪穴建物 SI031 平面図と断面図及び出土遺物

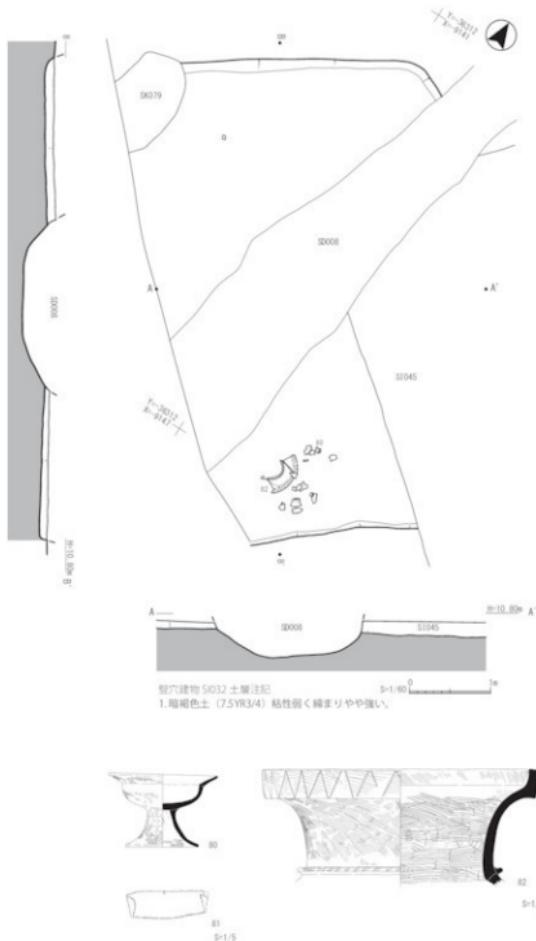


Fig.30 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI032 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 S1034 (Fig.31) 本遺構は、竪穴建物というより遺構の規模から土坑状の遺構である可能性が高い。しかし、調査時の所見として竪穴建物と認識しているためそのまま報告することとする。

主軸方向は全体形が見えないため分からぬが、東側壁面のラインを基軸すると N-38°-W を測る。規模は、南北方向 (A-A') で 4.9m、東西方向 (B-B') で 5.6m を測る。遺構内には検出した面すべてにベッド状の段が巡り、内部が一段下がる。遺物は主にその落ち際から中心部に向かい残されており、多数の土師器が出土している。

却は検出されていないが、主柱穴の一部と見られる柱穴が 1 基検出されている。

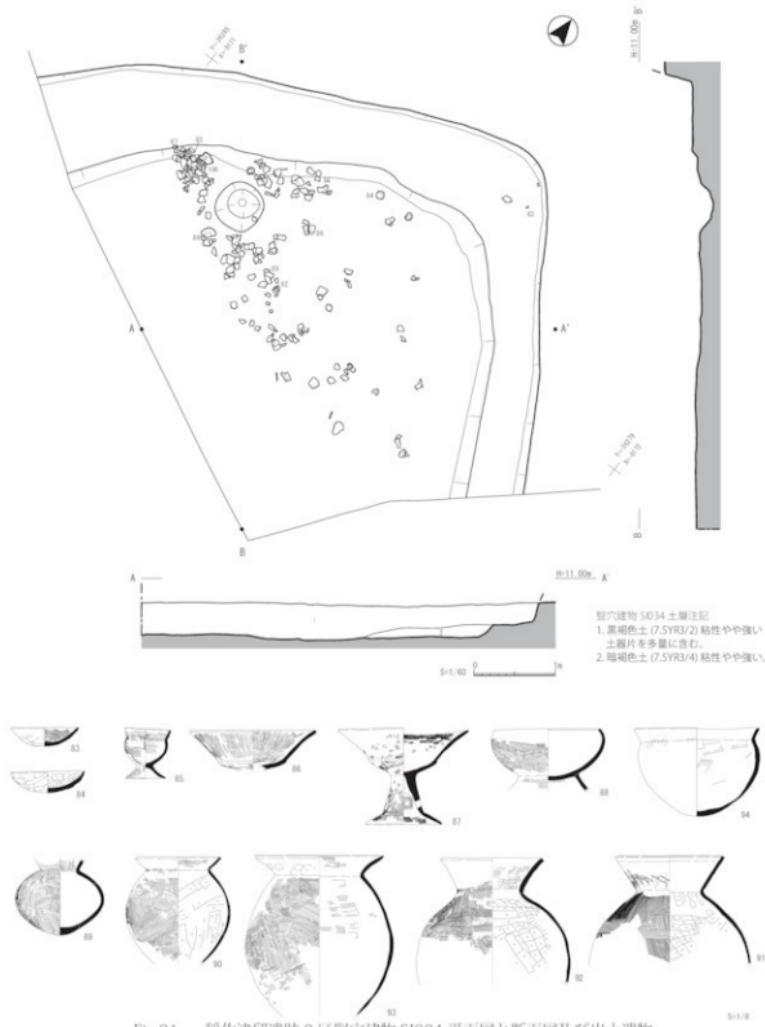


Fig.31 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 S1034 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI036 (Fig.32) N-14Grid で検出した遺構。多くの竪穴遺構により切られ、北側隅の一角のみ検出できた。遺構輪面形状は切り合い等から分らない。ベッド状遺構が付属することから長方形を呈すると考えられるが、確認はできていない。遺構内柱穴等の検出はなく、わずかに、埋土中から土師器壺が1点出土している。

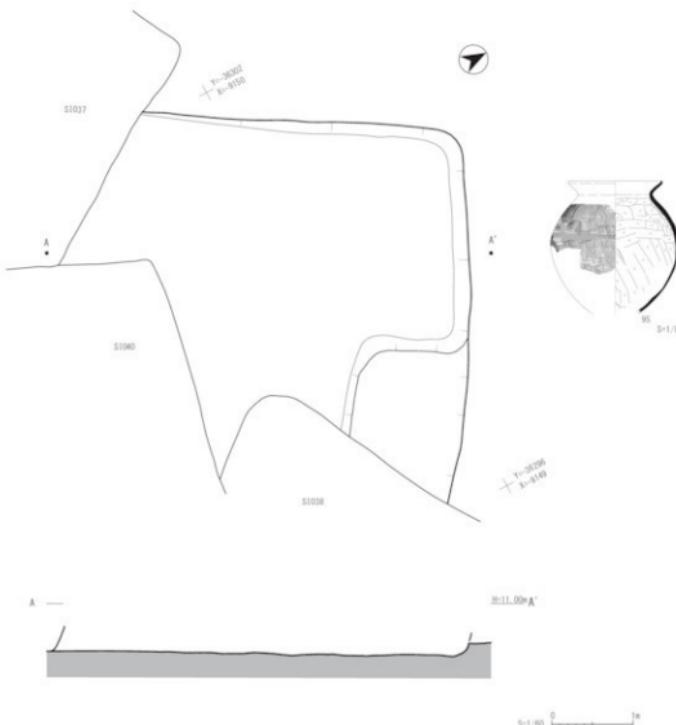


Fig.32 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI036 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI044 (Fig.33) O-15Grid で検出した遺構。遺構の中心を溝 SD009 で切られる。また遺構の約 1/2 が調査区の外に伸びる。遺構の主軸は N-47° E (B-B') を測る。規模は南壁小口側で約 4.5m。主軸側の壁はやや外側に膨らみつつ、伸びる。平面形は長方形を呈するものと考えられる。遺構内遺構は確認されておらず、柱穴、硬化面等は未検出である。遺物は遺構内に広く分布している。

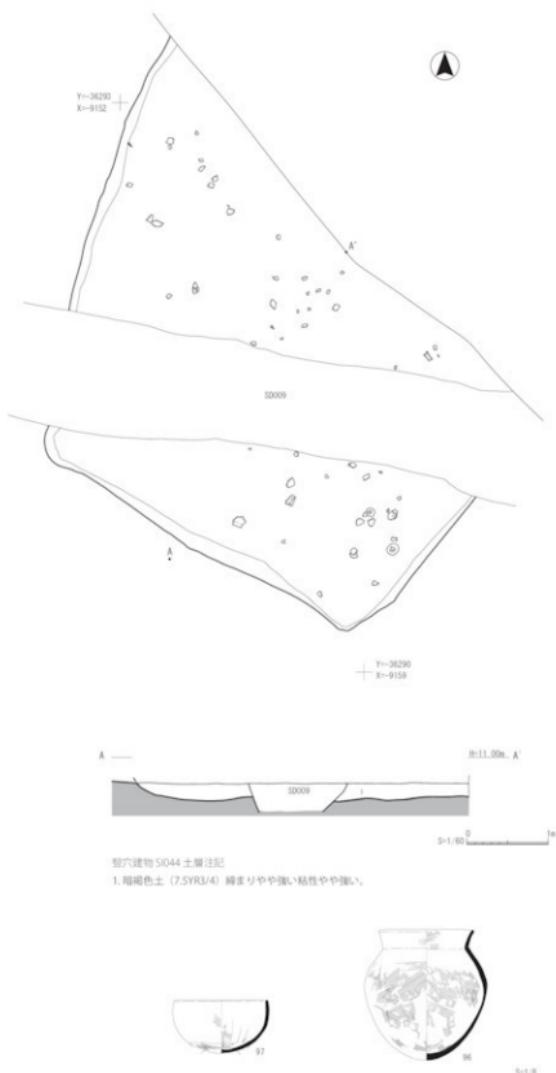
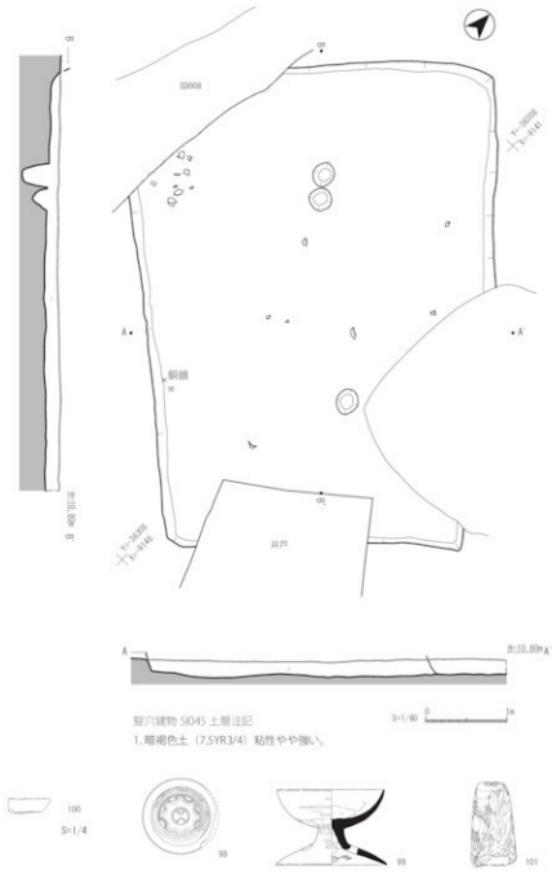


Fig.33 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI044 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI045 (Fig.34) 調査区のやや北東側中央で検出された遺構。近世遺構である溝 SD008 や、竪穴建物 SI035 に切られ検出した。平面形は長方形を呈し主軸を N-45° E おく。遺構内では炉は検出されていないが、柱穴が 3 基検出され、うち 2 基は隣接しているため建て替えに伴う振り方と見られるが、同時に存在した遺構とは考えられない。よって、2 本柱建物であったことが考えられる。

出土遺物は土師器高杯と刀子状の鉄製品が 1 点ずつ出土し、南側住居壁の隅で内向花文鏡が 1 点出土している。詳細な出土状況は不明であるが調査地点が押えられているためここに報告する。



竪穴建物 SI047 (Fig.35) L-13Gridで検出した遺構。近世の井戸から古い竪穴建物にまで切られ、遺構外へも伸びていることから多くの情報を得られていない。遺構は東側にベッド状遺構を有することから他の類例から推測し、長方形を呈する遺構と考えられる。それをもとに主軸を考えると、N-74° Eをとほぼ東西に主軸を有する。規模は調査区の外にまで伸びていてから計測はできないが、短軸側は約4.0mを測る。ベッド状遺構は南東側隅にわずかに残るのみである。炉、柱穴は確認されていない。遺物の出土は遺構内すべてで一様なレベルで出土しているが硬化面は確認されていない。

竪穴建物 SI048 (Fig.36) O・R-13Gridで検出した遺構。長軸方向を基軸とすると、主軸はE-20° Nを測る。規模は長軸 5.35m (A-A')、短軸 3.76m (B-B') の長方形を呈する。遺構中央に方形に掘り込まれた中に円形の掘り込みを有する炉を検出している。方形に掘り込まれた部分は浅く、周囲に仕切り板が置かれていたと見られる。中央の炉床部は円形でわずかに掘り込む。他の同形の長方形を呈する遺構で見られる竪穴建物遺構では、二本柱が基本となつてゐるため本遺構でも本来は二本柱であったと見られる。しかし、調査時には柱穴は確認されていない。南壁にあたる長辺壁際では東西の梢円状に伸びる貯蔵穴と見られる掘り込みを検出している。

西側壁際には短辺に沿い、ベッド状遺構が残る。硬化面は確認されてないため、床面の調査が十分であったのかは確認できない。遺物はかの周間に散布しているが、図化できる遺物はなかった。

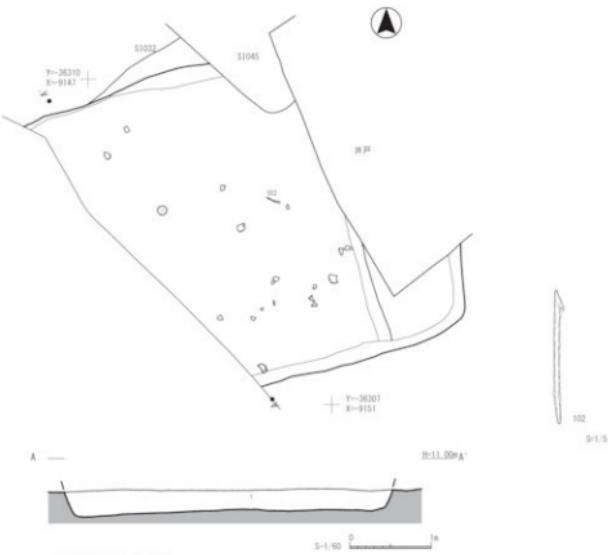


Fig.35 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI047 平面図と断面図及び出土遺物

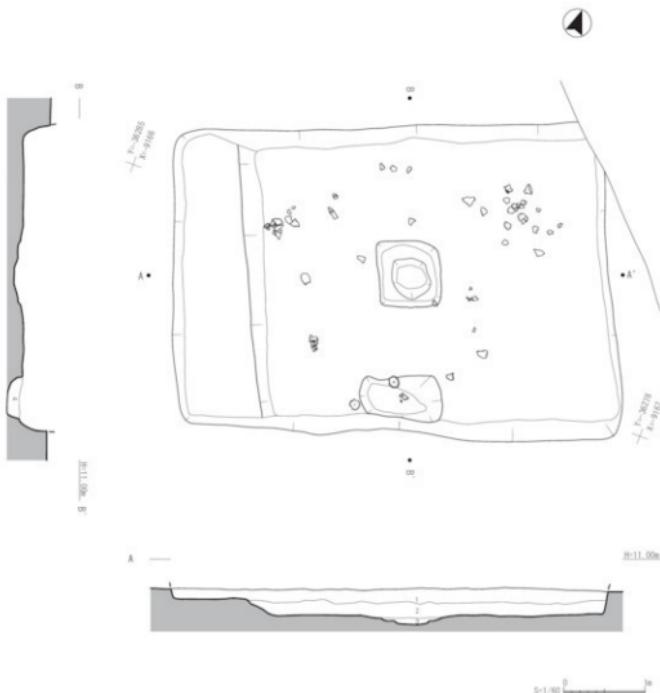


Fig.36 稲佐津留遺跡3区堅穴建物SI048 平面図と断面図

堅穴建物 SI049 (Fig.37) K-9Gridで検出した遺構。遺構の大半が調査区外に位置し、最後まで遺構の種別の確認が難航した。しかし、隣接する範囲で同規模の堅穴建物が多数確認されていることから、本遺構も堅穴建物と判断し報告した。遺構の掘り方は浅く、残りは悪い。遺構内柱穴等は検出されておらず、規模、主軸等は不明。

埋土中より土師器台付鉢が1点(103)が出土している。



Fig.37 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI049 平面図と断面図及び出土遺物

上坑 SK067 (Fig.38) 円形を呈する遺構。遺構断面は垂直に掘り込まれており下端はフラットである。遺物は主に下端付近で出土しており、遺構廃絶時に入ったものと認定できよう。遺構規模は 1.2m の円形遺構である。

上坑 SK077 (Fig.39) P-17Grid で検出した遺構。遺構の平面形状から溝状遺構の可能性があるが、調査区外へ伸びるため、ここでは土坑として報告する。全体形規模は不明である。掘り方は浅く、大幅な削平を受ける。下端は、はつきりしないが緩い U 字状断面を呈していると見られる。

不明遺構 SX002 (Fig.40) P-15・16Grid 上にて検出した遺構。遺構の一部を溝 SD009 や土坑等により切られる。平面形状は不定形である。検出時に竪穴建物と想定した時期もあったようだが、最終的には不明遺構として記録されている。土層断面は、遺物の多さから分層できていないようであるが、断面図に記録されている遺物の入り方から時間を探かずには投げ込まれた状態であると見られる。遺物には弥生時代後期の遺物が主体であり、本調査区で多数を占める古墳時代初頭の時期に先行する遺構である。

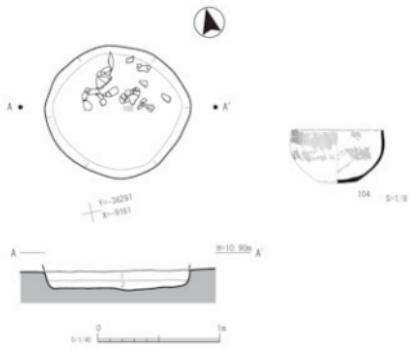


Fig.38 稲佐津留遺跡 3 区土坑 SK067 平面図と断面図及び出土遺物

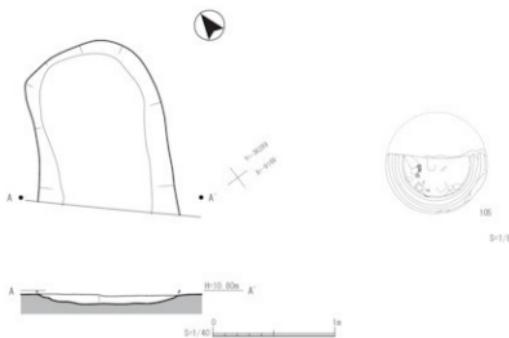


Fig.39 稲佐津留遺跡 3 区土坑 SK077 平面図と断面図及び出土遺物

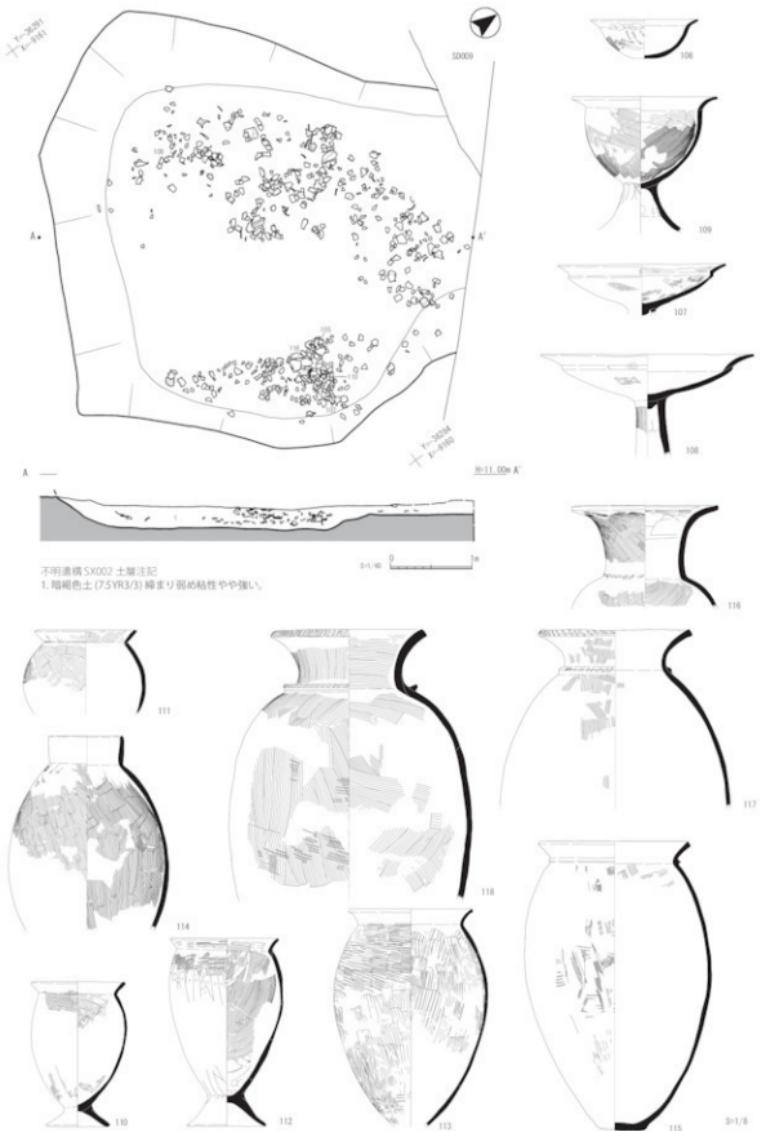


Fig.40 稲佐津留遺跡 3 区不明遺構 SX002 平面図と断面図及び出土遺物

5区の概要 (Fig.41) 本調査区は、当該遺跡が立地する低丘陵部頂部からやや南側へ下がり始める場所にあたる。調査区の両サイドを、市道、里道により挟まれている。調査面は2層を遺物包含層として3層上面を遺構検出面とする古代以降の時期、3層を遺物包含層とし4層上面を遺構検出面とする弥生後期から古墳時代初頭にかけての時期の2面を調査している。

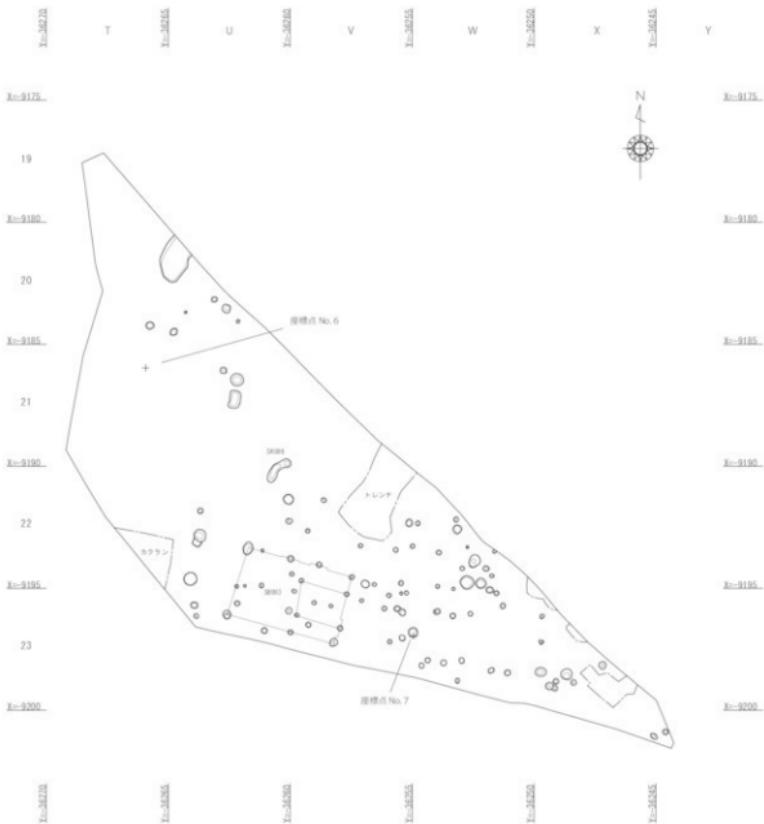


Fig.41 稲佐津留遺跡5区中世以降遺構面 $S = 1/200$

【2層上面：中世以降の調査】

掘立柱建物 SBO03 (Fig.42) E-16°-N に主軸を有し、北長軸 3 間、南長軸 2 間、東短軸 3 間、西短軸 1 間と変則的な柱穴を配する造構。一部に、上下 2 層に分層できる柱穴もあるが柱痕を残すものはない。また、柱穴の掘削深度も一定しないことから積極的に掘立柱建物と認定することは難しい。土師器皿が 1 点出土している。

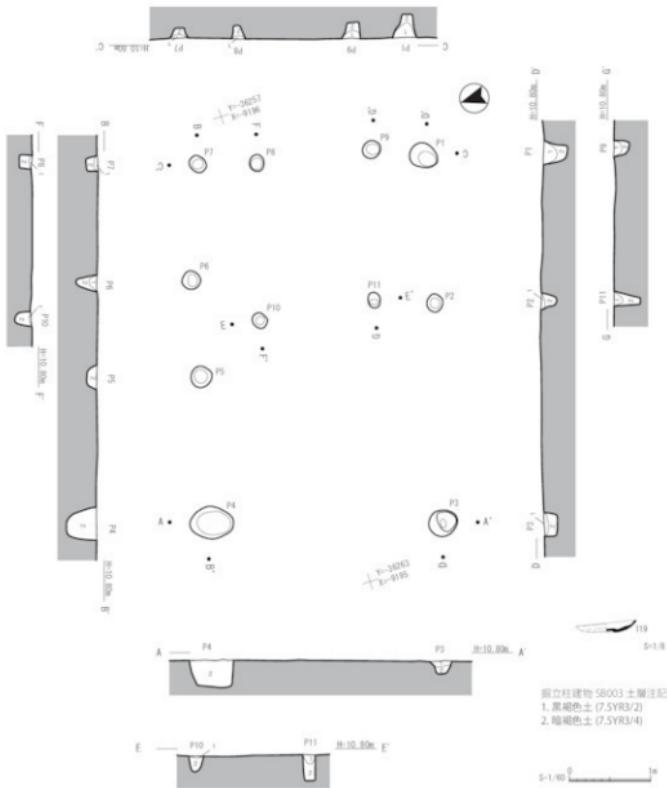


Fig.42 稲佐津留遺跡 5 区掘立柱建物 SBO03 平面図と断面図及び出土遺物

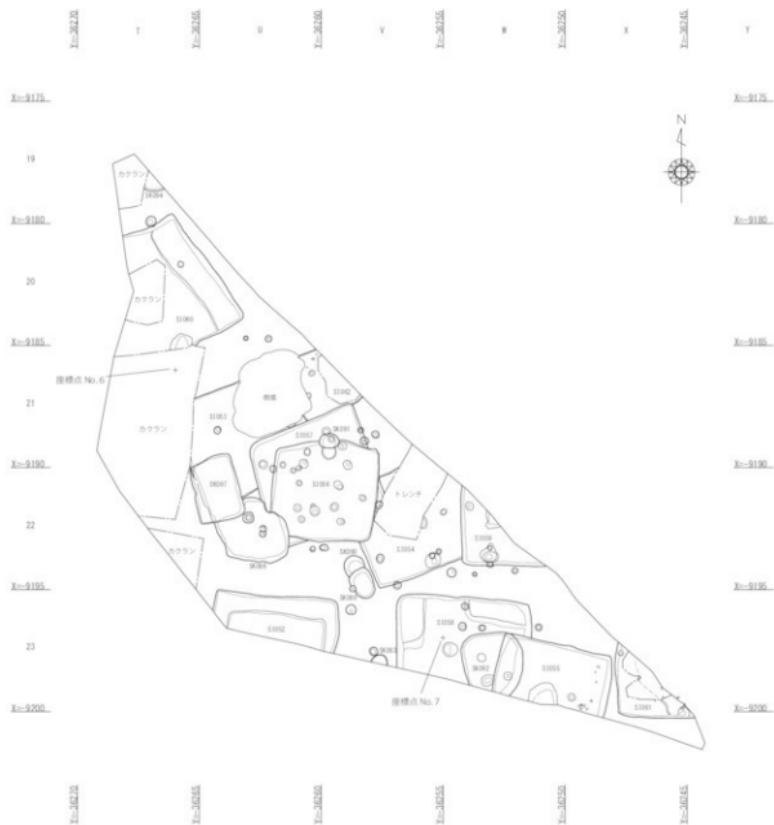


Fig.43 稲佐津留遺跡 5 区弥生後期～古墳時代遺構面 S=1/200

【3層上面：弥生後期～古墳時代初頭の調査】

堅穴建物 SI052 (Fig.44) 調査区際で検出し調査を実施している。遺構の約2/3は調査区南側へ広がり未調査。遺構全体規模は不明であるが、北側遺構線に対し直角に設定した断面ポイントを主軸とすると、N-5°-Eを測る。確認できた北側一辺の規模は5.1mを測る。遺構内部は周囲に50cmから60cmの幅でベッド状遺構を配し、一段下がり床面を構成する。図化した遺物はベッド状遺構上から3点、段落ちの床面付近から1点出土している。いずれも土師器鉢である。炉、主柱穴等は検出できていない。

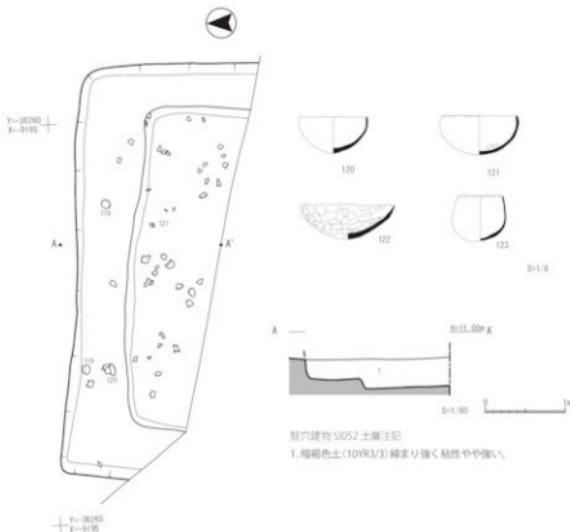


Fig.44 稲佐津留遺跡 5 区堅穴建物 SI052 平面図と断面図及び出土遺物

堅穴建物 SI053 (Fig.45) 平面形はおおよそ、正方形をなすと考えられるが、住居跡、樹痕、土坑により切られ正確な形状は確認できない。N-17°-Wを測る住居短軸部で、4.49mを測る。長軸方向の数値は不明。

出土遺物は、床面付近から土師器片が多数出土しているが細片であるため、実測できる部位は少ない。図化できた遺物として、土師器鉢（124）が1点ある。住居内遺構は柱穴状の掘り込みが1基あるが、掘削深度が浅く柱穴とは考えにくい。他の遺構は確認できていない。

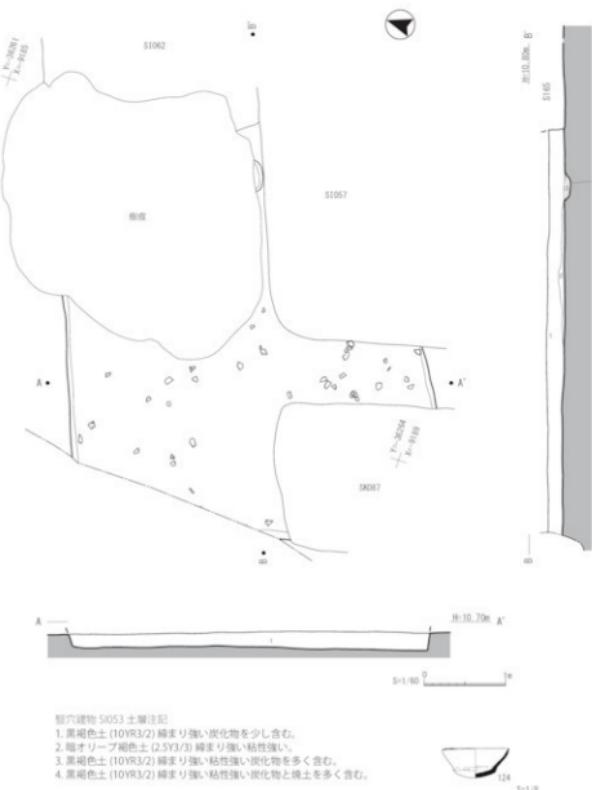


Fig.45 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 SI053 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI054 (Fig.46) 遺構の中央にトレンチが入り、北西部と東側を竪穴建物に切られ検出した遺構。確認できた住居跡は西南に1か所である。残された平面形から推測するに、おおよそ正方形を呈する竪穴建物と見られる。遺構の中央にはトレンチに切れ半分残る、浅く掘り窪められたが (B-B') がある。南壁際には不定形ながらも貯蔵穴と見られる遺構を検出している。主柱穴は明確には確認できていないが、がけを挟んで東西方向にやや不規則ながら1基づつを確認した。ほかに確認できていないことから2本柱の建物であったと考えられる。出土遺物は小片が多く図化できていないが、土師器鉢 (125) が1点出土し図化している。

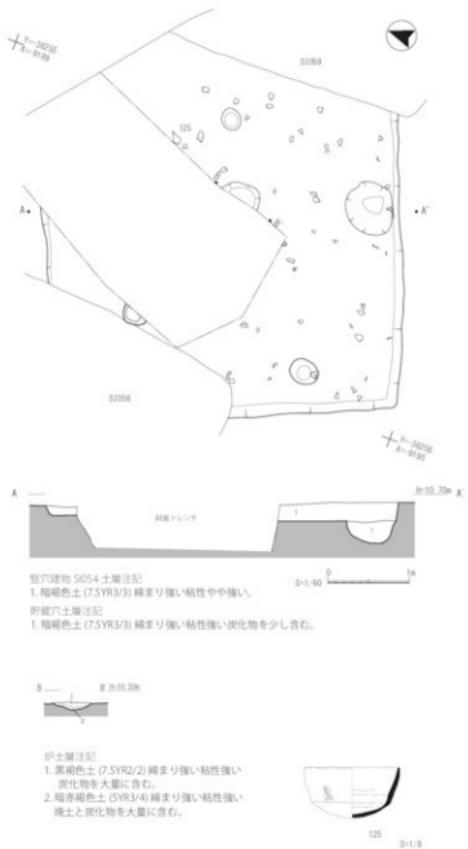


Fig.46 稲佐津留遺跡 5 区豊穴建物 SI054 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI055 (Fig.47) SI059 同様に調査区間で検出し調査を実施した遺構。遺構はおよそ 1/2 が検出できたためかが確認している。主軸は土断面を設定した場所で、N-19°・E を測る。全長を確認した北側辺で 4.73m を測る。柱穴はかくを挟み東西に 1 基づつで、2 基を確認している。検出した位置から、4 本柱から構成される建物と推測できる。図化している遺物はすべて床面直上から出土したもので、土師器跡 (129)、高杯 (126-127)、器台 (130)、壺 (128) が出土している。

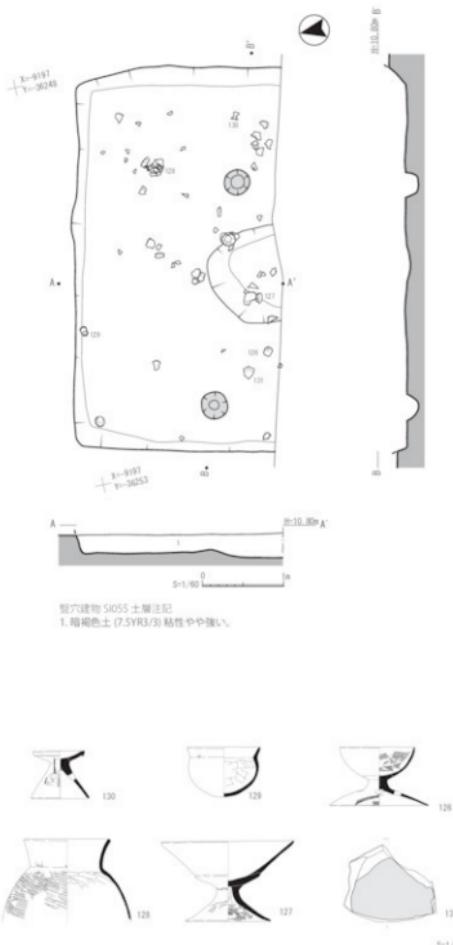


Fig.47 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 SI055 平面図と断面図及び出土遺物

堅穴建物 SI056 (Fig.48) 調査区のほぼ中央で検出し調査を実施している遺構。平面形状はほぼ正方形を呈し、4本柱の柱穴により構成される。柱穴の掘削深度はほぼ同一であり、住居に伴う柱穴であると判断される。主軸はN-2°E、主軸長4.32m 短軸4.10mを測る。遺構北辺の主柱穴間に1基、浅い円形の掘り込みが確認されている。一部を後世の柱穴に切られているため性格までは確認できないが、窓の掘り方部である可能性もある。焼土等の分布は認められていない。建物の中央部埋土中から須恵器縁と鉄鎌の刃部が出土している。その他、土師器片が出土しているが細片のため図示できるものはない。

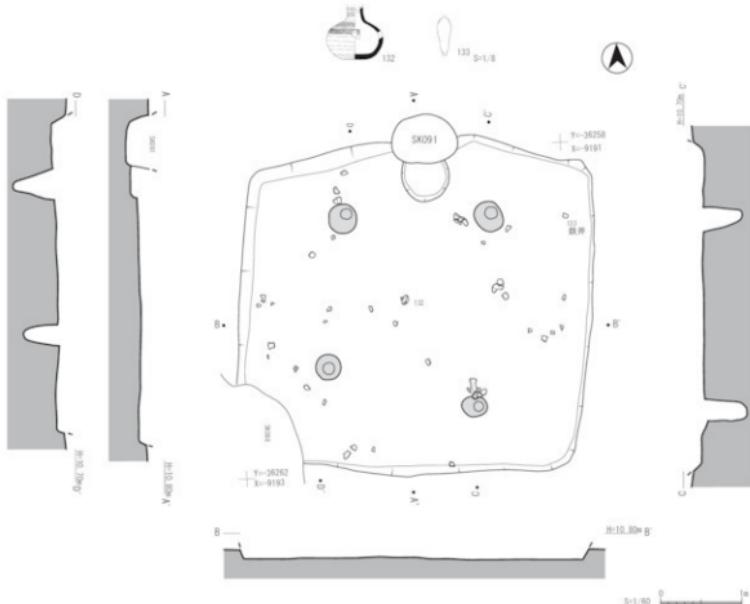


Fig.48 稲佐津留遺跡5区堅穴建物 SI056 平面図と断面図及び出土遺物

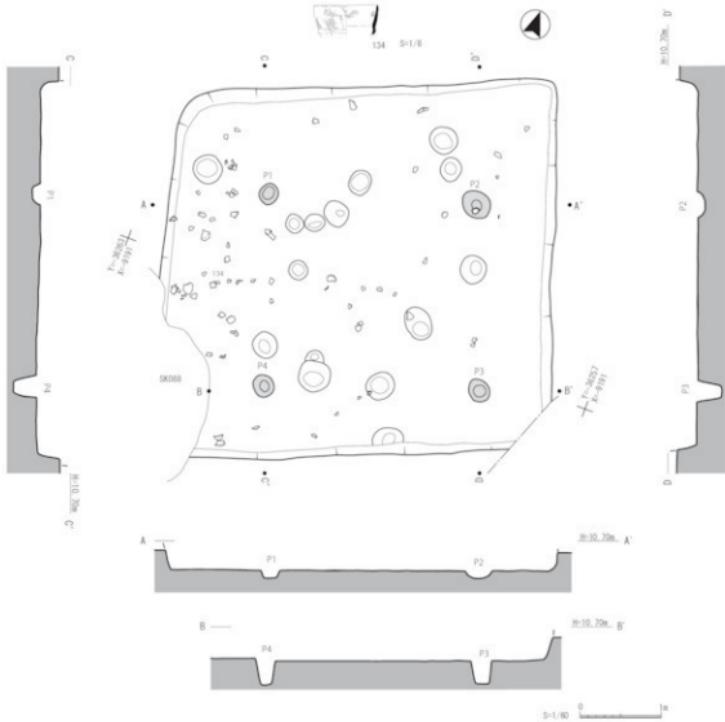


Fig.49 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 S1057 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 S1057 (Fig.49) 遺構平面は正方形で、主軸が N-21°-W、長径 9.45m を測る。掘り方も垂直に掘り込まれる。床面には小柱穴が多数検出され、おおよそ主柱穴の位置する場所にも掘り込みを見て取ることができる。しかし、P1,P3,P4 はほぼ同一の掘り込みを呈するが、P2 のみ浅く柱穴とは考えられない。遺構内には柱穴以外の施設は見られない。遺物の大半は、埋土中にあたり埋没過程時の流れ込みと判断されるが、僅かに土師器小型鉢 (134) のみは、調査時に床面上出土遺物として取り上げられている。

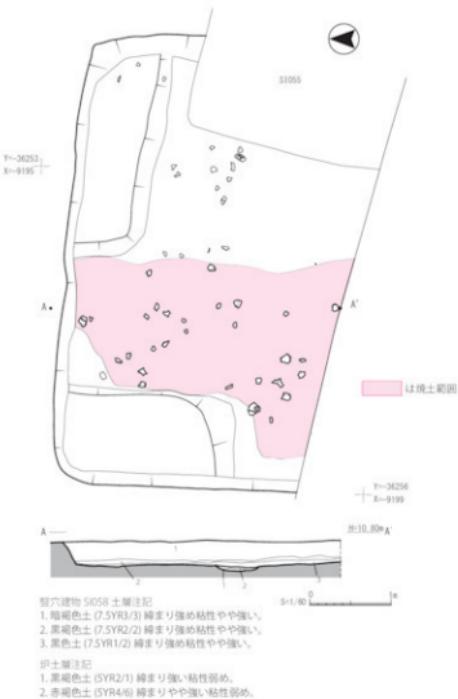
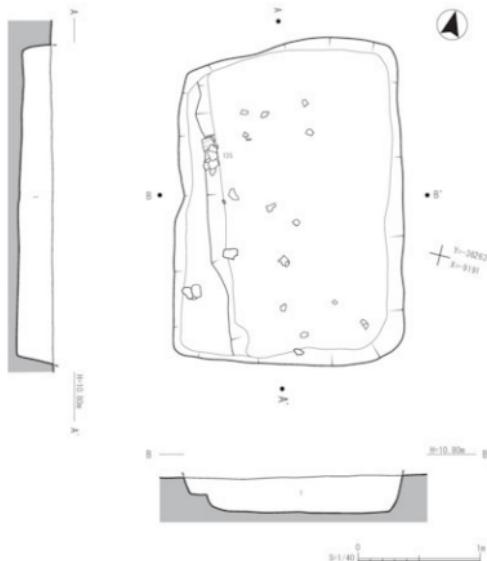


Fig.50 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 SI058 平面図と断面図

竪穴建物 SI058(Fig.50)遺構の東側を竪穴建物 SI055 により切られ検出した遺構。遺構の約 1/2 が調査区外に伸びる。平面形は正方形を呈するものと見られる。遺構内部は両隅際にベッド状の高まりを持つ。床面には焼土の広がりがあり、その一部は壁際にまで達する。遺構本来の位置からすると、やや北側に寄った位置から円形の掘り込みを有する柱を検出している (A-A' 土層断面図中に表記)。出土遺物は小片が多く図化できるものがなかった。

土坑 SK087 (Fig.51) 長方形のプランを呈する遺構。西側一边にのみ二段の掘り方を残す。遺物は、その落ち際から土師器甕が1点出土している。埋土には暗褐色土が単層で入るのみであることから、現段階で得られている情報のみでは遺構の性格までは考察できない。



土坑 SK087 土質注記
1. 暗褐色土 (7 SYR3/3) 程度より強い粘性やや強い。
炭化物を少し含む。



Fig.51 稲佐津留遺跡 5 区土坑 SK087 平面図と断面図及び出土遺物

土坑 SK088 (Fig.52) 平面形が不定形な形状を呈する遺構。北西部を SK087 により切られる。上端が不定形であるが、下端はほぼ水平で、床面近くから多くの土師器を出土している。



Fig.52 稲佐津留遺跡 5 区土坑 SK088 平面図と断面図及び出土遺物

6区の概要 (Fig.53) 6区は5区同様に南側へ緩やかに落ち込む緩斜面に位置する調査区である。南側には木葉川が西流していることから川側の傾斜面上であるとも言える。遺構は3層を遺構検出面とする古代以降の遺構と、3層を遺物包含層とし、4層上面で遺構検出面を迎える弥生後期から古墳時代初頭にかけてに遺構の2枚を調査の対象としている。古代の溝状の遺構群は柱穴群と共に多数出土しているが、調査時の記録が不足しているため本報告で記していない。周辺の調査が行われた際の参考として遺構配置図にのみ記している。

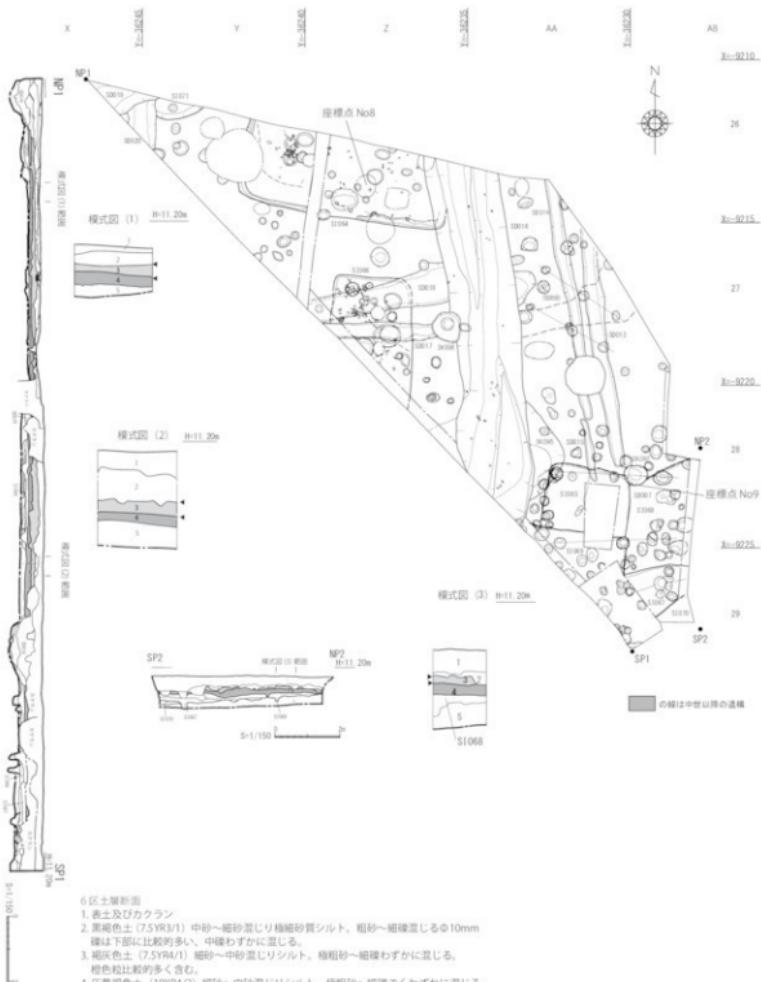


Fig.53 稲佐津留遺跡6区遺構配置図及び土層断面図

竪穴建物 SI064 (Fig.54) 本遺構は、遺構の大半が調査区の外に位置し、全体形の約2/5を調査したにすぎない。遺構内にはベット状遺構が巡り、壁際で2本の柱穴を検出している。また、壁際には周溝が巡り、周壁施設があったことが想定される。遺構の南辺のみしか検出できていないが、規模は大きく、約5.90mを測る。今回の調査で検出した遺構中では最大規模の竪穴建物である。

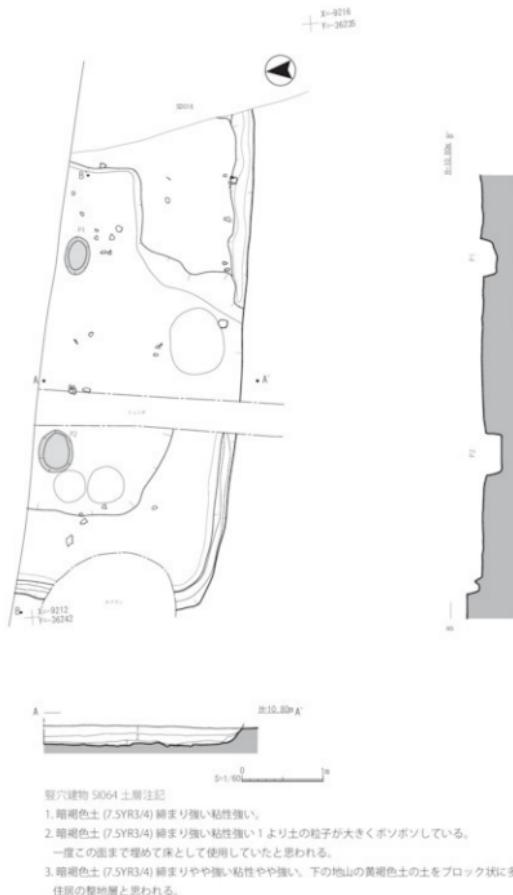
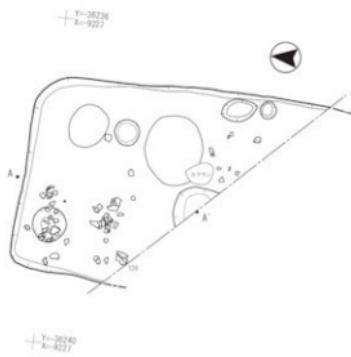


Fig.54 稲佐津留遺跡 6 区竪穴建物 SI064 平面図と断面図



竪穴建物 SI066 土層注記
 1 黒褐色土 (2.5YR3/2) 粘性強い締まり強い炭化物を少し含む。
 2 土層注記
 1 黄褐色土 (7.5YR3/3) 締まり強い粘性強い黄褐色土ブロック、炭化物、飛土を少し含む。
 2 黄褐色土 (7.5YR3/3) 締まり強い粘性強い黄褐色土ブロックを若干含む、炭化物、飛土を多く含む。



Fig.55 稲佐津留遺跡 6 区竪穴建物 SI066 平面図と断面図及び出土遺物

竪穴建物 SI066 (Fig.55) 本道構は、他の検出した道構のなかでも規模が小さく、竪穴建物であるか迷ったが道構中央に炉を検出していることから竪穴建物として報告する。道構は調査区の外に延び、約 1/2 の検出に留まった。壁際には炉を検出しているが、柱穴は未確認である。硬化面は確認できていないが、床面相当の位置から土師器高杯部が出土している。

7区の概要 (Fig.56) 7区は、2区の南側に位置する。間に約10mの間隔をおき調査を実施している。他の調査区に比べ遺構密度は低い。

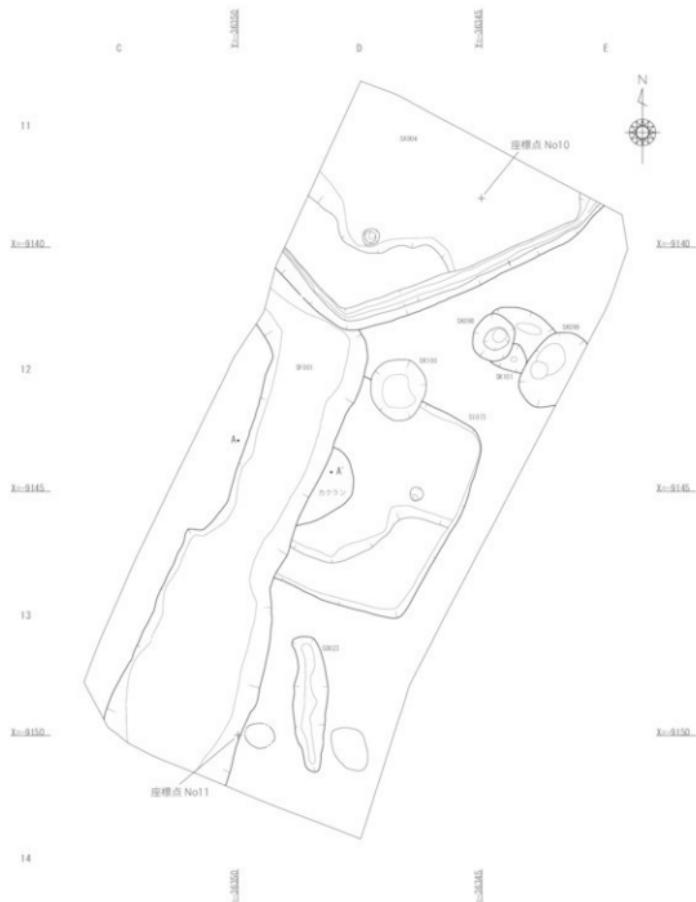


Fig.56 稲佐津留遺跡 7区遺構配置図

S=1/100

道路状遺構 SF001 (Fig.57) 調査区際で検出された道路状の遺構。主軸は N·22°·E を測る。床面は硬化しておりフラットである。北端ではほぼ直角に西に折れる。幅は北側の屈曲部近くで狭くなり直線部で僅かに広がる。

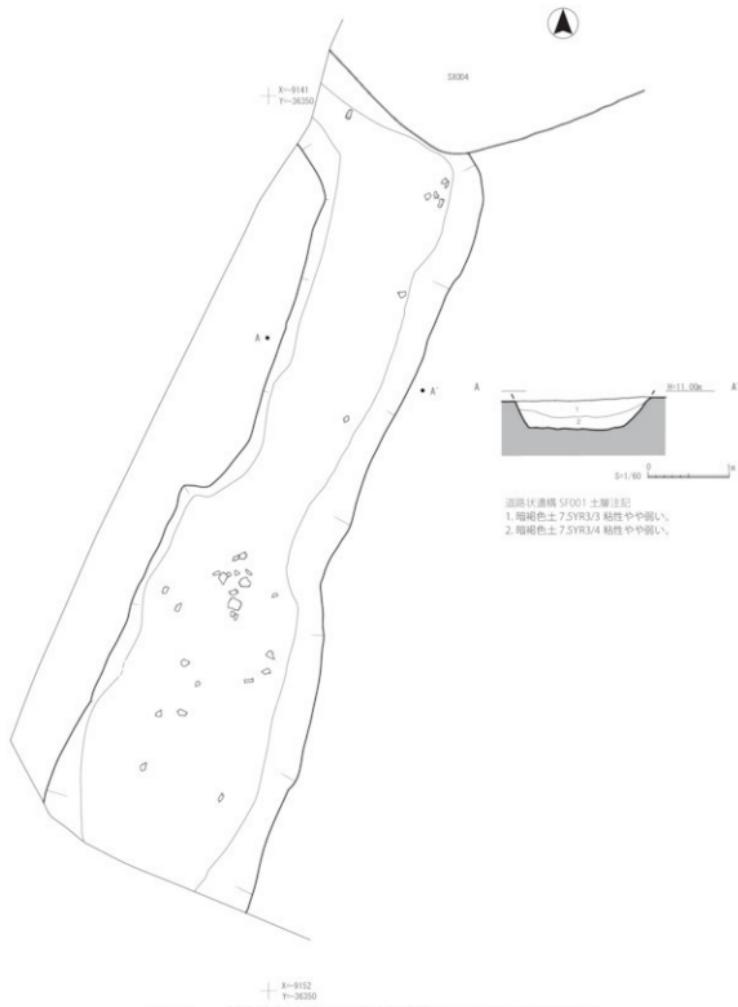


Fig.57 稲佐津留遺跡 7 区道路状遺構 SF001 平面図と断面図

竪穴建物 SI073 (Fig.58) 調査区の外に延び、約 1/2 の範囲を調査した。遺構南側にはベッド状遺構が巡り、内部には硬化面を検出している。中央部を擾乱により失っていることから炉は確認していない。柱穴は 1 基をベット状際で検出しているが、対になるものは確認できていない。遺構は東側辺で 4.5m を測る。

不明遺構 SX004 (Fig.59) 周壁際に周溝が巡り検出した遺構。一辺が 6.0m を測るが、遺構屈曲部が緩やかなため、竪穴建物との認識は持てない。内部には土師器の壺、甕、高杯、杯等が多数入るが、遺構の性格は不明である。

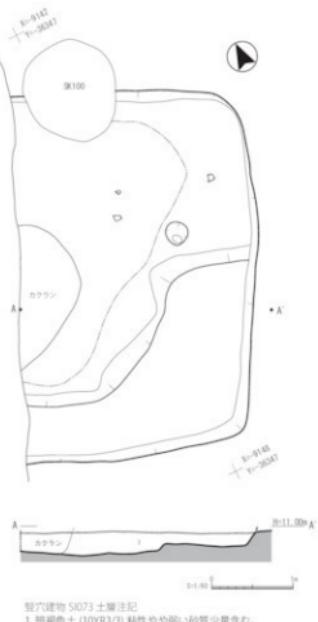
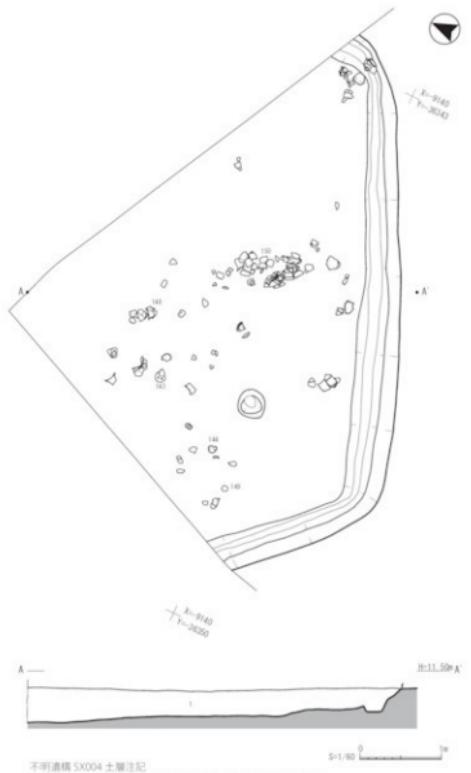


Fig.58 稲佐津留遺跡 7 区竪穴建物 SI073 平面図と断面図



不明遺構 SX004 土層注記
1.暗褐色土(10YR3/3)繊毛りやや強め粘性やや弱め砂少量含む。

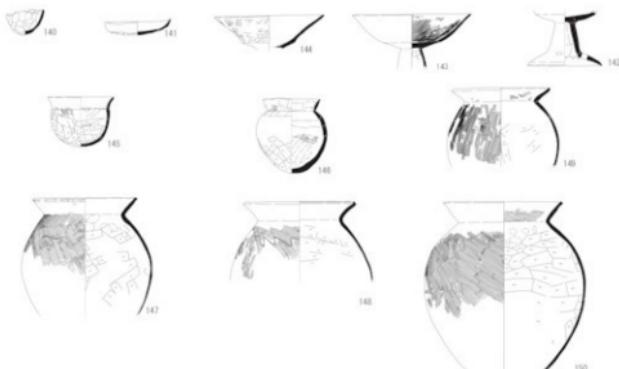


Fig.59 稲佐津留遺跡 7 区不明遺構 SX004 平面図と断面図及び出土遺物

(2) 出土遺物

本書で使用した遺物の年代（編年）は、本遺跡が菊池川流域に位置する遺跡であることから、高木正文氏による津袋遺跡土器編年¹、うてな遺跡²での西住欣一郎氏による編年、蒲生・上の原遺跡での木崎康弘氏による編年を参考として年代観をあたえた。

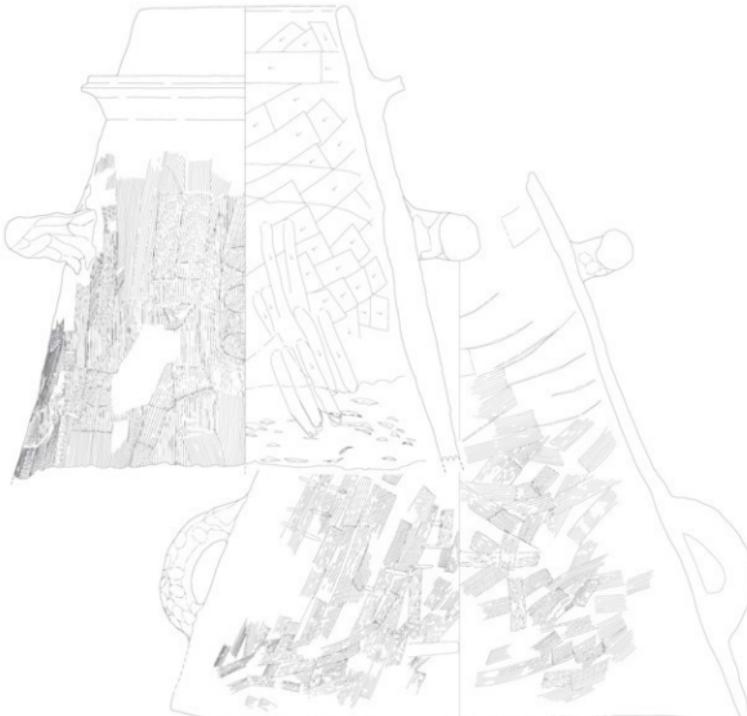
また、山陰系土器については、島根県立出雲古代歴史博物館学芸課長足立倫行氏、同館平石充氏に助言を求め、望月精司「額見町遺跡出土の煙突状土製品に関する考察」—山陰型壺形土製品と円筒形土製品とを繋ぐもの—『石川考古学研究会々誌第50号』2007年3月を参考にした。

土器編年における最終的な文責は、長谷部にある。

-
- 1 高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」「古文化調査」第6集 1979年
 - 2 熊本県教育委員会「うてな遺跡」熊本県文化財調査報告 第121集 1992年
 - 3 熊本県教育委員会「蒲生・上の原遺跡」熊本県文化財調査報告 第158集 1996年

その他、参考文献

- 『弥生文化の研究』4 弥生土器 II 塚山畠
『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 塚山畠
『考古資料大綱』第2巻 弥生・古墳時代 土器 II 小学館
島津義昭「巴形調節二例」一肥後の出土品についての報告と若干の問題—「森貞次郎博士吉希記念古文化論集」
熊本県教育委員会「柳町遺跡II」熊本県文化財調査報告書 第200集 2001年
熊本県教育委員会「柳町遺跡II」熊本県文化財調査報告書 第218集 2004年



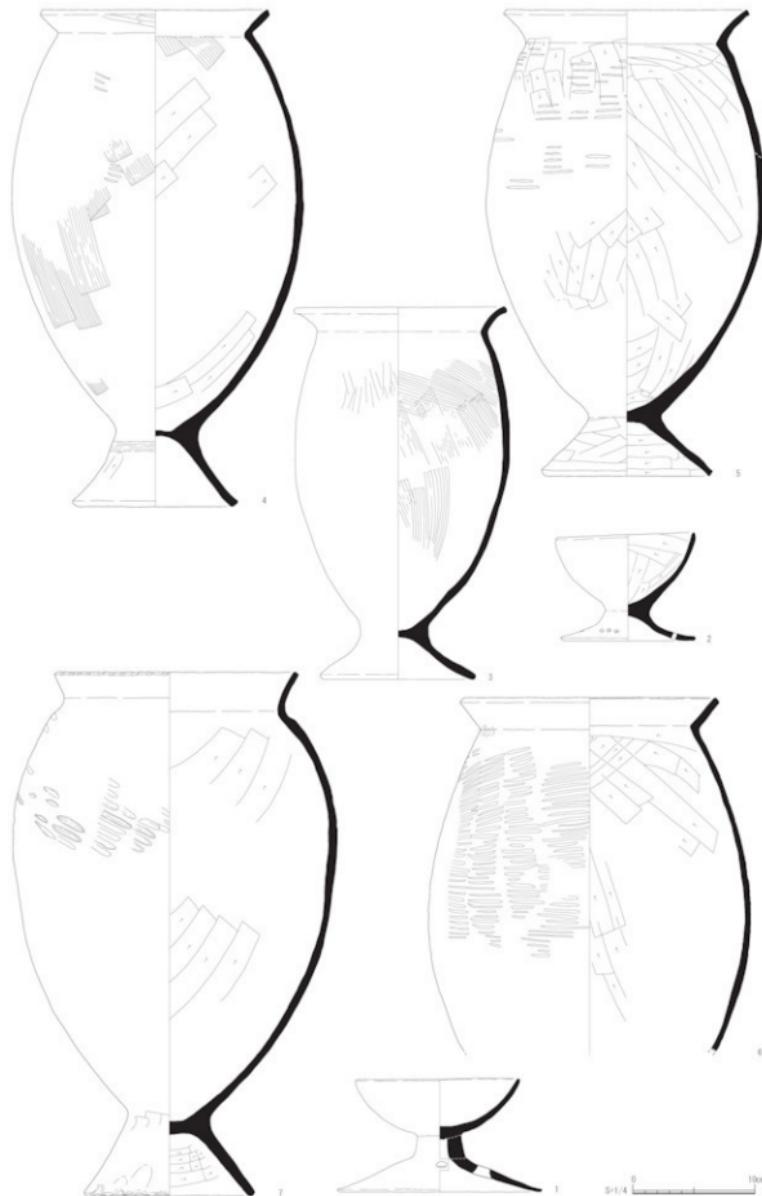


Fig.60 稲佐津留遺跡 1 区溝 SD007 (1)、堅穴建物 SI001 出土遺物実測図



Fig. 61 稲佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI002 出土遺物実測図

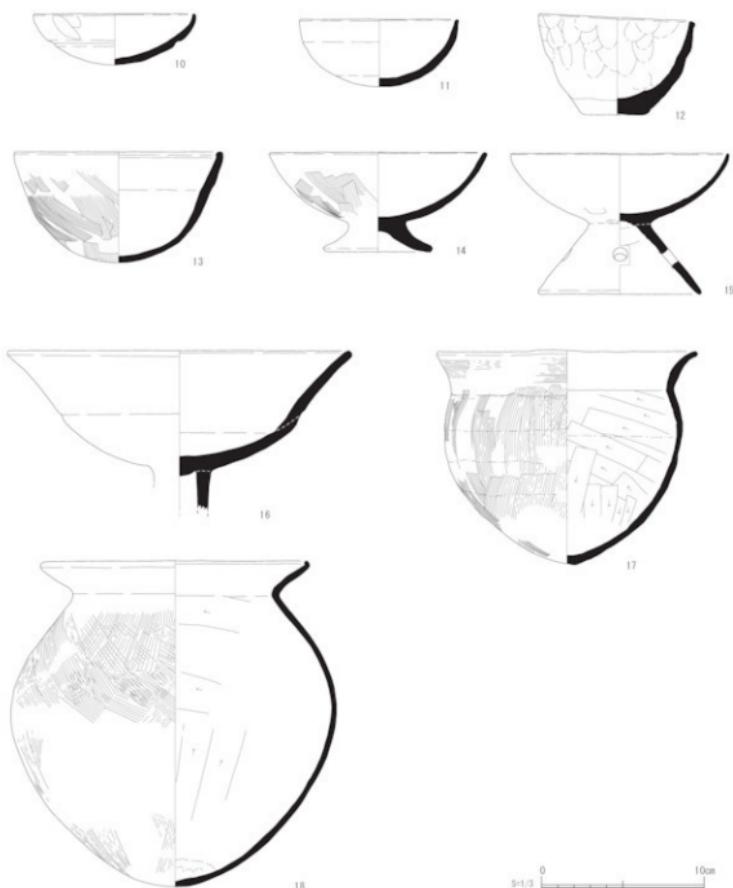


Fig. 62 稲佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI003 出土遺物実測図-①

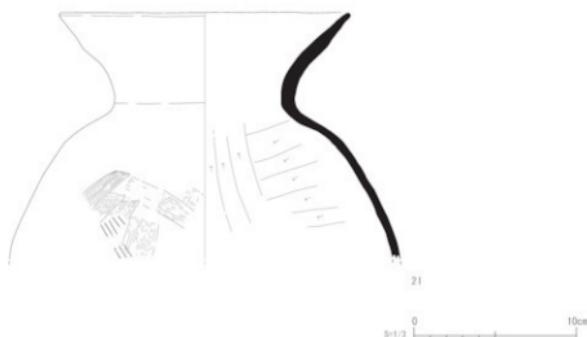
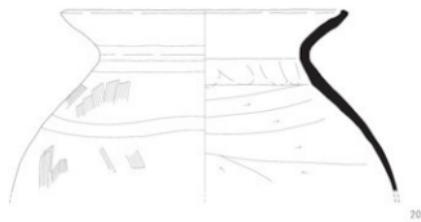
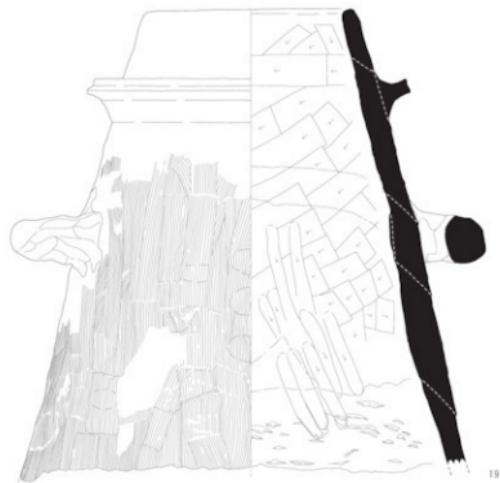


Fig.63 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI003 出土遺物実測図—②

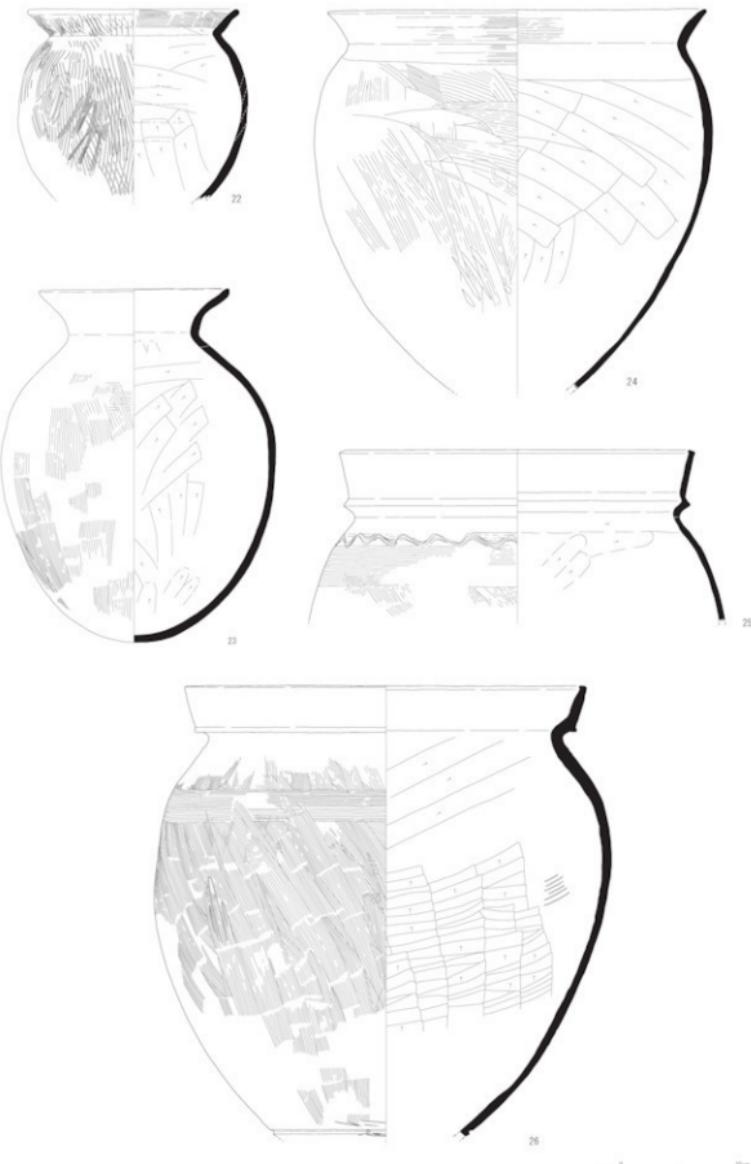


Fig.64 稲佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI005 出土遺物実測図一①



Fig.65 稲佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI005 出土遺物実測図—②

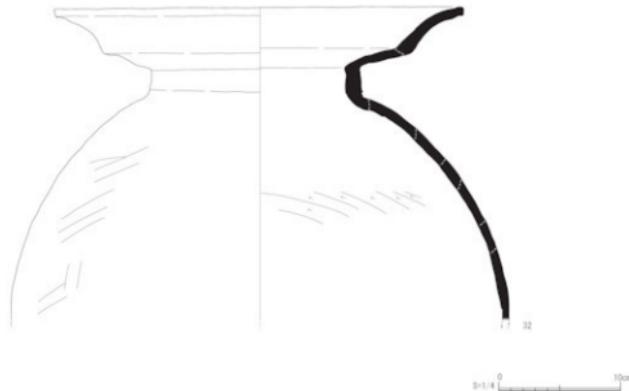


Fig.66 稲佐津留遺跡 1 区土坑 SK042 出土遺物実測図

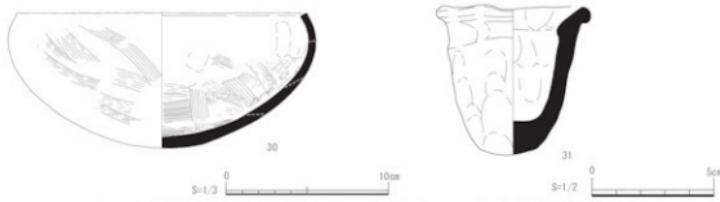


Fig.67 稲佐津留遺跡1区土坑SKO10(30)、SKO39(31)出土遺物実測図

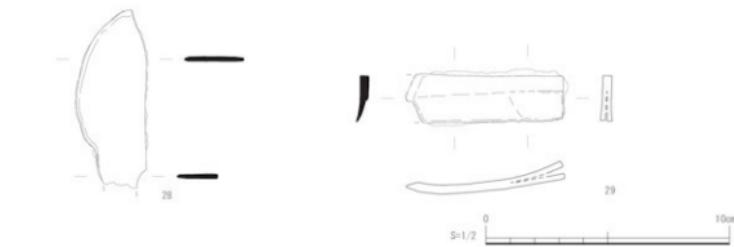


Fig.68 稲佐津留遺跡1区土坑SKO01出土遺物実測図

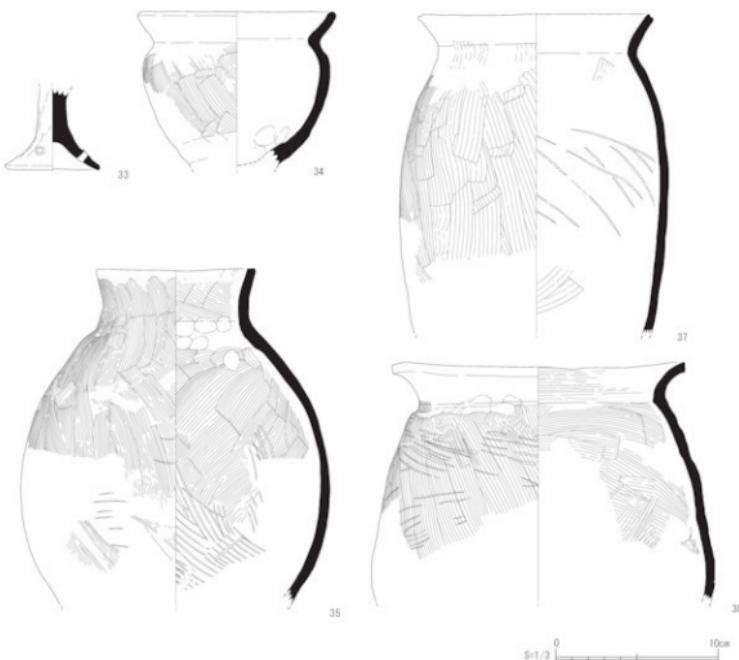
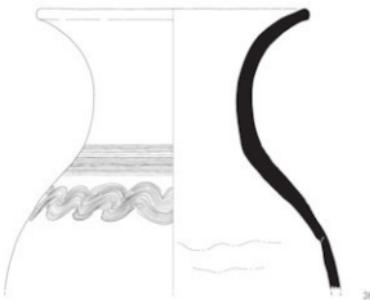


Fig.69 稲佐津留遺跡2区竪穴建物SI014出土遺物実測図-①



36



39



40

5-1/3 0 10cm

Fig.70 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI014 出土遺物実測図-②



41



42

5-1/3 0 10cm

Fig.71 稲佐津留遺跡 2区竪穴建物 SI014 出土遺物実測図-③

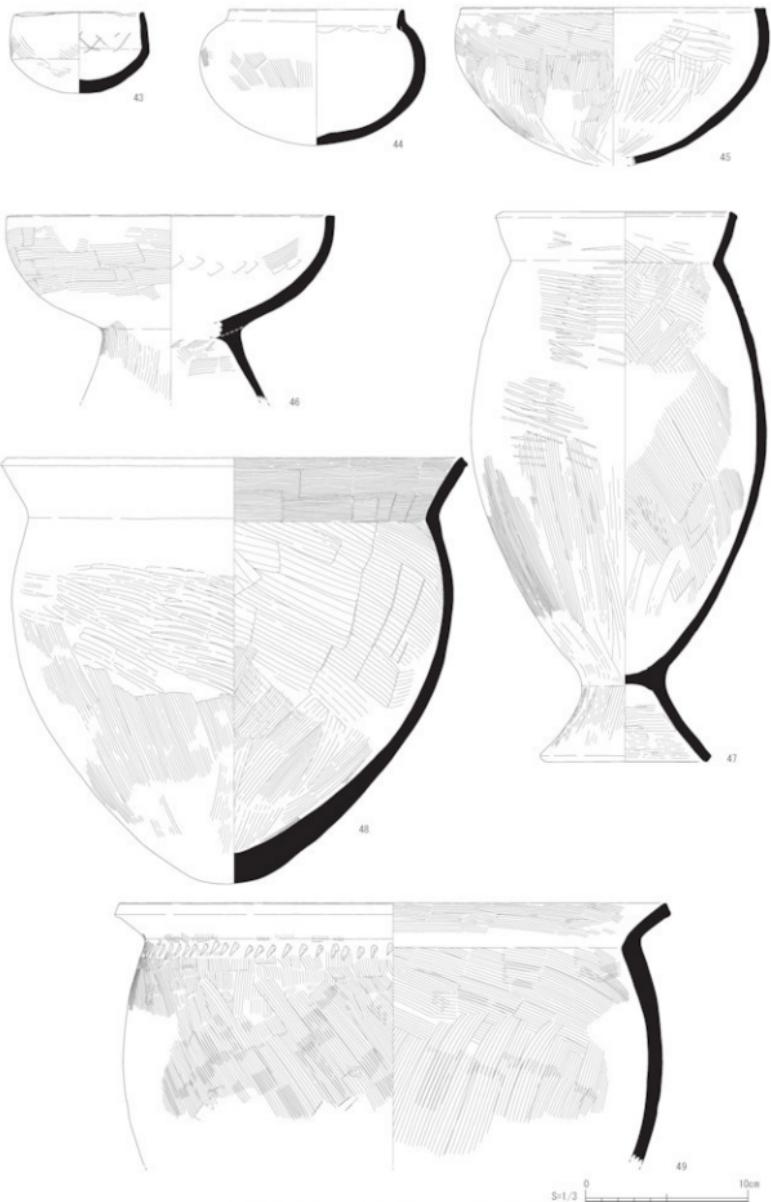


Fig.72 稲佐津留遺跡2区竪穴建物S1015出土遺物実測図-①

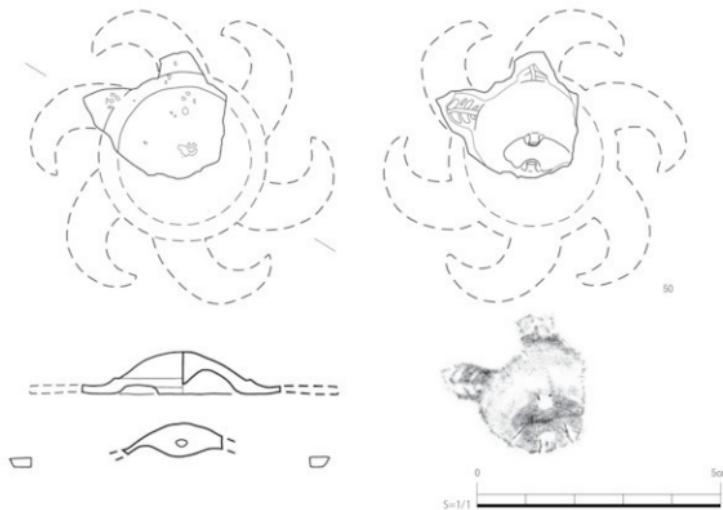


Fig.73 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SIO15 出土遺物実測図一②

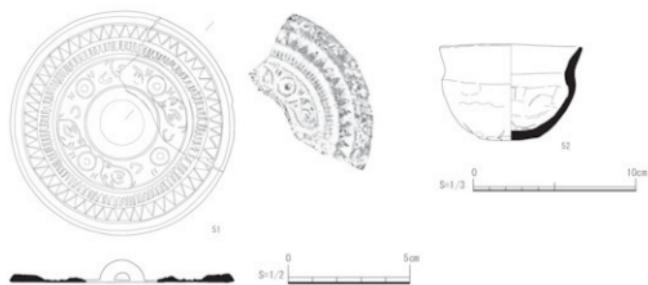


Fig.74 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SIO16 出土遺物実測図

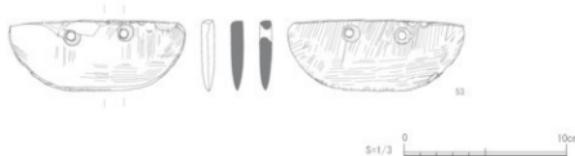


Fig.75 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SIO17 出土遺物実測図

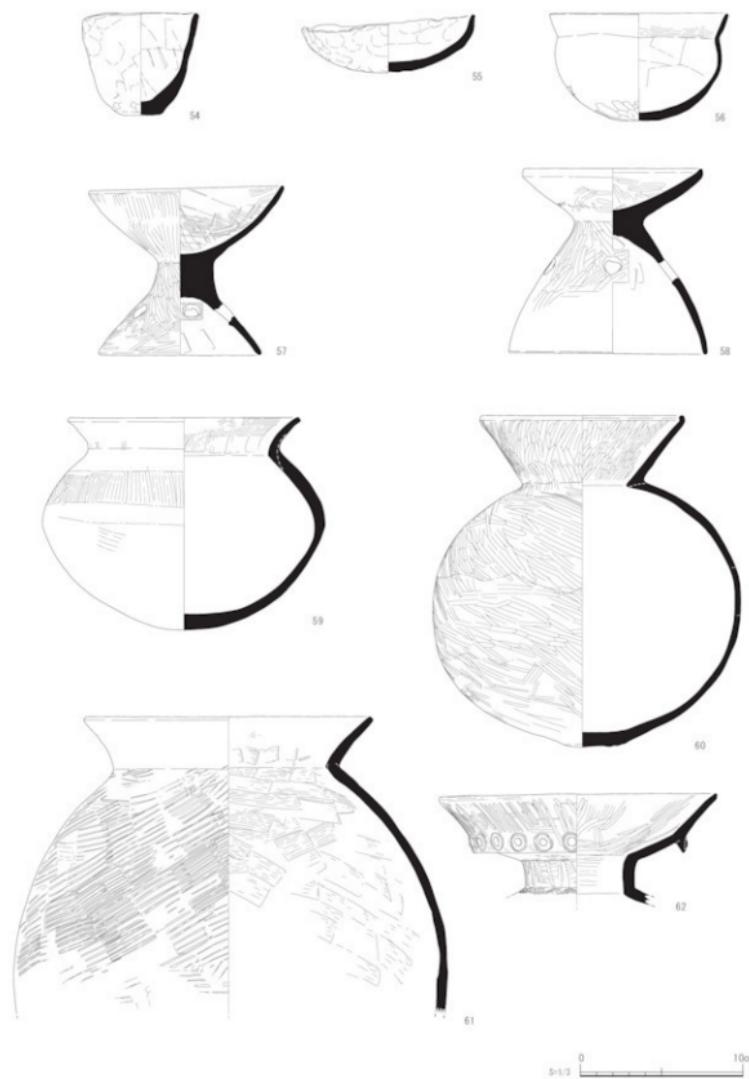


Fig.76 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI018 出土遺物実測図一①

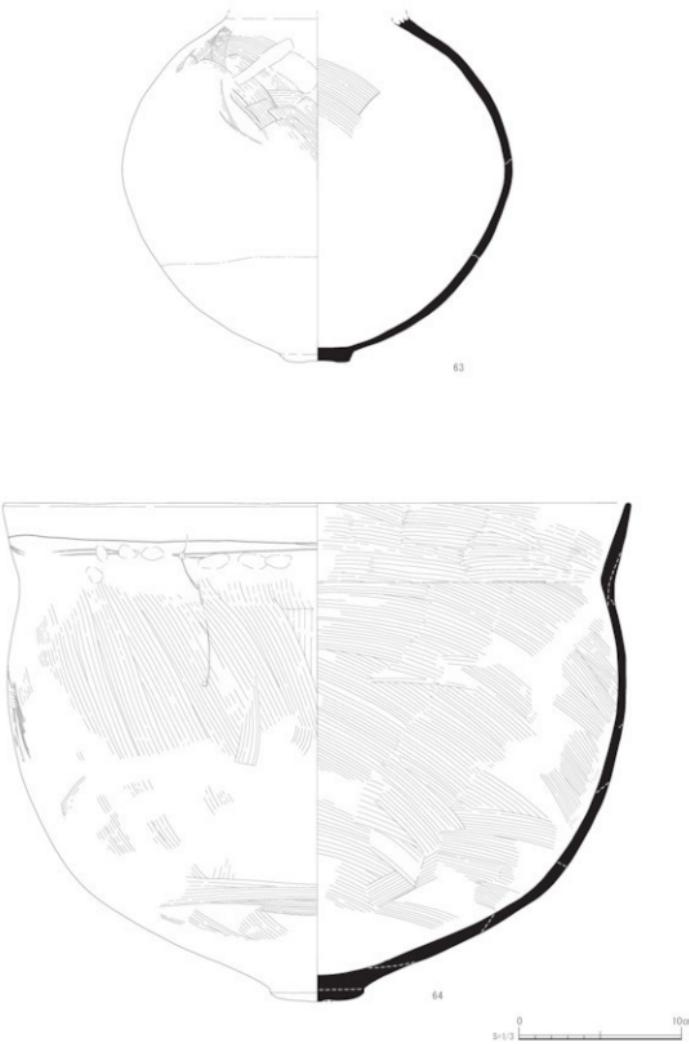


Fig.77 稲佐津留遺跡 2 区竖穴建物 S1018 出土遺物実測図—②



65

Fig.78 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI019
出土遺物実測図



66



67

Fig.79 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI020
出土遺物実測図



68



71



70

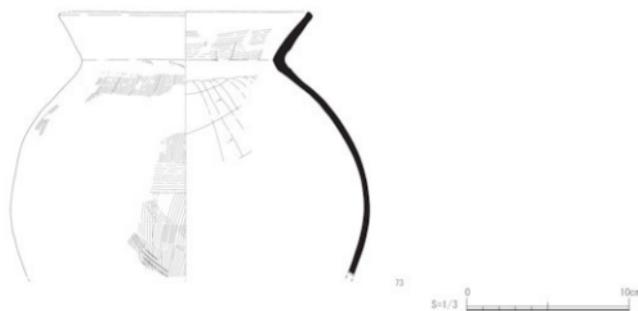


69



72

Fig.80 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK046 出土遺物実測図



5-1/3 0 10cm

Fig.81 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK048 出土遺物実測図



74

5-1/2 0 5cm

Fig.82 稲佐津留遺跡 2 区調査区内出土遺物実測図（製塙土器）



Fig.83 稲佐津留遺跡3区堅穴建物SI030(75・76)、SI031(77～79)出土遺物実測図

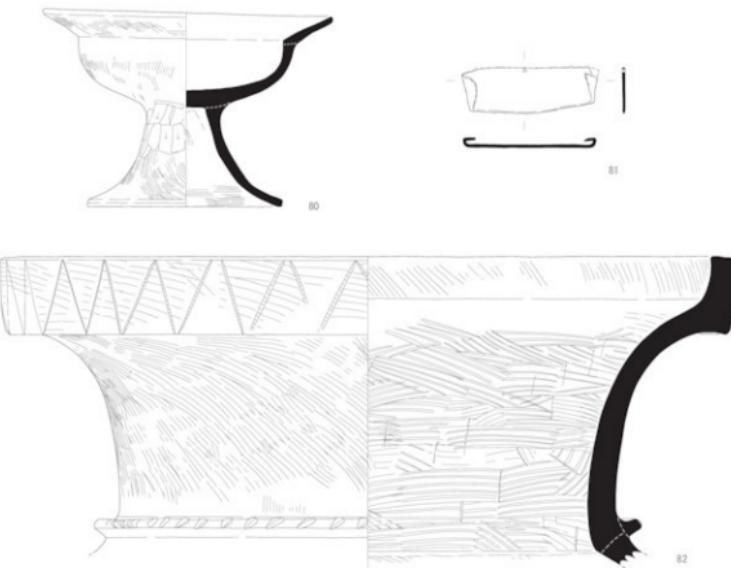


Fig.84 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI032 出土遺物実測図

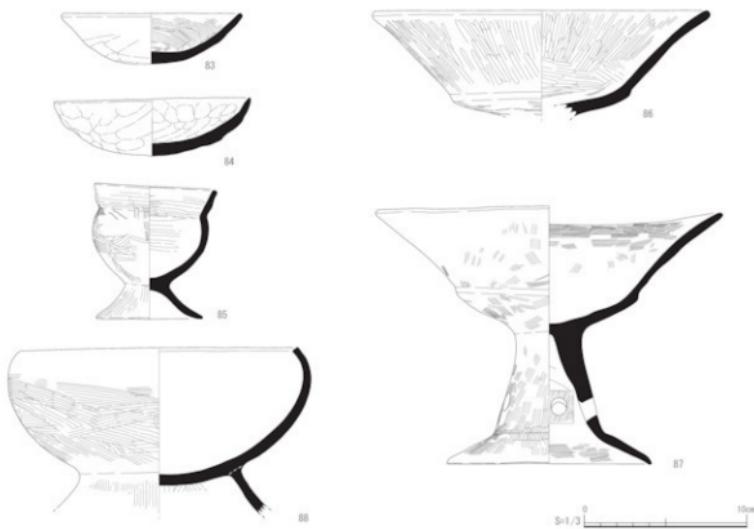


Fig.85 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI034 出土遺物実測図—①

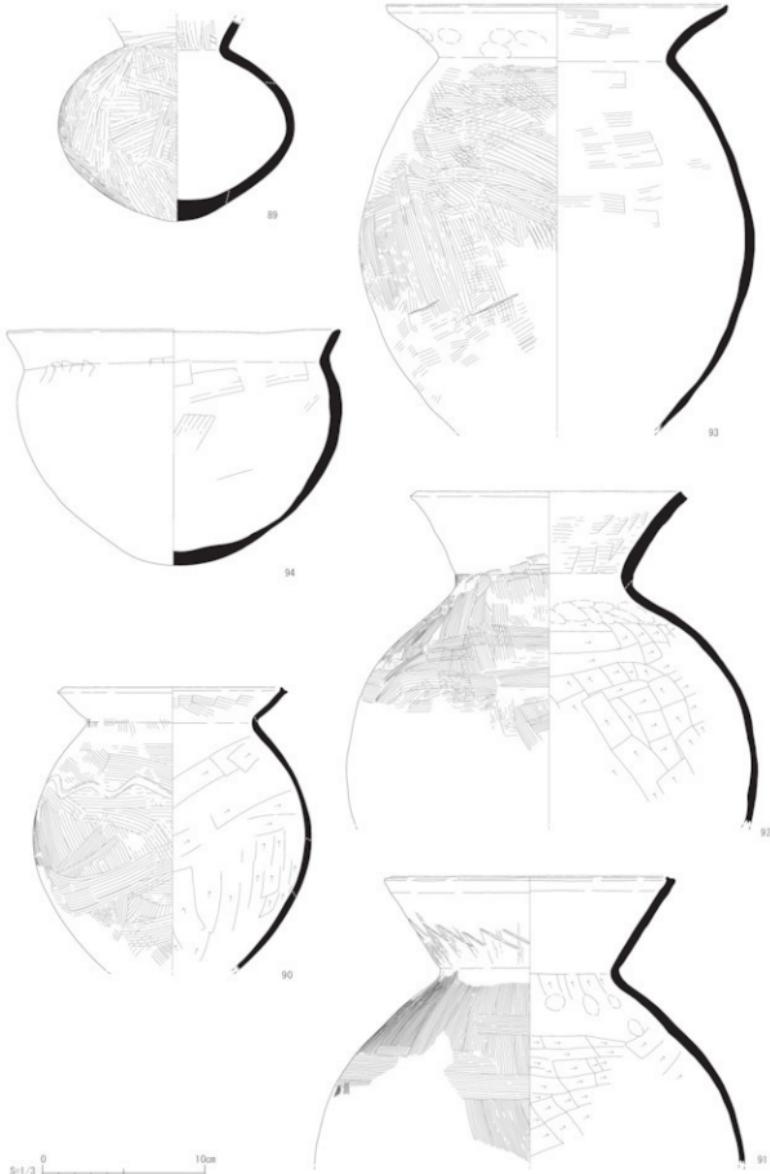


Fig.86 稲佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI034 出土遺物実測図-②



Fig.87 稲佐津留遺跡3区堅穴建物SI036(95)、SI044(96・97)、SI045(98～101)
SI047(102)、SI049(103)出土遺物実測図

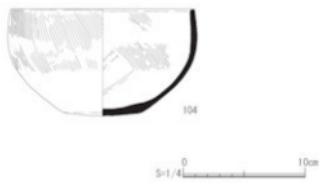


Fig.88 稲佐津留遺跡3区
土坑SK067 出土遺物実測図

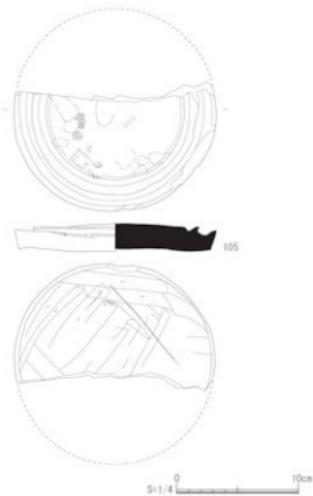


Fig.89 稲佐津留遺跡3区土坑SK077 出土遺物実測図

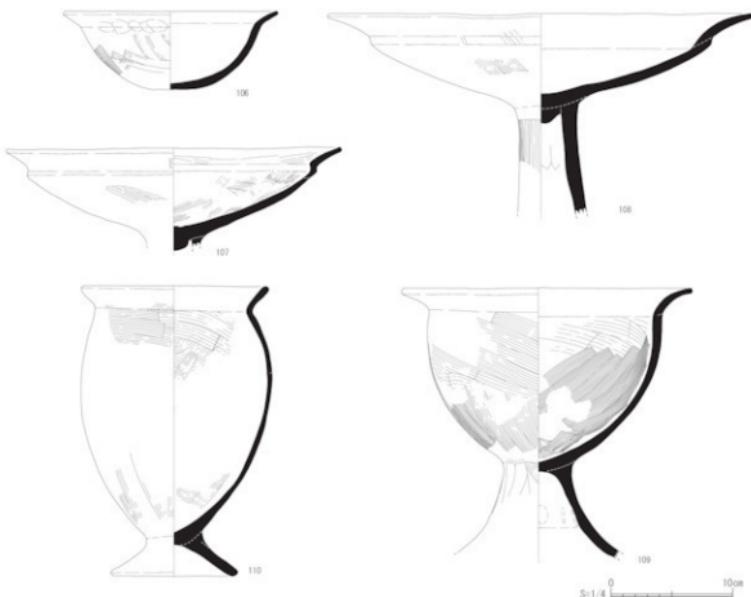


Fig.90 稲佐津留遺跡3区不明遺構SX002 出土遺物実測図-①

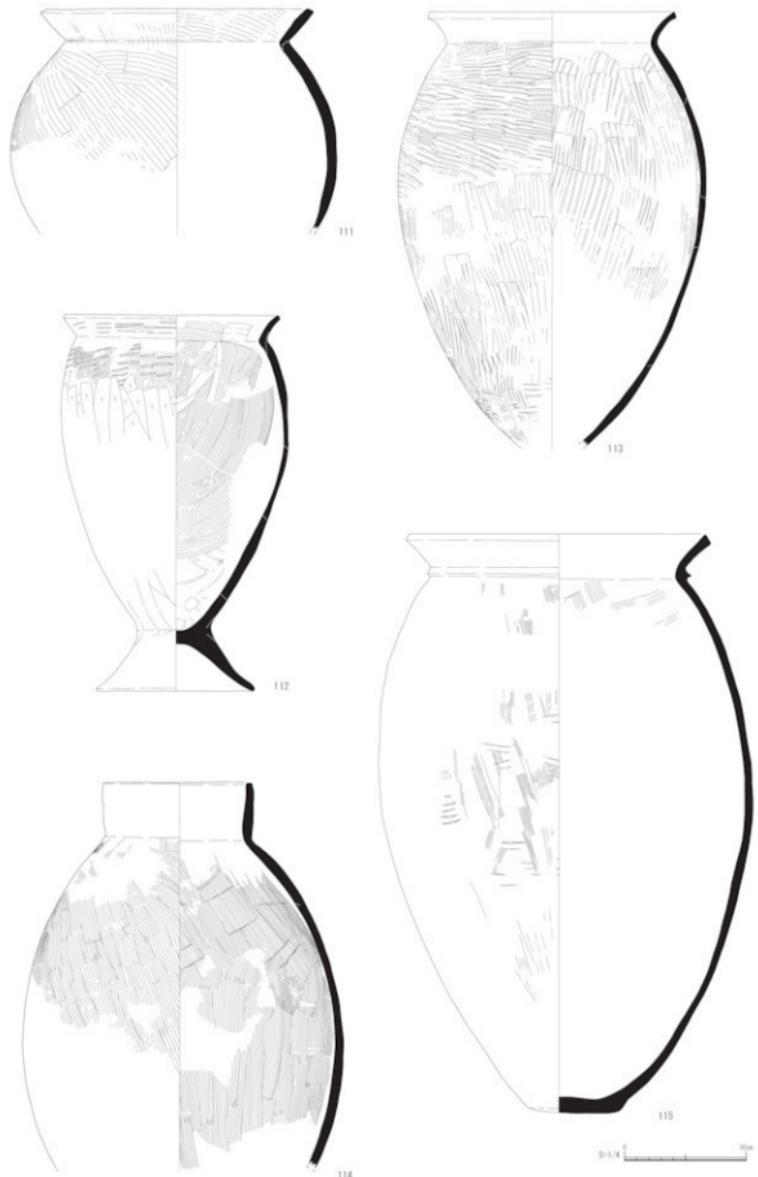


Fig.91 稲佐津留遺跡3区不明遺構SX002出土遺物実測図-②

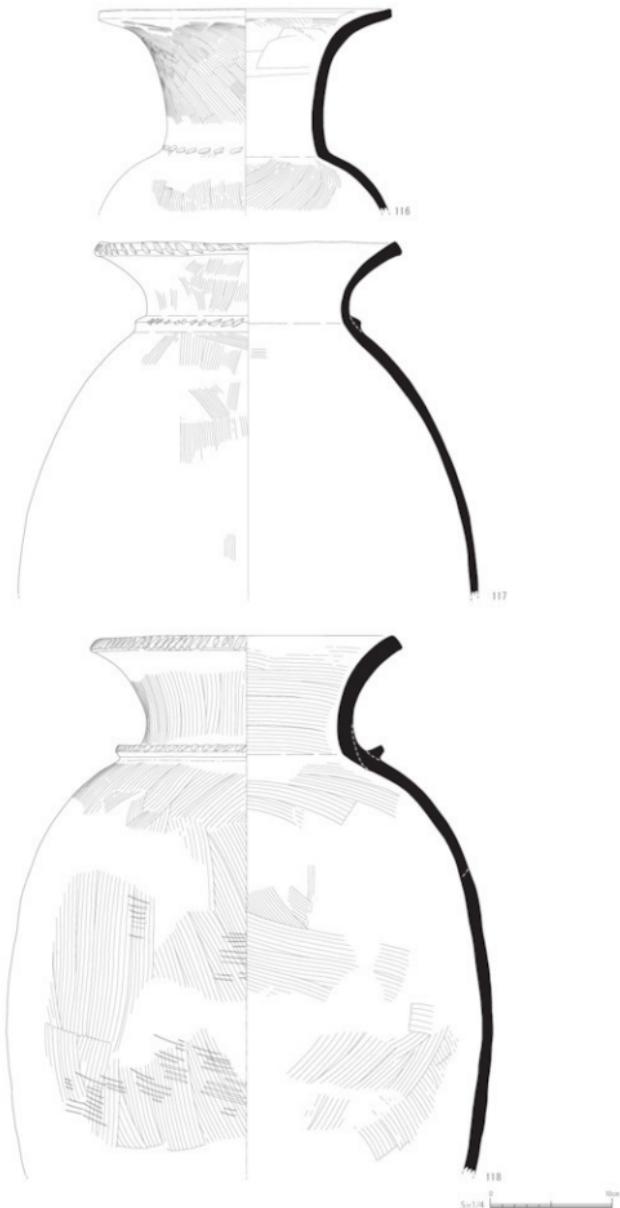


Fig.92 稲佐津留遺跡3区不明遺構 SX002 出土遺物実測図-③



Fig.93 稲佐津留遺跡 5 区堅穴建物 SI052 (120 ~ 123)、SI053 (124)
SI054 (125)、SI055 (126 ~ 131) 出土遺物実測図



Fig.94 稲佐津留遺跡 5 区掘立柱建物 SBO03 出土遺物実測図

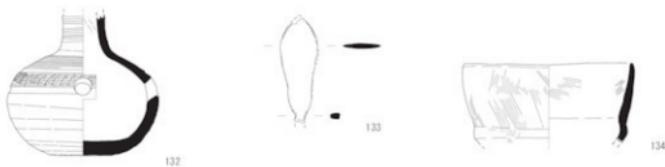


Fig.95 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 SI056 (132・133)、SI057 (134) 出土遺物実測図

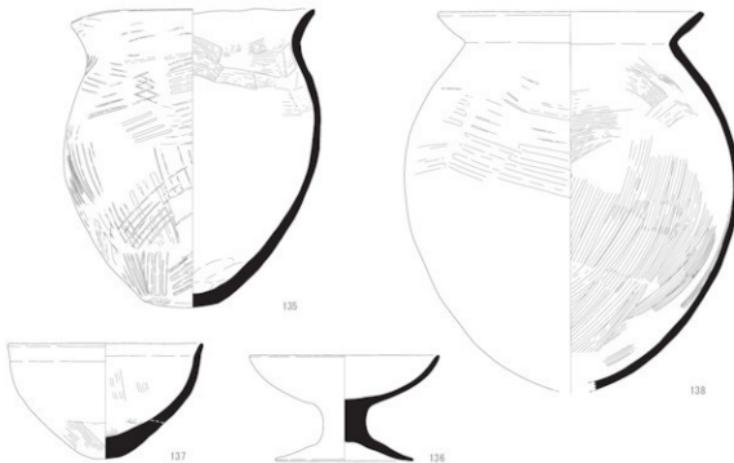


Fig.96 稲佐津留遺跡 5 区土坑 SK087 (135)、SK088 (136～138) 出土遺物実測図

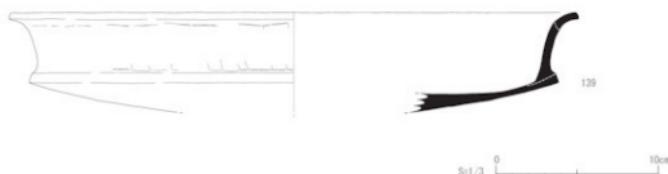


Fig.97 稲佐津留遺跡 6 区竪穴建物 SI066 出土遺物実測図



Fig.98 稲佐津留遺跡 7 区不明遺構 SX004 出土遺物実測図



稻佐津留遺跡 2010年5月

1区 流動鋏形表

遺物番号	F.g. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量(cm)				色調	
							口径	底径	最大 側径	残存高	外面	内面
1	60	10	SI007	土器類	高杯	—	13.5	16.6	—	9.3	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2
2			SI001	弥生式土器	脚付鉢	No.44	10.7	11.0	—	8.9	にぶい黄緑 10YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/4
3			SI001	弥生式土器	脚付甕	No.19.21.22.23	17.5	12.8	17.6	30.5	にぶい黄緑 10YR7/4	浅黄緑 10YR8/3
4			SI001	弥生式土器	脚付甕	No.35.36.39.58	(18.8)	(13.6)	(24.4)	40.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
5			SI001	弥生式土器	脚付甕	No.9.16	(20.2)	14.0	(23.0)	38.2	浅黄緑 10YR8/3	浅黄緑 10YR8/3
6			SI001	土器類	甕	No.1.3.12.29.33 41.44	21.2	—	(26.2)	29.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
7			SI001	弥生式土器	脚付甕	No.2.3.4.8.12.13.15.27	(18.8)	14.4	26.8	43.4	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3
8			SI002	弥生式土器	脚付甕	—	12.5	8.4	11.4	12.9	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄緑 10YR5/3
9			SI002	土器類	甕	No.91	—	—	—	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
10			SI003	土器類	丸底碗	No.26.115	10.0	—	—	3.1	浅黄緑 10YR8/3	灰白 10YR8/2
11	62	3 · 11	SI003	土器類	丸底碗	No.25.26	9.8	—	—	4.1	にぶい黄緑 10YR7/2	にぶい黄緑 10YR7/4
12			SI003	土器類	平底碗	No.48	9.6	3.6	—	6.2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2
13			SI003	土器類	丸底碗	No.30	12.8	—	—	6.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
14			SI003	土器類	脚付鉢	No.10	(13.4)	8.4	—	6.1	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4
15			SI003	土器類	高杯	No.99	(13.4)	(10.0)	—	8.7	にぶい黄緑 10YR7/2	にぶい黄緑 10YR7/2
16			SI003	土器類	高杯	No.97.113	11.2	—	—	9.8	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6
17			SI003	土器類	鉢	No.123	16.0	—	14.7	13.1	浅黄緑 10YR8/3	—
18			SI003	土器類	甕	No.31	16.6	—	20.0	20.0	橙 5YR6/8	橙 7.5YR6/6
19			SI003	土器類	甕	—	—	12.6	—	28.8	灰白 10YR8/2	にぶい黄緑 10YR7/3
20			SI003	土器類	甕	No.13	(17.6)	—	—	11.2	明赤褐 5YR5/6	にぶい橙 7.5YR5/4
21	64	3 · 11	SI003	土器類	甕	No.20.21	18.0	—	—	15.2	浅黄緑 10YR8/3	浅黄緑 10YR8/3
22			SI005	土器類	甕	No.8.42.44.50	17.3	—	18.8	15.7	灰白 2.5Y7/2	灰白 2.5Y7/1
23			SI005	土器類	柵	No.18.24.30	15.6	—	22.5	29.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3
24			SI005	土器類	甕	No.13.26.27.28.30.66	31.0	—	32.5	31.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3
25			SI005	土器類	甕	No.26.28	(29.2)	—	—	(14.0)	にぶい黄緑 10YR7/3	灰白 7.5YR8/1
26			SI005	土器類	甕	No.13.24.25.26.29 66.71	(33.0)	—	37.5	36.9	灰白 10YR8/2	浅黄緑 10YR8/3
27			SI005	土器類	甕	No.37	(47.0)	—	—	45.0	浅黄緑 10YR8/3	浅黄緑 10YR8/4
28			SK010	土器類	丸底鉢	No.20	(17.9)	—	(19.0)	8.3	浅黄緑 10YR8/3	浅黄緑 10YR8/4
29			SK039	土器類	甕	—	6.4	2.5	—	6.1	にぶい黄緑 10YR6/3	にぶい黄緑 10YR7/4
30			SK042	土器類	柵	—	33.4	—	—	25.7	橙 2.5YR6/8	明褐 7.5YR5/6

2区 流動鋏形表

遺物番号	F.g. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量(cm)				色調	
							口径	底径	最大 側径	残存高	外面	内面
33	69	15	SI014	土器類	高杯	No.258	—	5.8	—	5.0	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
34			SI014	弥生式土器	小型柵	No.186.187.188. —一括	(12.2)	—	—	9.6	浅黄 2.5YR7/3	にぶい黄緑 10YR7/3
35			SI014	弥生式土器	柵	No.3.一括	9.7	—	(19.0)	20.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄緑 10YR7/3
36			SI014	弥生式土器	(口縁部)	No.11.146.219.	(16.8)	—	—	17.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
37			SI014	弥生式土器	甕	No.15.156.158. 159.—一括	14.4	—	16.5	19.6	灰褐 7.5YR4/2	にぶい橙 7.5YR5/4
38			SI014	弥生式土器	甕	No.15.95.115.—一括	18.0	—	(21.1)	14.7	にぶい橙 10YR7/4	にぶい橙 10YR7/4
39			SI014	弥生式土器	甕	No.170.175.185.237	19.3	9.7	18.7	28.7	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい黄緑 10YR6/4
40			SI014	弥生式土器	甕	No.10.87.100.103.104. 105.—一括	(17.1)	10.9	19.9	31.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
41	71	15	SI014	弥生式土器	甕	No.133.139.141.151. 155.225.229.—一括	23.8	—	26.1	26.7	にぶい黄緑 10YR6/4	にぶい橙 10YR7/4

Tab.4 稲佐津留遺跡遺物觀察表-①

胎土	調査				備考	遺物 番号
	外表面	内表面	外底面	内底面		
輝石、角閃石 赤色酸化粒	(外部) ナデ (脚部) ナデ	(外部) ナデ (脚部) ナデ	—	—	穿孔4ヶ所あり。	1
石英、長石、雲母 赤色酸化粒	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	内外面の黒い部分はススを付着して居たようになっている。穿孔3穴×4ヶ所、内約1/2存在。	2
長石、雲母、砂粒 赤色酸化粒	ナデ、ナデ後ハラ削り	ナデ、ナデ後ハケ目	ナデ	—	外面のヘラ削型はかなり磨耗していて一部しか残っていない。	3
石英、長石、輝石 赤色酸化粒	ヘラ調整 タキナキ後ハケ目	ナデ、ハケ目 ヘラ削り後ナデ	ナデ	—	外面の縁部はヘラ削りがはっきり残っている。頭部はハケ削りが磨耗してあまり見えない。一部スス付着。	4
石英、長石、雲母 赤色酸化粒	ナデ、ヘラ削り 平行タキナキ後ハラ調整	ヘラ削り、ナデ	ヘラ削り	—	—	5
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、タキナキナデ	ヘラ削り、横ナデ	—	—	外面の口縁と頭部の接合附近に成形時の指圧痕が残る。無部位にスス付着。	6
石英、長石、角閃石 工具によるタキナキ後ナデ	ナデ、ヘラナデ	ヘラ削り、ナデ	横ナデ	—	外面底部中央部近辺にスス付着。	7
長石、輝石、角閃石 ナデ、指頭圧痕 ナデ、ハラ削りナデ	横ナデ、指頭圧痕 ナデ、ハラ削りナデ	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	—	頭部にスス付着。頭部と底部の接合部分に指頭圧痕が多く残る。	8
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	ナデ、指頭圧痕	—	—	—	長さ11.1cm。輪部分は成形後横方向になでてある。所々に圧痕が残る。輪部下部-受部下部にかけて磨耗9ヶ所付着。	9
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	ナデ、指頭圧痕	—	—	—	—	10
長石、角閃石 ナデ	ナデ	ナデ、指頭圧痕	—	—	外面中心部に沈線あり。歪みが大きいくらい。内面中心にスス付着。灯明皿か?	11
石英、長石、角閃石 ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	—	内外面とも一部にスス付着。	12
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	ナデ	—	外面約1/3は黒斑がみられる。	13
長石、角閃石 ナデ	ハケ目	ハケ目、ナデ後ミガキ	—	—	内面にスス付着。外面の一部にもわずかにスス付着。	14
石英、長石、雲母 ナデ後ナデ	ハケ目後ナデ	ナデ	ナデ	—	—	15
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	(外部) ハラ削り後ナデ、横ナデ (脚部) ヘラ削り後ナデ、横ナデ	(外部) ナデ (脚部) ヘラ削り後ナデ、横ナデ	—	—	穿孔4ヶ所あり。うち1ヶ所欠損。	16
石英、長石、砂粒 赤色酸化粒	ナデ	ナデ	—	—	—	17
長石、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目後ナデ	ナデ	—	—	外面底部に底部のほんとにスス付着。粘土繊維痕が残る。	18
石英、長石、角閃石 ナデ	ナデ、ナデ後ハケ目	ナデ、ヘラ削り	—	—	内面底部に何かの手で押したような小さな丸い痕が残る。	19
石英、長石、角閃石 輝石、赤色酸化粒	ナデ、ハケ目	刺突状調整 ナデ、ハケ目	ナデ、指頭圧痕	—	外面一部にスス付着。把手2つあり。	20
長石、角閃石、雲母 赤色酸化粒	タキナキ後ナデ、横ナデ	横ナデ、工具ナデ 指頭圧痕	—	—	右側1/2程度にスス付着。	21
石英、長石、雲母 角閃石	ナデ、ナデ後ハケ目	ナデ、ヘラ削り	—	—	—	22
石英、長石、輝石 ナデ	ナデ、ナデ後ハケ目	ナデ、ハケ目	—	—	内外面とも頭部下部に黒斑あり。	23
長石、角閃石、輝石 ナデ	横ナデ、ハケ目	横ナデ、工具ナデ上げ	—	—	外面一部にスス付着。	24
石英、長石、雲母 角閃石	ナデ、ハケ目	ナデ、指ナデ	—	—	外面一部にスス付着。	25
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	ナデ、ハラ削り後ナデ	ナデ	—	—	外面にV字形の溝、小穴1ヶ所あり。	26
長石、角閃石 赤色酸化粒	ハケ目後ナデ、ナデ	ハケ目後ナデ、ナデ 工具ナデ	—	—	内面に階段状のヘラナカ痕が残る部分あり。把手部分は指ナデ、指頭圧痕。	27
石英、長石、角閃石 ナデ	横ナデ、ナデ ハケ目後ナデ	ナデ、ハケ目後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	30
長石、角閃石 赤色酸化粒	ナデ	ナデ	ナデ	—	手捏ね。	31
長石	横ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	—	32
胎土	調査				備考	遺物 番号
	外表面	内表面	外底面	内底面		
石英、長石、角閃石、 赤色酸化粒	工具ナデ後ナデ、横ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	手捏ね。穿孔3ヶ所あり。頭部のみ。	33
石英、長石、角閃石、 工具によるナデ	ナデ、ハケ目後ナデ、 工具によるナデ	ハケ目後ナデ、ナデ、 指頭圧痕	—	—	—	34
長石、角閃石、 赤色酸化粒	タキナキ後ハケ目、横ナデ	ハケ目後ナデ、ナデ 指頭圧痕	—	—	—	35
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ナデ	ナデ、指頭圧痕	—	—	外面に櫛描文、櫛縞波状文を施す。外面に黒斑あり。	36
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	ハケ目後横ナデ、 横ナデ、横ナデ	ハケ目後工具によるナデ ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	37
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目後工具ナデ	ハケ目後横ナデ、ハケ目	—	—	歪み大、口縁一部にかけて黒斑および市章がみられる。全体にスス付着。	38
石英、長石、角閃石 金雲母 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目後工具ナデ ハケ目後工具ナデ	ハケ目後横ナデ、 ハケ目後工具ナデ	ナデ	—	外面に黒斑あり。	39
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目後工具ナデ タキナキ後ハケ目	横ナデ、ハケ目後ナデ タキナキ後ナデ	ハケ目後ナデ	—	外面に黒斑あり。	40
石英、長石、角閃石 赤色酸化粒	横ナデ、ハケ目後工具ナデ タキナキ後ハケ目	ハケ目後ナデ、 タキナキ後ナデ	—	—	口縁に刻み目を施す。外面に黒斑あり。	41

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 幅径	残存高	外側	内面
42		15	SI014	弥生式土器	脚台付甕	No. 15,148,149,150, 207,255. -括	22.9	—	—	39.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
43			SI015	土器類	小型鉢	No. 77	8.0	—	—	5.0	浅黄 2.5Y7/3 黒 2.5Y2/1	
44			SI015	弥生式土器	小型 丸底盆	No. 23. -括	10.8	—	13.9	8.4	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄褐 10YR5/3
45			SI015	弥生式土器	丸底盆	No. 18,40. -括	18.8	—	19.3	9.7	にぶい黄褐 10YR7/3	にぶい黄褐 10YR7/4
46	72	17	SI015	弥生式土器	高杯 (脚あり)	No. 14	20.2	—	—	11.4	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 10YR7/3
47			SI015	弥生式土器	甕	No. 29.33	(14.9)	10.6	18.2	33.8	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 10YR7/4
48			SI015	弥生式土器	丸底甕	No. 11,12	(28.6)	—	(27.2)	26.2	にぶい橙 7.5YR5/3	にぶい黄褐 7.5YR5/3
49			SI015	弥生式土器	大型鉢	No. 7.8,9	(34.2)	—	(33.2)	16.1	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR6/4
52	74		SI016	土器類	小型 丸底鉢	No. 22	8.8	3.8	—	6.0	にぶい橙 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR4/2
54			SI018	土器類	鉢	No. 10	7.1	3.0	—	6.3	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR6/4
55	5 · 18		SI018	土器類	皿	No. 31	10.7	—	—	3.6	浅黄褐 7.5YR6/3	にぶい黄褐 7.5YR6/3
56			SI018	土器類	鉢	No. 30	11.0	—	—	6.6	にぶい橙 7.5YR6/4	黒 7.5YR2/1
57			SI018	土器類	高杯	No. 22.58	12.0	10.0	—	10.4	橙 5YR6/6	黒褐 7.5YR3/1
58			SI018	土器類	器台	No. 23.59	12.2	11.0	—	11.4	にぶい橙 10YR7/3	浅黄 2.5Y7/3
59			SI018	土器類	丸底盆	No. 63,64,68. -括	(14.3)	—	(17.4)	13.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄褐 7.5YR7/4
60	5 · 18 · 19		SI018	土器類	壺	No. 17	12.6	3.7	19.0	20.4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6
61			SI018	弥生式土器	壺	No. 12,13. -括	17.8	—	26.7	20.5	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR6/6
62	5 · 18 · 19		SI018	土器類	壺	No. 7	17.1	—	—	6.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄褐 10YR7/3
63			SI018	土器類	壺	No. 13,24,54. -括	—	4.0	(24.0)	21.1	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6
64	5 · 18 · 19		SI018	土器類	大型鉢	No. 2	(38.6)	(5.8)	38	30.7	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6
65			SI019	土器類	杯	No. 43. -括	12.3	—	—	2.7	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR4/3
66	79		SI020	土器類	小型 丸底鉢	No. 2	10.3	—	—	4.7	にぶい黄褐 10YR7/3 明黄褐 2.5YR5/6	にぶい黄褐 10YR6/4
67			SI020	弥生式土器	大型 丸底鉢	No. 31	11.0	2.9	—	8.0	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6
68	80	20	SK046	須恵器	杯	—括	(14.0)	7.2	—	4.0	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1
69			SK046	須恵器	杯	—括	12.6	5.8	—	3.8	灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2
70			SK046	須恵器	杯	No. 56. -括	(14.0)	8.0	—	2.4	灰 5Y6/1	灰白 10YR7/1
71			SK046	須恵器	壺	No. 77. -括	(13.4)	7.9	—	4.0	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1
72			SK046	須恵器	高台付甕	No. 69.71	19.7	10.4	—	5.1	灰 NS/	灰 NS/
73	81		SK048	土器類	壺	No. 4,5,6,10. -括	15.6	—	—	16.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄褐 10YR6/4
74	82	27	G - 9	土器類	製造 土器	—括	—	—	—	5.3	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR6/4

3区遺物觀察表

遺物 番号	Fig. No.	Pl. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 幅径	残存高	外側	内面
75			SI030	弥生式土器	甕	—括	(19.2)	—	(21.8)	31.0	にぶい黄褐 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR7/4
76	83		SI030	弥生式土器	壺 (口縁)	No. 37	16.4	—	—	6.3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
77			SI031	土器類	高杯	—括	21.7	(12.4)	—	16.1	赤褐 5YR5/6	黒 2.5YR2/1
78	21		SI031	土器類	小型壺	No. 25	12.4	—	12.3	11.2	灰白 2.5Y6/2	灰白 2.5Y6/2
79			SI031	土器類	壺	No. 26,27,28,30,31 5#-—括	26.6	—	35.0	40.5	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR7/4
80	B4	20	SI032	弥生式土器	高杯	No. 2,3,4. —括	17.8	12.0	—	12.2	にぶい黄褐 10YR7/3	にぶい黄褐 10YR7/2
82			SI032	弥生式土器	壺 (口縁)	No. 9	(45.2)	—	—	19.0	にぶい黄褐 10YR7/3	にぶい黄褐 10YR7/3
83	B5	22	SI034	土器類	皿	No. 55	11.2	—	—	3.1	にぶい黄褐 10YR7/3 橙 SYR6/6	にぶい黄褐 10YR7/3 橙 SYR6/6

Tab.5 稲佐津留遺跡遺物観察表-②

胎土	調査				備考	番号
	外表面	内表面	外面面	内底面		
角閃石、赤色顔化粒	ハケ目、ハケ目後横ナデ タクナデハケ目、横ナデ	ハケ目後横ナデ、ハケ目	—	—		42
石英、角閃石	横ナデ、ハケ目 ハナデ、横ナデ	横ナデ、ナデ、工具痕	—	—	内外面とも地色黒斑。	43
石英、長石、角閃石	ナデ、横ナデ ハケ目後ナデ	横ナデ、ナデ	—	—		44
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目、ハケ目後ナデ (杯部) ナデ (脚部) ハケ目	ミガキ後ナデ、ミガキ (杯部) ナデ、工具痕 (脚部) ハケ目	—	—	内外面に黒斑あり。	45
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	タクナデ、タクナデ タクナデハケ目、ハケ目	ハケ目後横ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	—	外面に黒斑あり。	46
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、タクナデ ハナデ後ナデ	ハケ目	—	—	内外面に黒斑あり。	47
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目後横ナデ ナデ	ハケ目後横ナデ、ハケ目	—	—	外面に黒斑あり。	48
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目後横ナデ ナデ	ハケ目後横ナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	—	—	外面に刻文を施す。内外面に黒斑あり。	49
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ナデ、工具痕	横ナデ、工具痕、ミガキ ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	50
石英、長石、角閃石	ナデ、指顔痕痕	ナデ、工具痕	ナデ	—	手捏ね。内外面に黒斑あり。	54
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ナデ、ヘラ削り後ナデ 南頭痕痕	ナデ、指顔痕痕	—	—	外面に赤色顔料塗付。口縁 1/2 ほど黒斑。	55
角閃石、石英、雲母	横ナデ、ナデ、ヘラ削り	ハケ目後横ナデ、工具ナデ	—	—	口縁部は黒色。外面に赤色顔料塗付か?	56
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	(杯部) 横ナデ、ミガキ (脚部) 横ナデ、ミガキ	(杯部) 横ナデ、ミガキ (脚部) ナデ、ナデ 工具痕	—	—	内、外面に黒斑あり。脚部に穿孔 4 ヶ所あり。脚部 外面に黒色顔料直塗跡。	57
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	(杯部) 横ナデ、ミガキ (脚部) 横ナデ、工具痕 ミガキ後横ナデ	横ナデ、ナデ、工具痕	—	—	内外面に黒斑あり。杯部に穿孔 4 ヶ所あり。杯部外面、 脚部外面に黒色顔料直塗跡。	58
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目後横ナデ ハケ目後ナデ	ハケ目後横ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。	59
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ミガキ 削り後ナデ	横ナデ、ミガキ、ナデ	ナデ	—	外面に黒斑あり。	60
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、タクナデ	ハケ目 (直疊)	—	—		61
石英、長石、角閃石	横ナデ後ミガキ、ミガキ	横ナデ、ナデ後ミガキ	—	—	口縁部は黒付部より剥離している。	62
石英、長石、角閃石	ナデ、ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	—	—	口縁部は黒付部より剥離している。	63
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、南頭痕痕 ハナデ後ナデ、ナデ	ハケ目後ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。	64
長石、角閃石、0.5 ~1 cm の砂粒多量	ハナデ後ナデ	指顔痕痕	横ナデ、ミガキ	—	外面に黒斑あり。	65
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目 ハケ目後横ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	66
長石、角閃石、雲母 輝石	横ナデ、ハケ目後ナデ 工具ナデ	ハケ目後横ナデ 工具ナデ後ナデ	工具ナデ	—	外面に黒斑あり。	67
角閃石	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		68
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		69
石英、角閃石表面 白色鉱物	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	ナデ		70
長石、角閃石 0.5~1 mm の砂粒	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ	外底面にヘラ記号あり。	71
長石、角閃石 2~8 mm の砂粒 小片を多く含む	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		72
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目後工具ナデ タクナデハケ目	ハケ目後横ナデ 削り後工具ナデ	—	—	口縁に黒斑あり。全体にスス付着。	73
石英、角閃石 赤色顔化粒	指顔痕痕、工具痕	ナデ	—	—	傾き不確実	74
胎土	調査				備考	番号
	外表面	内表面	外面面	内底面		
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	横ナデ、タクナデ後横ナデ タクナデハケ目、ハケ目 ハナデ後ナデ	ハケ目後横ナデ、ハケ目 ハナデ後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	75
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目 ハナデ後横ナデ	ハケ目後ナデ、ナデ	—	—	外面中央に刻み目を施す。	76
石英、長石、角閃石 雲母	(杯部) 横ナデ、ミガキ (脚部) ハケ目後ミガキ ミガキ、横ナデ	(杯部) 工具ナデ、削り ハケ目後ナデ	(杯部) ナデ (脚部) —	—	外面全体に薄く黒塗りが残る。	77
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目後横ナデ ハケ目後ナデ、ハケ目	ハケ目後横ナデ、削り	—	—	内外面共にスス付着。	78
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目後横ナデ ハケ目後ナデ、ハケ目	ハケ目後横ナデ、削り ハケ目後ナデ	—	—	外面にスス付着。	79
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	(杯部) ハケ目後横ナデ ハケ目、ハケ目後ナデ (脚部) 横ナデ、ハケ目	(杯部) ナデ、横ナデ (脚部) ナデ、ハケ目、工具 痕	—	—	口縁部に墨跡付。脚部に剖み日安を施す。 外面に赤色顔料塗付。外面に黒斑あり。	80
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目	ハケ目後横ナデ、ナデ	—	—		82
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ナデ、工具痕	横ナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。	83

遺物 番号	Fig. No	PL. No	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 幅径	残存高	外観	内面
84		22	SI034	土器器	Ⅲ	No. 53	12.1	—	—	3.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
85			SI034	土器器	脚付鉢	一括	7.6	(6.6)	—	8.4	橙 5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6
86	85		SI034	土器器	高杯 (杯部)	No. 49	20.8	—	—	6.5	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6
			SI034	土器器	高杯	No. 75.76.80.82.85	21.4	12.6	—	15.9	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6
88	22		SI034	土器器	脚付鉢	No. 36	17.0	—	—	10.2	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
			SI034	土器器	小口 丸底盤	No. 25.30	—	—	14.6	12.4	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3
89			SI034	土器器	壺	No. 2.76.82.86.89 —括	(14.1)	—	—	17.4	橙 5YR6/6 橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4 橙 2.5YR6/8
			SI034	土器器	壺	No. 2.76.一括	(17.9)	—	—	17.7	橙 7.5YR7/6	明赤褐 2.5YR5/6
90			SI034	土器器	壺	No. 28.30.33.43.45 —括	17.0	—	25.4	20.4	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3
			SI034	弥生式土器	壺	—括	(21.0)	—	—	26.3	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2
94			SI034	弥生式土器	鉢	No. 58.一括	20.6	—	—	14.5	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4
95			SI036	土器器	壺	—括	(15.5)	—	—	21.6	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR6/3
96			SI044	弥生式土器	壺	—括	15.6	—	(20.2)	21.5	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3
			SI044	弥生式土器	脚付鉢	—括	15.4	—	—	8.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
97	87		SI045	土器器	高杯	—括	(11.0)	(11.4)	—	7.7	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
			SI049	土器器	脚付鉢	—括	(9.2)	(6.4)	—	6.6	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4
103			SK067	弥生式土器	丸底盤	No. 6.7.8.10.一括	(15.1)	(6.4)	(15.6)	8.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
105	89	20	SK077	須彌器	円面模	—	16.5	15.8	—	2.3	暗灰黄色 2.5Y5/2	暗灰黄色 2.5Y5/2
106		23	SK002	弥生式土器	鉢	No. 105.121.一括	17.6	—	—	6.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3
107			SK002	弥生式土器	高杯 (杯部)	No. 89.104.115.118.411	27.6	—	—	8.5	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4
108	90		SK002	弥生式土器	高杯	No. 82.84.91.一括	(35.0)	—	—	16.5	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4
			SK002	弥生式土器	高杯	No. 904.905.906.908	(23.8)	—	20.1	22.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4
110	23		SK002	弥生式土器	壺	No. 905.908.952	15.4	10.4	15.7	23.9	にぶい黄橙 10YR7/2 橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3
			SK002	弥生式土器	壺	No. 210.647.879	(16.8)	—	20.0	13.5	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6
112			SK002	弥生式土器	壺	No. 93.117.120.122 413.426.736	16.8	13.0	18.6	30.9	にぶい黄橙 10YR6/3	明黄褐 10YR7/6
			SK002	弥生式土器	壺	No. 1089.110.1122 1185.—括	(20.4)	—	(25.2)	35.6	灰黄褐 10YR5/2	明黄褐 10YR6/6
114	91		SK002	弥生式土器	壺	No. 967	12.1	—	(26.4)	31.6	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6
			SK002	弥生式土器	壺	No. 310.907.908.949 956.966.980.1037 1042.1058.1079	25.0	—	29.7	47.5	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
115	23		SK002	弥生式土器	壺	No. 849.850	24.1	—	—	16.6	澄 5YR6/6	橙 5YR6/6
			SK002	弥生式土器	壺	No. 54.1.15.464.—括	(25.2)	—	(37.7)	29.1	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄 2.5Y7/2
118	92		SK002	弥生式土器	壺	No. 299.292.310 836.867	25.6	—	(39.9)	44.2	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2

5区遺物観察表

遺物 番号	Fig. No	PL. No	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 幅径	残存高	外観	内面
119	94		SB003	土器器	Ⅲ	—	9.9	6.9	—	2.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3
120			SI052	土器器	鉢	No. 4	11.1	—	—	6.1	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4
			SI052	土器器	鉢	No. 26	12.6	—	—	6.6	灰白 2.5Y8/2	浅黄橙 10YR8/3
122	24		SI052	土器器	鉢	No. 5.7	15.6	—	—	5.9	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2
			SI052	土器器	小型鉢	No. 29	(7.6)	—	(8.9)	7.6	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3
124	93		SI053	土器器	鉢	No. 40	11.0	7.0	—	4.9	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2
			SI054	土器器	鉢	No. 34.36.—括	15.5	—	—	8.3	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2
126	24		SI055	土器器	高杯	No. 7	(12.3)	(16.2)	—	9.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4

Tab.6 稲佐津留遺跡遺物観察表—③

胎土	調整				備考	遺物 番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	—	—		84
石英、長石、角閃石 雲母	ハケ目後ミガキ、ミガキ	ミガキ後ナデ	ナデ	—	内外面に黒斑あり。	85
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	横ナデ、ミガキ	ミガキ	—	—	外面に黒斑あり。	86
石英、長石、角閃石 雲母	(杯部) ハケ目 (直純) (脚部) 机ナデ、ハケ目	(杯部) ハケ目後ナデ ハケ目、ナデ (脚部) ハケ目、削り	—	—	外面に黒斑あり。脚部に穿孔4ヶ所あり。	87
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ナデ ハク目後ミガキ	横ナデ、ナデ	横ナデ	—		88
石英、長石、角閃石 雲母	ハケ目後ミガキ、ミガキ	ハケ目後ミガキ、ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	89
石英、長石、雲母	横ナデ、ハケ目 ハク目後ミガキ	俄ナデ、ハケ目後ナデ ハク目後ミガキ	—	—		90
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目 ハク目後ミガキ	横ナデ、削り後ナデ 指頭圧痕、ミガキ	—	—		91
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ、指頭圧痕 削り後ナデ	—	—		92
石英、長石、赤色顔化粒	横ナデ、直純 ハケ目後ミガキ、ナデ	ハケ目後ナデ 工具ナデ後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。外面にスス付着。	93
石英、長石、工具ナデ	工具ナデ後ナデ	ハケ目後ナデ 工具ナデ後ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。	94
石英、長石、角閃石	横ナデ、ハク目 ハク目後ミガキ	横ナデ、へら削り	—	—	内外面にスス付着。	95
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後横ナデ、ハケ目	ハケ目後横ナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	96
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後横ナデ ハク目後ミガキ	ハケ目後横ナデ ハク目後ミガキ (工具底)	—	—	外面に黒斑あり。脚部剥離底。	97
石英、長石、雲母	(杯部) 横ナデ、削り (脚部) 机ナデミガキ、ナデ	横ナデ、削り後ナデ	ハケ目後ナデ、ナデ	—	穿孔は3ヶ所残存するが、4方向と思われる。	99
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデミガキ、ナデ ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕 工具底	ナデ、工具痕	—	手捏ね。	103
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ナデ、ハク目	ハケ目後横ナデ	ナデ	—		104
陶器	ハケ目後ナデ、横ナデ ハク目後ミガキ	—	—	—		105
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	ナデ	—	外面に黒斑あり。	106
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後ナデ、横ナデ	横ナデ、ハケ目後ナデ ハク目後ミガキ	—	—	外面に黒斑あり。内面に赤色顔料塗付。	107
石英、長石、角閃石 雲母	(杯部) ハケ目後ナデ (脚部) 机ナデ、ハケ目後ナデ	(杯部) ナデ (脚部) ナデ、工具ナデ	—	—	外面口縁に黒斑あり。内外面に朱染り痕あり。	108
石英、長石、角閃石	横ナデ、ハケ目、ナデ	横ナデ、ナデ	ナデ、指頭圧痕	—	内外面に黒斑あり。	109
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目 (直純)、ナデ	ハケ目後ナデ、横ナデ	ナデ	—	外面に黒斑あり。	110
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後横ナデ、横ナデ ナデ、ハク目後ミガキ	ハケ目後ナデ、ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	111
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目後横ナデ タクタク後ナデ、削り、ナデ	ハケ目後横ナデ ハク目後ミガキ	ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	内外面に黒斑あり。内外面とも朱染り痕あり。	112
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、タクタク、ハケ目 タクタク後ナデ	横ナデ、ナデ、ハク目	—	—	内外面に黒斑あり。	113
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後ナデ、横ナデ ナデ (直純)	横ナデ、ハケ目後ナデ、ナ デ	ナデ	—	外面に黒斑あり。	114
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後ナデ、横ナデ、ナデ	横ナデ、ハケ目後ナデ、ナ デ	ナデ	—	外面に黒斑、赤色あり。外面にスス付着。	115
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	ハケ目、横ナデ	横ナデ、ナデ、工具ナデ ハク目	—	—	脚部に刻文を施す。外口縁に黒斑あり。	116
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	—	—	口界面に刻み目、頸部に刻み目安帶を施す。内外面に黒斑あり。	117
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、ハケ目後ナデ ハケ目、タクタク後ハケ目	ハケ目、ハケ目後ナデ	—	—	口界面に刻み目、頸部に刻み目安帶を施す。内外面に黒斑あり。	118

胎土	調整				備考	遺物 番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
長石、角閃石、雲母 赤色顔化粒	横ナデ	横ナデ	横ナデ へら切り離し	横ナデ後ナデ	内外面に黒斑あり。	119
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	磨耗	磨耗	—	—		120
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	ナデ (直純)	ナデ (直純)、指頭圧痕	—	—	外面に黒斑あり。	121
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	—	—	外面に黒斑あり。	122
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	底部凹みあり。	123
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ナデ、指頭圧痕	ナデ	ナデ	指頭圧痕	手捏ね。外面に黒斑あり。	124
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目後ナデ ナデ	横ナデ、ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	125
石英、長石、雲母	(杯部) 磨耗 (脚部) ハケ目	(杯部) ハケ目 (脚部) 磨耗	—	—	脚部に穿孔4ヶ所あり。	126

遺物 番号	F.g. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 側径	残存高	外面	内面
127			SI055	土器類	高杯	No. 19.一括	(21.8)	(14.0)	—	13.3	にふい黄橙 10YR6/4	にふい黄橙 10YR6/3
128	93	24	SI055	土器類	盃	No. 29.一括	14.2	—	(21.1)	13.3	淡黄 2.5YR8/3	灰白 10YR8/2 淡黄 2.5YB/3
129			SI055	土器類	鉢	No. 6.10.一括	(12.0)	—	—	8.2	にふい黄橙 10YR6/3	にふい黄橙 10YR6/4
130			SI055	土器類	器台	No. 38	8.5	9.5	—	7.9	にふい黄橙 10YR7/3 橙 2.5YR6/6	にふい黄橙 10YR7/2 橙 2.5YR6/6
132			SI059	須恵器	甌	No. 33	—	3.8	9.4	8.7	灰 7.5YB/1	灰 7.5YB/1 灰 NS/5
134			SI057	土器類	小型鉢	No. 10.38.一括	10.5	—	—	5.0	灰白 10YR7/1	にふい黄橙 10YR7/2
135			SK087	土器類	甌	No. 7	(15.0)	—	15.7	18.4	橙 SYR7/6	橙 SYR7/6
136		96	SK088	土器類	高杯	一括	(11.7)	(8.5)	—	6.5	淡黄橙 10YR8/3	淡黄橙 10YR8/4
137		25	SK088	弥生式土器	小型鉢	No. 20	(12.0)	—	—	7.1	にふい橙 5YR6/4	橙 SYR6/6
138			SK088	土器類	甌	No. 45.47	16.4	—	20.5	23.3	にふい黄橙 10YR7/3	淡黄橙 10YR8/3

6区遺物鋏形表

遺物 番号	F.g. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 側径	残存高	外面	内面
139	97		SI066	土器類	高杯	No. 22	(35.0)	—	—	6.1	灰白 2.5YB/2	灰白 2.5YB/2

7区遺物鋏形表

遺物 番号	F.g. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	注記	法量 (cm)				色調	
							口径	底径	最大 側径	残存高	外面	内面
140			SX004	土器類	鉢	No. 3	6.2	—	—	4.2	にふい褐 7.5YR5/3	にふい褐 7.5YR6/4
141			SX004	土器類	皿	No. 15	11.0	—	—	2.5	明褐色 SYR5.6	にふい褐 7.5YR5/4
142		26	SX004	土器類	高杯	No. 16.一括	—	12.2	—	8.9	にふい黄橙 10YR7/4	にふい黄橙 10YR7/4
143			SX004	土器類	高杯	No. 57	19.4	—	—	8.8	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6
144			SX004	土器類	高杯 (杯盤)	No. 29.31	18.0	—	—	5.6	明赤褐 SYR5/6	橙 7.5YR6/6
145		98	SX004	土器類	小型 丸底鉢	No. 6	(10.8)	—	(9.7)	8.2	にふい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6
146			SX004	土器類	小型 丸底皿	No. 12.24.25.一括	(9.4)	—	11.6	12.3	にふい橙 5YR6/4	にふい橙 5YR6/4
147			SX004	土器類	皿	No. 20.21.29.一括	17.2	—	21.5	19.0	淡黄橙 7.5YR6/4	にふい黄橙 10YR7/4
148		26	SX004	土器類	皿	No. 14.17.一括	18.5	—	—	12.9	にふい橙 5YR6/4	にふい黄橙 10YR6/4
149			SX004	土器類	皿	No. 32.36.44.一括	16.1	—	(18.4)	12.9	にふい赤褐 5YR5/4	にふい褐 7.5YR5/4
150			SX004	土器類	皿	No. 30.36.38.39 43.45.一括	19.6	—	—	27.9	褐 7.5YR4/3	橙 7.5YR6/6

馬込淀留遺跡 鉄器鋏形表

遺物 番号	F.g. No.	PL. No.	調査区	遺構番号	種別	器種	注記	法量			備考		遺物 番号
								全長 (cm)	全幅 (cm)	重量 (g)	備考	備考	
28			1	SK001	手鋸 (刃部一部欠損)	一括	7.3	2.8	12.3	刀部はほぼ完形だが、錆剥げている。		28	
29	68		1	SK001	手鋸	No. 10	6.45	2.0	18.9	上部は、錆剥げが激しい。		29	
81		84	3	SI032	手鋸	No. 16	8.2	2.8	12.5	上部中央に穿孔 1つ有り。上部端は一部欠損している が、ほぼ完形。		81	
100		87	3	SI045	刀子 or 鋸	—	3.5	1.15	2.5			100	
102			3	SI047	鉄製鋸	No. 21	13.6	0.5	10.7	錆剥げが激しいが、ほぼ完形。		102	
133	95		5	SI056	鉄族 (刃部)	—	6.4 以上	2.3	9.1	刃部先端と中央部の一部が欠損。		133	

Tab.7 稲佐津留遺跡遺物観察表-④

地土	調査				備考	遺物 番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	(杯部) ナデ、工具痕 (脚部) ハケ目後ナデ ハケ目、工具痕	(杯部) ナデ (脚部) ハケ目、ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	127
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目後ナデ タキ	横ナデ、ナデ、ヘラ削り	—	—		128
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	ハケ目後ナデ	横ナデ、ナデ (工具痕)	—	—		129
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目 (直判)	直判	—	—	外面に黒斑あり。外面にスス付着。穿孔4ヶ所あり。	130
長石、黒水晶	カキ目、回転ヘラ削り 回転ヘラ削り後横ナデ	—	回転ヘラ削り	—	外面部に柳葉列点文を施す。脚部に穿孔、沈錆あり。	132
石英、長石、角閃石 雲母、赤色顔化粒	ハケ目後横ナデハケ目 (直判)	ハケ目後横ナデ ハケ目後ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。スス付着。	134
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、タキ タキ後横ナデ	横ナデ、ハケ目後ナデ、 ナデ	タキ	指頭圧痕		135
石英、長石	(杯部) ナデ (脚部) ナデ	(杯部) ナデ (脚部) ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。	136
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ、ハケ目後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	137
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	横ナデ、タキ後ナデ、ナデ	横ナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。	138
地土	調査				備考	遺物 番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ナデ、工具痕	ナデ	—	—	外面に朱塗り度あり。	139

地土	調査				備考	遺物 番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
長石、角閃石、雲母 赤色顔化粒	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	—	—	手捏ね。	140
長石、角閃石 赤色顔化粒	ナデ、工具ナデ	ナデ	—	—	内面全体にスス付着。	141
石英、長石、雲母 (脚部)	(杯部) ナデ ナデ、ミガキ (直判)	(杯部) ミガキ (直判) (脚部) 横ナデ、ヘラ削り	—	—	脚部に穿孔4ヶ所あり。	142
石英、長石、雲母 赤色顔化粒	(杯部) 横ナデ、ナデ (脚部) ナデ	(杯部) ハラミガキ (直判) (脚部) ナデ、工具痕	—	—	内外面に黒斑あり。	143
石英、長石、角閃石 赤色顔化粒	ハケ目後ナデ、削り後ナデ	ナデ	—	—		144
石英、長石、角閃石 雲母	横ナデ、削り後ナデ、削り 工具痕	横ナデ、削り後ナデ、削り	—	—		145
石英、長石、角閃石	ナデ、工具痕、削り	ナデ、ハケ目	—	—		146
石英、長石、角閃石	横ナデ、ハケ目 ハケ目後横ナデ	横ナデ、削り、指頭圧痕	—	—	脚部に波状文を施す。	147
石英、長石、雲母	横ナデ、ハケ目 ハケ目後横ナデ	横ナデ、削り後ナデ	—	—	脚部に波状文を施す。	148
石英、長石、雲母 (脚部)	横ナデ、ハケ目 ハケ目後横ナデ	横ナデ、ナデ、削り後ナデ	—	—	内外面に黒斑あり。外面にスス付着。	149
石英、長石、角閃石	横ナデ、ナデ、ハケ目	横ナデ、ハケ目後横ナデ ナデ、指頭圧痕、 削り後ナデ	—	—	外面に黒斑あり。内外面にスス付着。脚部に波状文を施す。	150

稻佐津留遺跡・新製品観察表

遺物 番号	Fig. No	PL. No	調査区	遺構番号	器種	注記	法量			備考	遺物 番号	
							口径(cm)	残存高(cm)	重量(g)			
50	73	2	SIO15	巴形鏡器	—	—	0.9	7.6		50		
51	74	6-28	2	SIO16	鏡	— (9.2)	0.35	23.2	四乳頭絞紋鏡。縫は欠損。	51		
98	87	7-28	3	SIO45	鏡	—	7.8	0.4	43.3	(参考) 平建設行掛文帶内行花紋鏡。 直井しているため裏面の文様は不明部分が多いが、円墳二条、花紋八葉と思われる。	98	

稻佐津留遺跡・新製品観察表

遺物 番号	Fig. No	PL. No	調査区	遺構番号	器種	注記	法量			備考	遺物 番号	
							最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
53	75	27	2	SIO17	石舟丁	3層 No.1	4.4	10.8	0.8	54.9	暗灰 N3/ ホルンフェルス	
101	87	3	SIO45	石舟	—	8.7	4.7	1.8	90.9	灰白 7.5Y7/1	101	
131	93	24-27	5	SIO55	石皿	No.7	12.6	15	6.8	2,090	暗灰 N3/ 砂岩	1/2程度保存。131

(3) 調査の成果

以上、これまでに稻佐津留遺跡発掘調査成果について出土遺構・遺物について、事実報告を記述してきた。当遺跡は、町史編纂段階で弥生時代の遺物散布地として報告されていた遺跡であるが、今回の調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡であることが判明した。

ここでは、出土遺物の特徴について良好な一括資料を中心に遺物の変遷をたどり、稻佐津留遺跡の年代観を示す。

1 弥生時代後期 - 土器 -

この時期の遺物としては、1区竪穴建物 SI001、2区竪穴建物 SI014、SI015から出土した一括資料があげられる。台付甕が時期を示す指標となる遺物で、熊本県北部域で言ういわゆる「野辺田式」と呼称されるものである。台付甕は、当初は内外器面ともハケ目による調整を経ているが、後期中葉以降は叩き技法が持ち込まれ、外器面上半部に叩き目を残す土器が見られることとなる。

このことを踏まえ、当遺跡出土の遺物を見ると、竪穴建物 SI001 出土台付甕には叩きを施すもの(5・7)と、施さないもの(3・4)が混在する。叩きを施すものでも体部中位上半部にのみに見られ、使用範囲は限定的である。竪穴建物 SI014 でも同様に叩き技法が持ち込まれているが、SI001 出土遺物に比べやや下にまで叩きが及ぶ。この段階から体部の主に下半でこれまでみられてきた丸みが失われ、最大胴部付近まで直線的な形状を示す。叩き技法が持ち込まれたことで、体部の形体が変化し始めたものと見られる。

竪穴建物 SI015 出土の台付甕になると体部中位にまで叩きを有し、叩きを施した跡をハケ目調整を施さない



くなる。叩きを最終調整として見せる手法へと変化していることが窺える。また、体部も全体にスリム化し丸みが少なく、最大径部を中心と直線的な形を示している。口縁部も、竪穴建物SI014まではわずかに外反したもの、肥厚するものなど変化があったが、(47)は頸部から口縁端部にかけ同一厚さで直線的となる。

2 青銅製品

(1) 巴形銅器(左振半球形座巴形銅器)(50)

竪穴建物SI015出土。出土資料は胸部半分と脚部2本(いずれも基部付近のみ)が残存している。脚部裏には綾杉文が鋳出され、胸部はドーム状を呈し、内面には紐が残る。脚部は左振り、脚数は6本と推定され、復元径はおよそ6.4cmと考えられる。同形式のものが、大分県大分市雄城台遺跡出土資料に存在する。遺物の年代は、同遺構内で共作する台付壺や台付鉢、壺形土器等から弥生時代後期が想定される。

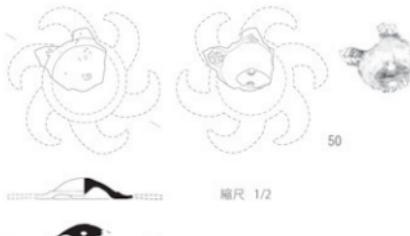
(2) 青銅鏡(四乳細線鳥文鏡)(51)

竪穴建物SI016出土。出土状況は不明。鏡片は鏡縁から内区文様帯まで残存する。外帶から平縁、鋸歯文、櫛歯文と続き内区に至り、乳が1基残存する。内区には細線で文様が鋳出され鳥文が見て取れる。出土した鏡片は破碎された断面では研磨は確認できない。出土鏡片は全体の約1/5と見られ復元径はおよそ9.2cmと推定される。共伴資料が少ないため時期を判断することは難しいが、出土した遺構の埋土の状況から、弥生後期に属する遺構からの出土と考えられる。

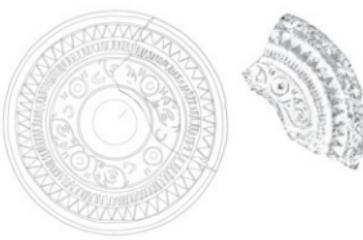
(3) 青銅鏡(仿製内向花文鏡)(98)

竪穴建物SI045出土。出土状況は不明。本体はわずかに縁辺部が欠損するのみで全体形は保っており、鏡面全体がブロンド病により変色し、鏡が浮き始めていることから、一部で文様が観察しづらい部分がある。鏡背面は、鏡辺部から断面が平縁でその内部に櫛歯文を施す。鋸歯文は幅が広く、方向性に統一感がなく一定しない。内部に描かれる花文は8弁からなり、先端部は残さず配置される。中心は比較的低く、平縁部よりわずかに高い状態である。総じて、すべての文様は低く鋳出されており、シャープさが感じられない。

庄内系楕円形器台が共作することから、古墳時代初頭の時期が想定される。



縮尺 1/2



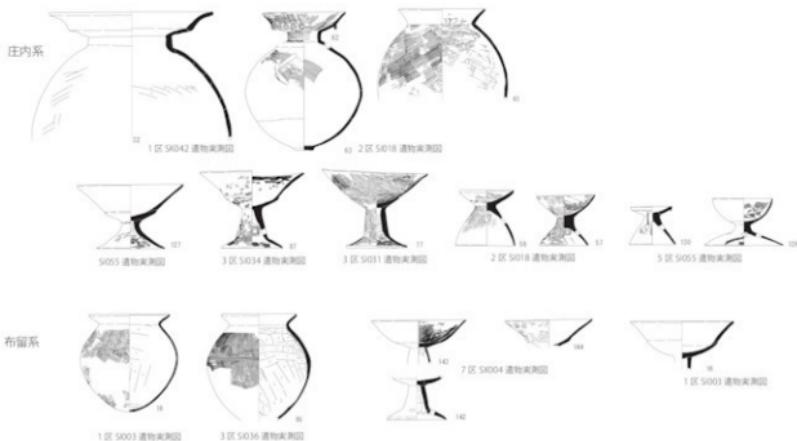
縮尺 1/2



3 古墳時代

古墳時代に入ると畿内系、山陰系の土器が持ち込まれる。この時期を示す最も早い時期の土器は庄内系の複合口縁壺（32・62・63）がある。竪穴建物 SI018 出土遺物中には、外器面には突帯が巡り、円形浮文が環状に加飾し（62）、体部は球体で平底の底部を貼り付ける（63）が出土している。接点はないが、おそらく 62、63 は同一個体である可能性が高い。同時に出土している甕に、外器面に呪き目を残し内器面を削るもの（61）が存在する。また、竪穴建物 SI055 出土遺物中にも庄内系壺調整を有する直行壺が含まれ、同時に楕形器台（58）が出土していることなどを重ねあわせると、庄内式土器形式の範疇として捉えられ、北部九州地方の土師器編年によると、I 期 b から II 期 a に相当する遺物であると考えられる。

時期は大きく異なるものではないが、庄内系の土器も入ってきていている。1 区竪穴建物 SI003、3 区竪穴建物 SI035、7 区不明造構 SX004 等から出土している遺物には布留系甕や、高杯が出土する。



4 古墳時代 - 山陰系土器について -

庄内式土器の範疇に含まれる加飾された複合口縁壺（62・63）や鍾台形器台（58）などと共に「山陰型楕形土製品」、「山陰型楕形土器」と呼称される土器がある。

その用途については、上部が狭い状態での使用を想定し、のちに出現する「煙突状土製品」に起源を求める煙突状の使用を想定する前者と、V 字状に上部に向かい広い部分を口縁上部に置くとした使用法とが提示されている。当遺跡で出土している土器には鉗状の突帯が残るもの（19）と、2ヶ所に貼り付け角度を 90° 変え把手を有するもの（27）の2種が出土している。27 は狭くなる部分の先端が欠損していることから、突帯が巡る可能性もある。いずれも完形ではないのではっきりとした特徴を示すことはできないが、狭くなり先端部に向かう角度や、器壁の厚さなどの特徴に明らかな製作の違いを見ることができる。遺物の図示方向であるが、近年山陰地方の研究者による論考等を参考に上部がすぼまる逆 V 字状として本報告書では取り扱う。また、その用途については、本器種の出自と考えられる山陰地方また中国地方で多く論じられていることから、ここでは触れず資料提示に留めたい。

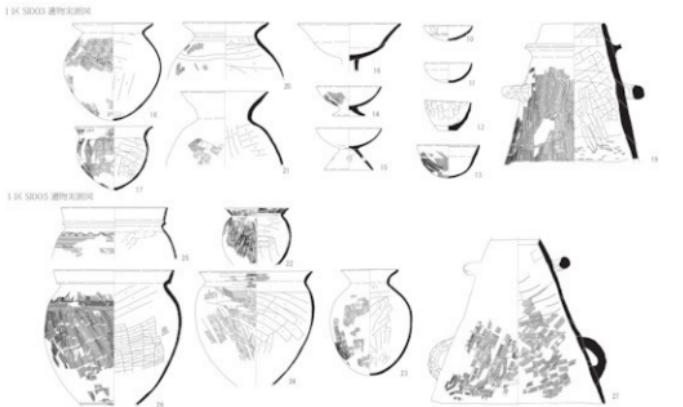
最後に、これら山陰系土器の一群が本遺跡内でどのような相対的な年代を示しているかを明記しておきた

1 望月精司 「加賀町遺跡出土の煙突状土製品に関する考察 - 山陰型楕形土製品と煙突形土製品を繋ぐもの - 」『石川考古学会誌第 50 号』2007 年

2 杉井 健 「山陰型楕形土器と山陰地方」1994 年

い。堅穴建物SI003出土土器では、(19)の煙突状土器が出土しているが、同時に布留系甕(18・20)が共作していることから、古墳時代初頭の時期とみてまず間違いないと考えられる。また、同時に出土している台付鉢(14)は、山陰地方で言う低脚付鉢であり、搬入土器と見られる。

堅穴建物 SI005 では山陰系大型甕（25・26）が庄内系調整を施す土器（22）と共に作ることから、堅穴建物布留系甕を出土する堅穴建物 SI003 と同時期と考えられる。堅穴建物 SI005 では山陰系壺形土器製品とともに、山陰系大型甕が 2 個体出土している（25・26）。うち、26 の個体については、底部に水平に切り込みを入れ、大きく穿孔しており最終的には祭祀用土器の可能性が高い。



5 製塙土器について

当遺跡でも、2区から製塙器が出土している。遺構内出土ではないことから、確たる年代は不明だが、器形の特徴から古墳時代を中心に熊本県内で言う「天草式製塙土器」の極部片と見られる。

椀部は口縁端部から体部下半にいたる部位で、緩やかな弧を描き体部下半で湾曲が強くなる。外器面は底部上位で指ナデによる調整を施し、体部下半付近で手持ちヘラ削りを施す。内器面は指ナデによりキメ細やかにナデられる。

同様の資料が同事業に伴い発掘調査を実施した西へ約1kmの玉名平野条里跡(古闕前地区)²で出土しており、6世紀後半の在拠系須恵器・土師器等と共に出土している。

玉名平野条里跡（古闇前地区）で出土している製塙土器も器形は同じ楕形で、本遺跡出土の土器と調整、胎土等とも酷似する。熊本県内で天草式製塙土器が用いられる時期が、古墳時代を中心に7世紀代初頭までとされることから、当遺跡で多く出土している弥生後期から古墳時代初頭のうち、古墳時代初頭に当地に持ち込まれた可能性が最も高いと考えられる。

菊池川流域では、これまで菊池市泗水町「篠原遺跡」³、熊本市植木町「石川遺跡」⁴など、菊池川沿いの内陸部で数例確認されている。玉名市域では玉名平野各里跡（古伊那郡）に続き2例目の出土例となる。

¹ 藤本貴仁「熊本県域における古墳時代の土器製造について」第56回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の海人集団を再検討する・「海の生産用具」から20年、西脇集会場分冊 2007年9月1日

2 滋賀県教育委員会「玉名平野条里跡(古間前地区)」滋賀県文化財調査報告書 261 頁 2010

3. 潭水町教育委员会「梅原禮賀」潭水町文化財調査報告第3集、1998。

4. 植木町教育委員会「石川清蔵」植木町文化財調査報告第14集 2002

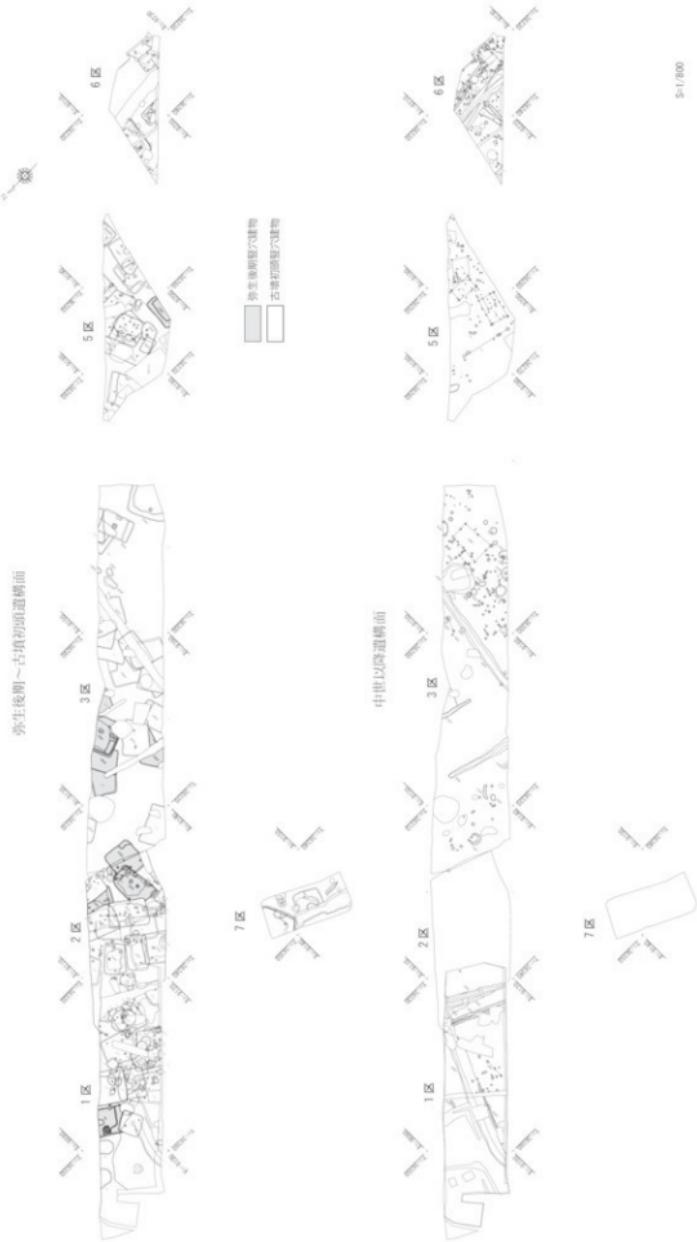


Fig.99 福佑津留跡跡遺構時代分計図



Fig.100 製塩場出土遺跡分布図

2 西安寺遺跡

西安寺遺跡は「新玉名変電所付替道路」建設に伴い予備調査を実施した結果、從来知られていた「西安寺遺跡」の広がりとして新たに範囲変更（拡大）された遺跡である。今回の調査面積は 518m²で平成 19 年 11 月 26 日に着手し平成 19 年 12 月 26 日に終了している。調査担当者は文化課参事坂口圭太郎である。

（1）調査の概要（Fig.101）

西安寺遺跡は從来、今回の工事予定地の背後に東西に延びる丘陵上に位置している弥生後期を主体とする遺跡の広がりとして捉えられてきた。この丘陵は、南側から延びてきている金峰山、半高山の尾根の一部であり、その最末端をなす独立丘陵である。遺跡の下段には「西安寺製鉄遺跡」が小河川に沿い広がっている。

調査区は丘陵緩斜面上に位置し、東西に細長い調査区を呈している。主な遺構は柱穴と溝状の遺構である。柱列は、並ぶものが調査時に想定されていたが、遺構基底部の不均衡や柱穴形状の不安定さ、埋土の違いなどから、整理時に柱列（柵列）とは認定できないとして外した。

溝 SD001（Fig.101）丘陵の等高線に沿い検出された遺構。丘陵の南側斜面であるため、幾世代にも渡り開墾を受け削平された土地であることを証明するように、溝埋土からは中世から近代にかけての遺物が出土している。遺構は、調査区の外に向かい丘陵に斜面にあたり消滅する。このことから、斜面上地の土砂の流失を防ぐ役割を有していたものと考えられる。内部に柱穴が数基見られるが、本遺構に伴う遺構ではない。

土坑 SK001（Fig.101）図上では梢円形を呈するが、当初は方形を意識し掘削されたものと考えられる。長軸両辺とも並行で隅丸方形を呈する。柱穴を 2 基検出しているが、本遺構に伴うものかは確認できない。

（2）まとめ

今回の発掘調査では、明確な時期を決定する遺構等は確認されていない。当初、試掘調査で確認されていた弥生時代の遺物は丘陵上からの落ち込みであると判断し差し支えはない。調査時に検出された溝状遺構を除く柱穴、土坑については、時期を判断する材料がないことから、今回の調査のみでは遺跡の評価は出ない。

しかし、一步踏み込んで、あえて今回の調査の評価をおこなうとすれば、検出された遺構群は、西安寺遺跡の拡張と考えるより、西安寺製鉄遺跡の広がりとして捉えることが適当であったとも考えられる。

製鉄遺跡については、玉東町史のなかで寺中尾遺跡として報告され、「前文略…遺跡の一带は水田化されており、詳しい状況は分からぬが、水路や畔の断面に鉄滓が散布している。」と報告されており、川に近い場所に工房がおかれ、今回の調査区を含む段上に管理建物、もしくはたら炭、砂鉄置き場が置かれていた可能性が高い。柱穴群は、おそらくこれらの施設に伴う掘立柱建物を構成していたことも考えられる。

このことから、今回調査をおこなった地区については、溝状遺構は近世段階の遺構と考えられるが、柱穴群、土坑 SK001 は中世までさかのぼる可能性も否定できない。

¹ 玉東町史 通史編（平成 7 年 1 月 31 日）では、「寺中尾遺跡（西安寺字寺中尾）」として報告されている。



Fig.101 西安寺遺跡遺構配置図及び土層断面図

S=1/200

8. にじ地帯土 (75YR5/3) 剥離した岩片性。マガソを多量に含む。
9. 地帯土 (75YR5/3) 剥離した岩片性。色白。ブローカー底層を少しして3cm大的小石含む。
10. にじ地帯土 (10Y5/5) 剥離した岩片性。白色。2cm-15cm大的小石含む。
11. 地帯土 (75YR4/4) 剥離した岩片性。黄色のコロニヤル風の色でブローカーも含む。
12. 地帯土 (75YR4/4) 剥離した岩片性。白色。1cm-4cm大的小石含む。
13. 地帯土 (75YR5/3) 剥離した岩片性。白色。1cm-4cm大的小石含む。

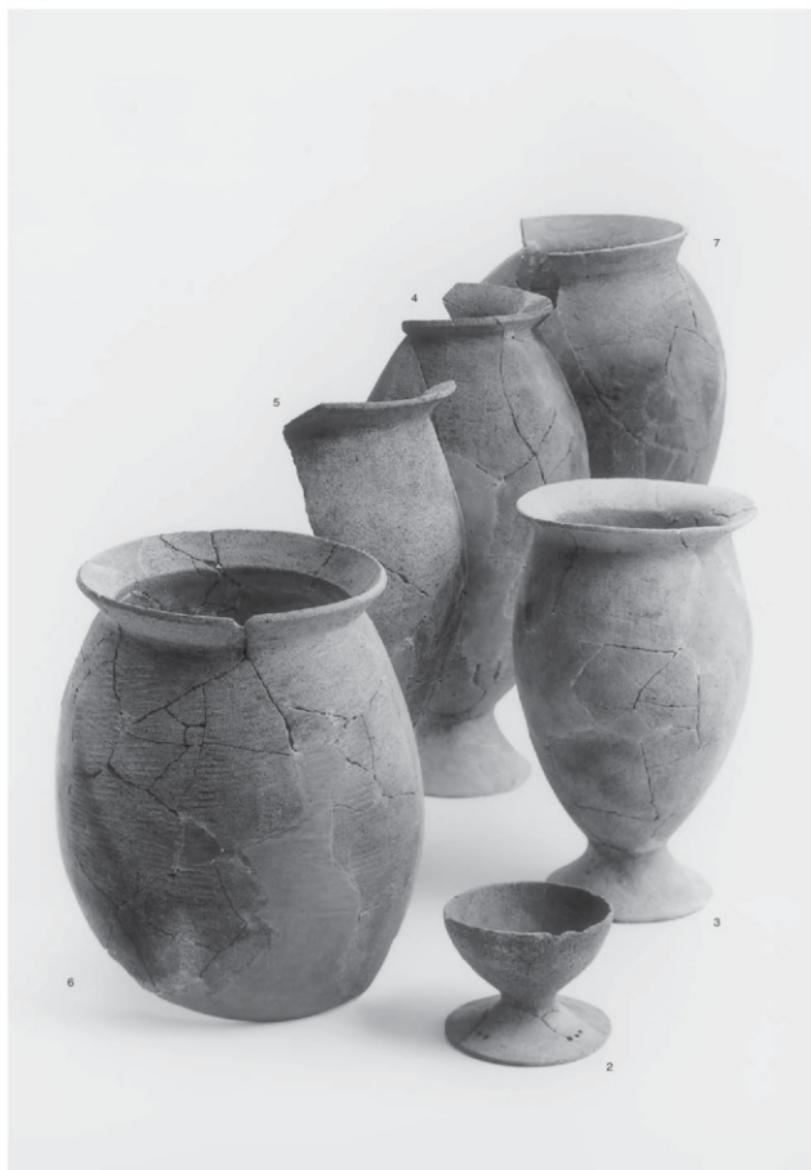
PLATE
写真図版



稻佐津留遺跡 1 区調査区完掘状況



1. 稲佐津留遺跡 2 区調査区完掘状況
2. 稲佐津留遺跡 3 区調査区完掘状況



稻佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI001 出土遺物



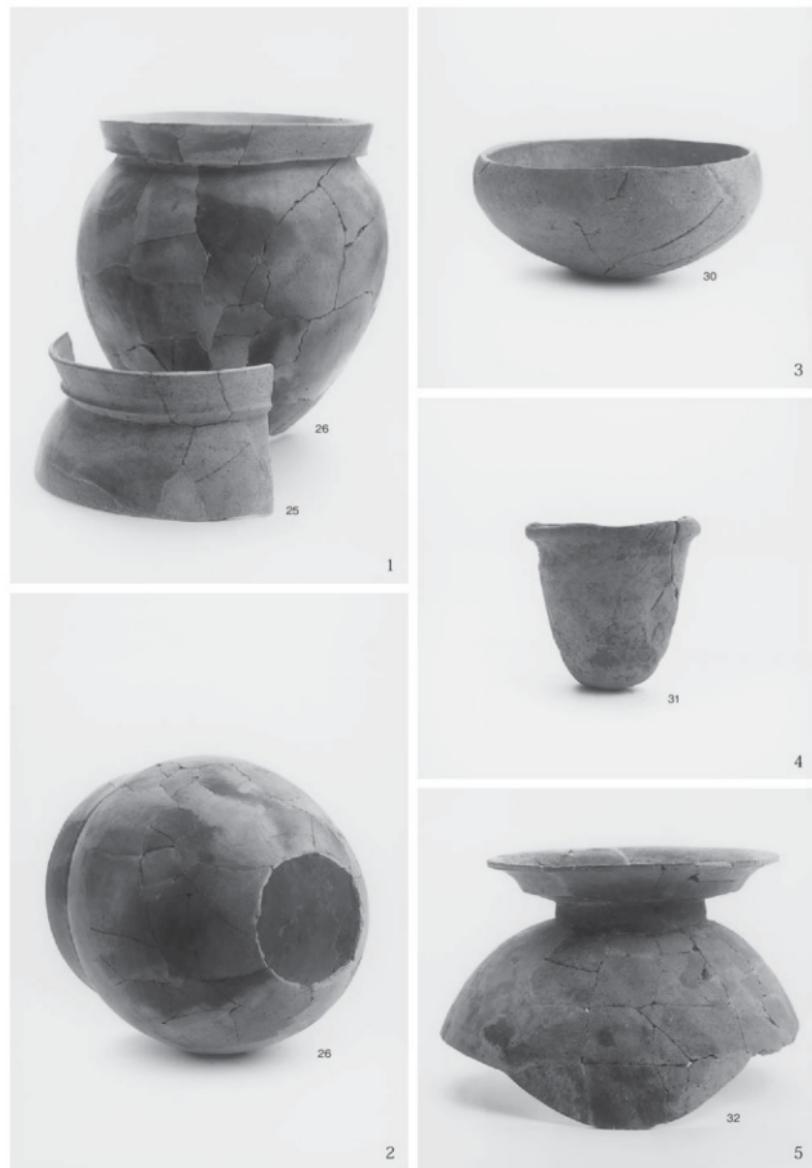
稻佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI003 出土遺物



稻佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI005 出土遺物



稻佐津留遺跡 1 区堅穴建物 SI003 (19)・SI005 (27) 出土遺物 (山陰系懶形土器)



1. 2. 稲佐津留遺跡 1 区竪穴建物 SI005 出土遺物
4. 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK039 出土遺物

3. 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK042 出土遺物
5. 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK042 出土遺物



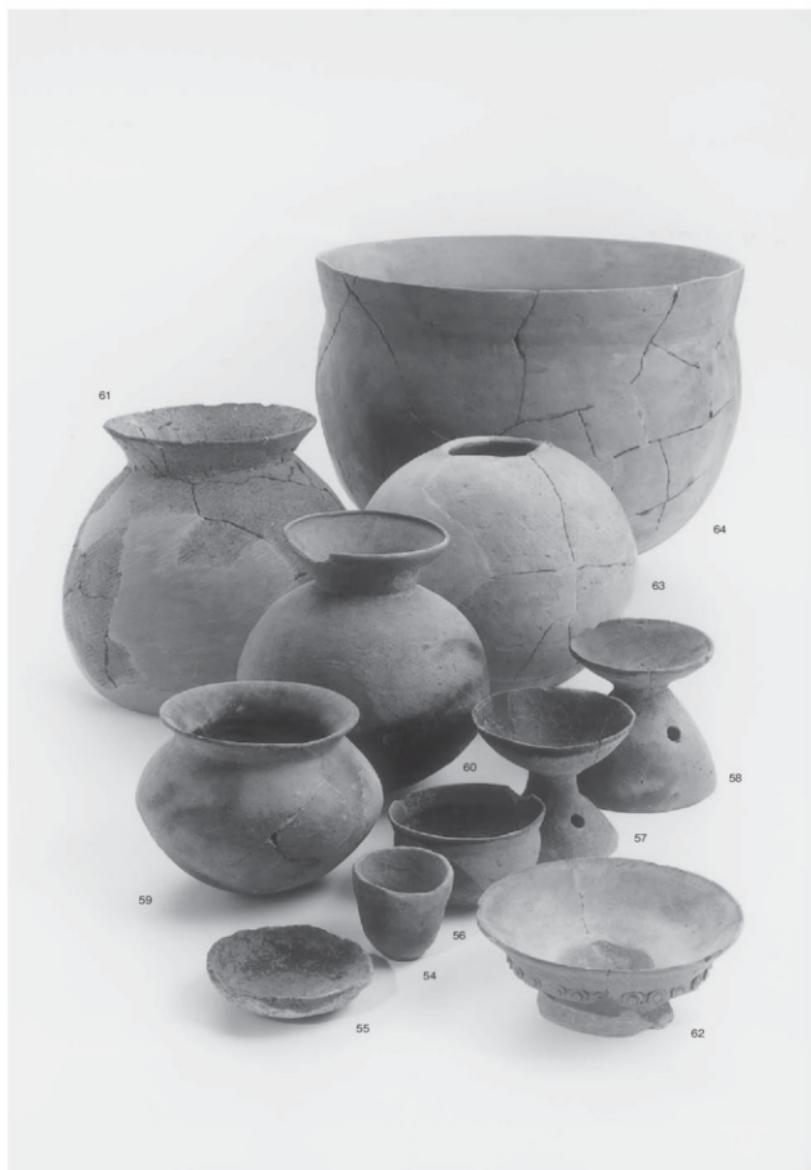
稻佐津留遺跡 2 区堅穴建物 S1014 出土遺物



稻佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI014 出土遺物



稻佐津留遺跡 2 区堅穴建物 SI015 出土遺物



稻佐津留遺跡 2 区竪穴建物 S1018 出土遺物



58



62



60



64

稻佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI018 出土遺物



1. 稲佐津留遺跡 2 区土坑 SK046 出土遺物
2. 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI032 出土遺物
3. 稲佐津留遺跡 3 区土坑 SK077 出土遺物



稻佐津留遺跡 3 区堅穴建物 SI031 出土遺物



稻佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI034 出土遺物



稻佐津留遺跡 3 区不明遺構 SX002 出土遺物



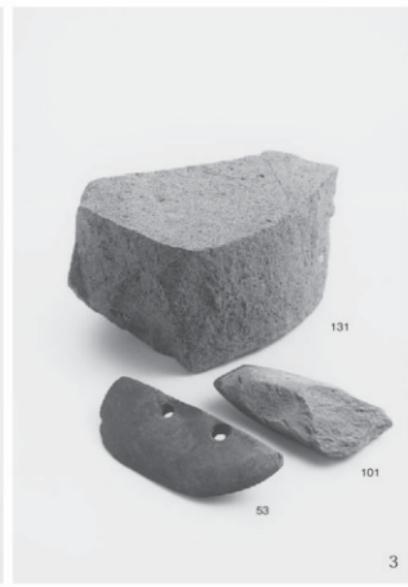
1. 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 SI052 出土遺物
2. 稲佐津留遺跡 5 区竪穴建物 SI055 出土遺物



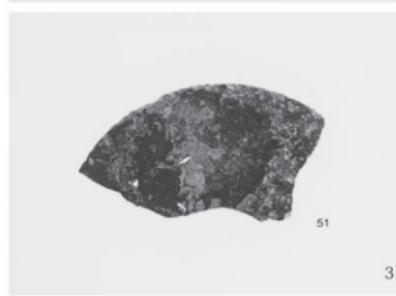
稻佐津留遺跡 5 区土坑 SK088 出土遺物



稻佐津留遺跡 7 区不明遺構 SX004 出土遺物



稻佐津留遺跡調査区出土遺物 1. 鉄器 2. 製塙土器 3. 石製品



1.2. 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI015 (巴形銅器)
3.4. 稲佐津留遺跡 2 区竪穴建物 SI016 (四乳細線鳥紋鏡)
5.6. 稲佐津留遺跡 3 区竪穴建物 SI045 (内向花紋鏡)

報告書抄録

ふりがな	いなつるいせき、さいあんじいせき はぐくちょうさほうこく
書名	稻佐津留遺跡、西安寺遺跡発掘調査報告
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第263集
編著者名	長谷部善一（編集）坂口圭太郎 今村和徳 尾方圭子（以上、調査）唐木ひとみ（整理担当）
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号 TEL 096-333-2706
発行年月日	2011年（平成23年）3月31日

所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村					
いなつるいせき 稻佐津留遺跡	熊本県玉名郡玉東町稻佐 91-1 ほか	43394	座標数値 No.4 3° 53' 53" N 130° 26' 13" E (日本測量系)	座標数値 No.4 3° 53' 53" N 130° 26' 13" E (日本測量系)	20040526 ~ 20051130	2,273.54m ²	九州新幹線 建設工事
さいあんじいせき 西安寺遺跡	熊本県玉名郡玉東町西安寺 1018	037	座標数値 No.1 3° 53' 53" N 130° 38' 40" E (日本測量系)	座標数値 No.1 3° 53' 53" N 130° 38' 40" E (日本測量系)	20071126 ~ 20071226	518m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稻佐津留遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代初頭	掘立柱建物 竪穴建物、溝、土坑	巴形銅器、四乳細縫鳥紋鏡 内向花紋鏡、弥生土器 土師器、須恵器、鐵器 石器、製塗土器	弥生後期～終末にかけ埋められた墓跡、住居跡内から山齒系土器や、青銅鏡が出土するなど、菊池川流域内の拠点集落の1つと考えられる。
西安寺遺跡	その他	中世、近世	土坑、溝	なし	なし

要約	【稻佐津留遺跡】背後にそびえる木葉山から延びる舌状の台地上には稻佐寺がある。現在は、熊野座神社があるが、その下には稻佐寺に関する礎石が多く残されている。
	今回の発掘調査では、稻佐寺に関する遺構が確認されると想定したが、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡を主として確認した。
	調査を実施した弥生時代の遺構は、主に後期の竪穴建物で、平面が長方形を呈する。内部にベッド状遺構を有し、2本柱を主とするものである。出土遺物は、菊池川流域に広く分布する脚付甕が出土し、ハケ目調整からタキマ調整へと変化する過程を表している。また、古墳時代初頭の遺物は主として布留系土器を中心とする古式土師器が主体である。
	当地に弥生時代の遺跡があると想定した初出の文献は「玉東町史」六 玉東町の弥生時代遺跡、「稻佐寺のある台地の南側斜面…」と報告がなされている。

【西安寺遺跡】	遺跡名称のもととなった「西安寺遺跡」は熊本県遺跡地図に記載され、周知の埋蔵文化財保護地として広く周知されているところである。古くから弥生土器が出土する遺跡として知られているが、調査等はおこなわれておらず、詳細は不明である。
	今回の調査結果として、本書では西安寺遺跡との関連よりも、丘陵下段に位置している西安寺製鉄遺跡（町史には「寺中尾遺跡」として記載あり。）との関連を指摘する。
	製鉄遺跡（遺構）が広がると想定される位置から段上りの平坦地に位置しており、採業を管理する場所との想定をする。
	玉東町には三ノ岳の北側中腹から山麓にかけて、10箇所の製鉄遺跡が知られている。このうち6箇所は「生産遺跡基本調査」熊本県教育委員会（1978年昭和53年）報告時までに調査報告がなされているが、玉東町史編纂事業に伴い4箇所が新たに発見され、精錬を含む製鉄関連遺跡群が多く残る県内でも特異な地域の一つである。

自刷仕様

- 版型／A4版
- ／頁・A3折
- 組版／写真写植（13級 小字明朝Pro）
- 製版／スクリーン線数220線で製版
- 用紙／表紙（アートボスト 220kg PP貼）

本文（マットアート 110kg）

写真図版（特アート SA 金葉 4/6 判 135kg）

- 製本／左糸綴じ

熊本県文化財調査報告第 263 集

稻佐津留遺跡・西安寺遺跡

発行年月日 2011 年（平成 23 年）3 月 31 日

著作権所有者

発行者 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市水前寺 6丁目 18番 1号

<http://www.pref.kumamoto.jp/>

印刷 シモダ印刷株式会社

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 263 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 稲佐津留遺跡 西安寺遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL : <http://www.kumamoto-bunho.jp/>